岩 波 文 庫

32-064-1

シャクンタラー姫

カーリダーサ作
辻 直四郎訳



岩 波 書 店

KĀLIDĀSA:

ŚAKUNTALĀ

A Monsieur Louis Renou,

en hommage reconnaissant.

まえがき

インドの古典劇シャクンタラーおよびその作者カーリダーサについては、巻末の「カーリダーサとその作品」でやや詳しく紹介したから、ここには繰り返さない。インドではものを数えるのに小指から折り始めるが、インド第一の詩人として、まずカーリダーサに小指を屈した後、次に続く詩人がいないので、薬指は無名指と呼ばれるに至ったという。インドの古典文学については、あまり知られていないから、代表的詩人の作品で紹介したいものは多々あるが、古来文学は劇、劇はシャクンタラーと伝えられている名声にそむかぬものとして、これを選んだ。

シャクンタラーには数種の伝本があるが、本書はその一つベンゴール本によった。この伝本が原作の姿を最も忠実に保存しているという説に賛成したわけではなく、この伝本のテキストが最も批判的に出版されているからである。ベンゴール本に重複や追補のあることを認めつつも、今は何等の取捨を加えず、これをそのままに訳出するに努めた。

サンスクリットの詩文を和訳する場合に、いつも訳者を当惑させるのは、文体用語の問題である。現存する作品から判断して、インドの詩人は概して寡作家であったらしい。しかし有名な作

家は、音調・措辞・修飾に、文字通り骨身を削る苦心をしたに違いなく、とうてい他国語に移し得ない特色をもっている。この美文体を現代の口語に訳しては、原作の面影を遠く離れるのを恐れて、擬古体を用いることとした。しかし簡潔な表現を直訳しただけでは、意味の通じないところも多いので、やむなく翻訳自体が説明的になり、冗長になり、訳文の長短は必ずしも原文の詩節（行末のカッコに入った和数字は詩節の番号に照応する）のそれに相応しない結果となった。もちろん翻訳技術の拙いことによるもので、読者の寛恕を乞う次第である。注記は古代インドの事情に通じていない人のために加えたに過ぎず、最少限度にとどめた。また巻末の「サンスクリット劇入門」は、古代インドの演劇に興味をもつ読者への手引であり、シャクンタラーの背後にある制約を理解する一助ともなれば幸である。

一九七七年七月　　訳者

なお本書は、さきに（一九五六年）刀江書院から刊行されたものであるが、このたび岩波文庫収録にあたって表記を現代かなづかいに改め、それに伴い一部字句を改めた。

第二刷の出版にあたり若干の誤植・誤記を訂正した。東洋文庫の榎一雄教授、亀井孝教授のご教示によるところが多い。ここに深く両博士に感謝する。（一九七九年一月）

目次

登場人物

ドゥフシャンタ　ハスティナープラ(デリーの附近)に都するプル族の王。

シャクンタラー　カンヴァ仙の養い子、実はヴィシュヴァーミトラ仙とアプサラス(仙女)メーナカーとの娘。ドゥフシャンタ王の妃としてバラタを生む。

サルヴァダマナ(「一切の調御者」)　バラタの幼名。

カンヴァ　マーリニー河(ガンガー河の支流)のほとりの苦行林に住む仙者。シャクンタラーの養父。

ガウタミー　老苦行女。

プリヤンヴァダー
アヌスーヤー　｝カンヴァ仙の苦行林に住む、シャクンタラーの女友達。

シャールンガラヴァ
シャーラドヴァタ　｝カンヴァ仙の門弟。

ハーリータ　仙家の少年。

ヴィドゥーシャカ　王により友人として遇される道化役。名はマーダヴィヤ。

スータ　王の御者。

将軍バドラセーナ

侍従パールヴァターヤナ
王室附き祭官ソーマラータ
門衛ライヴァタカ
門衛女ヴェートラヴァティー
護衛女（ヤヴァニー）
腰元チャトゥリカー　メーダーヴィニーとも呼ばれる。（この点に関しベンゴール本は混乱の跡を示す。）
腰元パラブリティカーおよび**マドゥリカー**
使者カラバカ

警視総監
巡査ジャーヌカおよび**スーチャカ**
漁夫

ミシュラケーシー　仙女メーナカーの友達。
マータリ　インドラ天の御者。王を神車に乗せて運ぶ。
マーリーチャ　聖者。梵天の孫、マリーチの子、神々および人間の父として造物主と呼ばれ、神話的高峰ヘーマ・クータで苦行に従事する。

アディティ　マーリーチャの妻。ダクシャの娘として、ダークシャヤニーとも呼ばれる。
ガーラヴァ　マーリーチャ聖者の門弟。
二人の苦行女　サルヴァダマナの守り役。その一人の名はスヴラター。

その他、**王の従者、苦行者、苦行女。**

楽屋内の声　特にシャクンタラーを詛う仙人ドゥルヴァーサス。王宮に奉仕する二人の伝令（ヴァイターリカ）

場　所

第一幕・第二幕・第三幕・第四幕　マーリニー河畔にあるカンヴァ仙の苦行林。
第五幕　ハスティナープラにおけるドゥフシャンタ王の宮廷。
第六幕　同じく庭園。
第七幕　ヘーマ・クータにおけるマーリーチャ聖者の修行所。

序幕（座頭と女優との対話）

現に見ゆる八つのみ姿——創造主が太初の創造〈水〉、掟たがえず献げたる供物を空に運ぶもの〈火〉、祭祀ただしく司るもの〈祭官〉、時の巡り定むる二つのもの〈日月〉、万有に遍満し響を耳に伝うるもの〈精気〉、人呼びて一切の種子の胎となすもの〈地〉、これありて生類の息吹きし得るもの〈空気・風〉——この八相もて自在天〈主神シヴァ〉のおんみらを、恵みも深く守り給わんことを。　(一)

祝禱の終った後

スートラダーラ　（座頭）　この上ながながと申すは無用。（楽屋の方を眺めて）女優どの、身仕度ができたら、こちらへおいでなされ。

女優　（登場して）座頭さま、参じました。どのような役をつとめましょうやら、お指図くださりませ。

スートラダーラ　女優どの、ご見物衆はあらまし、みな教養の高い方々。その前でわれわれは、カーリダーサの新作、アビジュニャーナ・シャクンタラムと申すお芝居を演じて、御機嫌をとりむすばねば相ならぬ。それゆえ役々に従って、みな懸命に勤めますよう。

女優　座頭さまの抜目のないご演出により、何一つ手落ちはございますまい。

スートラダーラ　（笑みを含んで）女優どの、ものの道理をそなたに語り申そう。

歌舞伎の道の　学匠の　こころに適う　それまでは　舞台の技の　功なると　われは思わず。巧みの奥を極めつる　ひとの心の　いかばかり　いみじかりとも　自らに　安らい果てず。　（二）

女優　まさにその通りでございます。座頭さまには、ただいますぐ致さねばならぬことを、お申しつけくださいませ。

スートラダーラ　女優どの、このご見物衆のお耳を楽しませるために、歌を歌うことよりほかに、今すぐせねばならぬことがあろうか。

女優　それならどの季節を題として、歌えばよろしいのでございましょう。

スートラダーラ　女優どの、いま始まって間もない、楽しみごとにことかかぬ夏の季節を題にとって、歌うが何より。と申すのも、今や、

水にくぐるも　こころよく　パータリ花の　移り香に　森のそよ風　かぐわしく　まどろみさそう　木の間陰　夕べぞことに　めでたかる　往く日来る日の　いみじさよ。　（三）

女優　（歌う）そと蜜蜂の　口づけし　蕊（しべ）さき　いとも　柔かきシリーシャの花、君見ずや、恋の乙女のいとしげに　耳にはさむを。　（四）

スートラダーラ　女優どの、美事に歌われた。ご見物衆はあの通り、隅から隅まで、恋の歓びに心うばわれて身動きもなさらず、まるで絵にかいたように見うけられる。さて何の芝居をご覧にいれて、ご機嫌を伺うことをいたすかな。

女優　先ほど座頭さまは、アビジュニャーナ・シャクンタラムという、今までにためしのないお芝居をいたすようにと、お命じなされたばかりでございますのに。

スートラダーラ　女優どの、ほんに思いだし申した。今が今とてそのことを忘れておった。何となれば、

なが歌声の　いみじさに　われとはなしに　誘われて　心もよそに　奪われつ。速（と）き羚（かも）羊（しか）に　さそわるる　そこなドゥフシャンタ王のごと。　（五）

両人退場

序幕　終

第一幕　狩猟

その時、車に乗り弓矢を持ち、羚羊を追いつつ王、御者と共に登場

御者　(王と羚羊とを眺めて)陛下、
弓ひきしぼる　わが君と　羚羊の上に　目をやれば　ピナーカ*の弓　執りもちて　鹿追
いたつる　荒神を　まのあたり見る　思いあり。　(六)

*注　ピナーカはシヴァ天の弓の名。シヴァ天がダクシャの馬祀に招かれなかったのを怒り、祭場に乱入し、鹿となって逃げるヤジュニャ(祭祀)を追撃したという神話を指す。

王　御者、あの羚羊のため　われらは遠くいざなわれてきた。その羚羊は今、
めぐらす頸も　愛らしく　あと追う車　見かえりて　落す眼指(まなざし)の　あまたたび　降りく
る　矢先恐れてか　臀(いしき)さながら　肩の辺に　かくるるばかり　さし入りつ。つかれて開
く　口もるる　なかば嚙まれし　若草は　馳せゆく路に　散りしきて、見よ、地をふむ
脚の　ひまをなみ　高く躍りて　天翔(あまがけ)りゆく。　(七)
(驚いて)こはいかに、あと追う余さえ、あやうく見失いそうになりおるわい。

御者　陛下、地面が険しいと存じ、手綱をひきしぼりましたので、車の速力が落ちたのでございます。そのため羚羊はこの通り、われらを遙かにひき離しております。今は平かな場所を走っておりますゆえ、陛下が追いつき遊ばすに難くはございますまい。

王　さらば手綱をゆるめるがよい。

御者　陛下のご命令のままに。（車の速力を示すこなし）陛下、ご覧あそばしませ。実にこれらの

君が駿馬の　勇ましく　手綱のゆるみに　気を負いて　前軀おのずと　長くのび　おのがしりえに　立ちのぼる　土煙さえ　近づけず　額に立てし　チャーマラの*　先もゆるがず　すぐ立てる　耳も動かず　ひたむきに　道馳せかけり　躍りゆく。（八）

＊注　ヤクの尾の毛で作った払子。王者の随身具の一つ、馬の額の飾としても用いられる。

王　（喜んで）なんとわが馬は、羚羊を追いぬく勢で走りおるわい。と申すのも、

目路はるかには　細きもの　忽ちいとも　ひろやかに、割れて二つに　見えしもの　今はさながら　合わさりて、自性本来　曲がれるも　直ぐなるがごと　目には見ゆ。車の進み　速ければ　われに遠しと　いうものなく　しばしも脇に　とどまらず。（九）

（楽屋の内で）おお、おお、王よ、庵のその羚羊殺すべからず、殺すべからず。

御者　（耳を傾け、うち眺めて）陛下、すでに君の矢頃に入りましたその羚羊をさえぎって、

苦行者両名たち現われました。

王　（驚いて）さらば手綱をひきしぼれ。

御者　陛下のご命令のままに。（と言って、その通りにする）

その時、弟子を伴い、隠遁者登場

苦行者　（手をさしあげて）おお　おお、王よ、これはまぎれもなく庵の羚羊でござる。

な射たまいそ　君が征矢　この柔き　鹿の身に、群なす花に　火をはなつにも　似たらずや。大いなるかな　その隔たり　小鹿の露の　玉の緒と　堅き矢箭も　いかめしく　鋭く射ぬく　君が矢と。（一〇）

されば番えし　その征矢を　とくとくはずし　給えかし。君が弓矢は　幸なさに　なやめる者を　守るべく　罪なきものを　射るにふさわず。（一一）

王　（敬礼して）矢は取りはずしました。（と言って、その通りにする）

苦行者　（喜んで）それは正に、プル族の出身にして諸王の燈明たる陛下に、ふさわしいことでござる。必ず天地両界を支配する転輪聖王*を息子として得られんことを。

＊注　世界を統一する理想的聖王。

王　（敬礼して）バラモンのお言葉、ありがたくお受けつかまつる。

両苦行者　王よ、われら両人は、薪を採るために立ちいでたところでござる。してそのマ*

ーリニー河の岸沿いに見ゆるは、われらが師匠カンヴァ仙の庵にて、シャクンタラー姫を、いわば守り神といたしておる次第。もしほかの用務のさし障りとなりませぬならば、そこに立ち寄られて賓人のもてなしを受けたまえ。

そしてまた、

苦行にはげむ　人々の　正しき勤め　つつがなく　行わる見て　君知らん、弓弦の擦れの　痕あとの　しるきなが腕　いかばかり　民安らけく　護るかを。　（二）

＊注　ガンガー河の一支流。アヨーディヤー（サーケータ）の西北約五〇マイルの所でガンガー河に合流する。

王　してそこに家長どの〈カンヴァ仙〉は、ご在宅なされてか。

両苦行者　今はちょうど、息女に賓人のもてなしを申しつけられ、その息女の不吉な運命を払い鎮めるため、ソーマ・ティールタ＊へ旅立たれてござる。

＊注　グジャラート海岸、ソーマ・ナータ祠に近い巡礼地。

王　さようなれば、ご息女にお会いつかまつろう。ご息女には余の誠意をとくと知られた上、余のことを大仙にお伝えくださることと存ずる。

両苦行者　さらばわれらはこれにてご免。（と言って、弟子を伴い隠遁者退場）

王　御者、馬を駆れ。神聖な庵を眺めて、われは心を清めることにいたそう。

御者　陛下のご命令のままに。（と言って、再び車の速力を示すこなし）

王　（四方を眺めて）告げられずとも、これが苦行林の聖域だということは、すぐわかる。

御者　それはまたいかにして。

王　そちにはなぜわからぬのか。何となれば、ここでは、

樹々の洞の　巣に宿る　鸚鵡のひなの　口もるる　米は根方に　こぼれ散り、イングディー＊の実　砕くらん　石の面の　つやめきて　目にいちじるし　ここかしこ、こころ安けき鹿の群　そぞろ歩きの　足なみに　人の声音も　気にさえず、池の辺かよう　木暗路　木の皮衣＊＊　裾つたう　滴のすじに　それと知る。　（三）

また、

時つそよ風　吹くなべに　せせらぎ水の　波だてば　木の根も白く　洗われつ。護摩の煙の　くすぶりに　若芽のみどり　色かわる。草刈りとりし　園ちかく　小鹿の群の恐れなく　そぞろ廻る　のどけさよ。　（四）

＊注　この植物の実から油をとり、燈油または塗油として用いる。

＊＊注　隠遁者の常用服は、樹皮を材料として作られる。

御者　すべてその通りでございます。

王　（少し中に入って）御者、庵の妨げにならぬよう、ここに車を停めよ。そして余は下車い

たす。

御者　手綱をひきしぼりました。陛下にはご下車あそばしませ。

王　（下車し、自身を眺めて）御者、苦行林には質素なみなりではいらねばならぬ。されば今、この身の飾と弓とを受け取れ。（と言って、御者に渡す）余が庵に住む人々を訪れて、戻って参る間に、馬の背を水でうるおしてやれよ。

御者　ご命令のままに。（と言って、退場）

王　（歩み廻り、うち眺めて）これが仙者の庵じゃ。早速はいることにいたす。（入るや否や前*兆を感じたこなし）ああ、

こはそも寂寞仙境の裡　しかもわが腕痙攣す。聖俗不思議に相容れず　如何かこの果ここに実るべき。さもあらばあれ当来の門　到るところに開きて量るべからず。（一五）

＊注　男子の右腕の痙攣するのは吉兆で、間もなく愛人をかち得ることを示す。ただしこの前兆が聖域で起ったことを、王はいぶかる。

（楽屋の内で）　こちらへ、こちらへ、いとしいお友達がた。

王　（耳を傾けて）ああ、植込の右手から、話し声が聞える様子。よし、近づいて見よう。（歩み廻り、うち眺めて）ああ、苦行者の娘御たちが、自分の力相応の水瓶で、若木に水をやるため、こちらへやって参る。おお乙女らの姿の何と美しいこと。

ひなの庵に　人こそ知らね　住む乙女らの　このやさ姿　宮居の奥に　色香を競う　うまし女たちに　尋めがたからば、園の蔓草　品劣らまし　よもぎが杣に　つるだつ草に。（一六）

こうしている間、かげに身をよせて、乙女たちを待つことにいたそう。（と言って、見守りつつ立つ）

その時、シャクンタラー上記のごとき仕事にせわしく、二人の友達と共に登場

友達の一人　シャクンタラーさま、カンヴァお父さまには、庵の木の方があなたより可愛いのだと存じますわ。*ナヴァーマーリカーの花のようにしなやかなあなたに、この木々の間に掘った溝を、水で満たすようにお命じになったところから考えますと。

＊注　ジャスミン、素馨、茉莉花の類。

シャクンタラー　アヌスーヤーさま、ただお父さまのお言附と申すだけではございませぬ。わらわもまたこの木々に、はらからのいとしさを感じます。（と言って、木に水を灌ぐこなし）

プリヤンヴァダー　シャクンタラーさま、夏の季節に花を咲かす庵のこの木々は、もう水をもらいました。これから花時のすんだ木にも水をやりましょう。そうしてこそ、正しい務めは、片手落ちなく立派なものとなりましょうほどに。

シャクンタラー　プリヤンヴァダーさま、よいことを仰せられます。（と言って、更に木に水を灌ぐこなし）

王　（独語）これはいかに、これがカンヴァ仙の息女シャクンタラー姫とな。（驚いて）おお、この乙女に木の皮衣を纏うように命じるカンヴァ仙殿は、目先のきかぬお方じゃのう。

妙なる姿　ことさらに　つくりはせねど　魂とかす　この手弱女に　あらけなき　つらき苦行を　負わしむる　聖つれなし、蓮花　やわき花びら　刃とし　＊シャミーの枝を断つにたとえん。　（一七）

ままよ、安心している姫を、木にかくれてしばし眺めることにいたそう。（と言って、かくれて立つ）

＊注　木質の堅いので知られる木。

シャクンタラー　アヌスーヤーさま、プリヤンヴァダーさまが、この木の皮衣をあまりきつくお結びなされましたので、ひどく苦しゅうございます。それゆえどうぞ、これをおゆるめくださいませ。（アヌスーヤーゆるめる）

プリヤンヴァダー　（笑って）それについては、乳房をふくらますご自分の若さの仕業をお咎め遊ばせ。

王　この女性の言うことは正しい。

木の皮衣　肩の辺の　細きゆいめに　むすばれて　まろき乳房の　高まりを　蔽いかくせば　あやにくに　若さみなぎる　この姿　おのずからなる　いみじさを　示しもあえず、色あせし　木の葉に花の　埋ずもるるごと。　（一八）

木の皮衣はこの年頃に、ふさわしくないとはいえ、飾の美しさを、添えぬとは申されまい。何となれば、

＊シャイヴァラに　まつわれつつも　はちす花　見る目うるわし、月の面に　浮ぶまだらの　暗けれど　さやけき光　添いまさる。木の皮衣　きてさえも　たぐいなよびし　この乙女　あてにしみらに　魂とかす。ことにめでたき　姿には　何か飾と　ならざらん。　（一九）

＊注　池の面に拡がり、蓮に絡まる水草。

シャクンタラー　（前方を眺めて）お二人さま、このマンゴーの木は、風にゆらめく若枝で、わらわに何か話しているように見えまする。それでわらわは、その木のところへ参ります。（と言って、その通りにする）

プリヤンヴァダー　シャクンタラーさま、ちょっとの間に、そこにじっとお立ち遊ばせ。

シャクンタラー　何のためでございます。

プリヤンヴァダー　あなたがそばにお立ちになりますと、そのマンゴーの木は、蔓草にまつわられたように見えまする。

シャクンタラー　さればこそあなたは、プリヤンヴァダー〈快きことを語る女の意〉とお呼ばれなさるのでございます。

王　プリヤンヴァダーの言うところは、まちがっておらぬ。と申すのも、あの姫の

若葉の色と　つや競う　赤き唇、やわらかき　瑞枝(みずえ)にまごう　両かいな　さかりの花か
なよめける　若さあふれて　身には添う。　（二〇）

アヌスーヤー　シャクンタラーさま、自ら選んでマンゴーの木の妻となったこのナヴァマーリカーは、あなたに「森の月光」と名づけられました。

シャクンタラー　（近づき、うち眺め、喜んで）アヌスーヤーさま、この二本の木の睦みあいは、ほんにうるわしゅうございます。ここにはナヴァマーリカーが、新しい花もたわわに若さにあふれ、そこにはまたマンゴーの木が実をつけて、楽しみを待つばかりになっておりますほどに。（と言って、見つつ立つ）

プリヤンヴァダー　（笑みを含んで）アヌスーヤーさま、何のわけがあってシャクンタラーさまが、「森の月光」をとりわけしげしげと、お眺め遊ばすか、ご存じですの。

アヌスーヤー　まるで見当がつきませぬ。お話しくださいませ。

プリヤンヴァダー　『「森の月光」が似合いの木と一緒になったように、わらわもまた、自らにふさわしい婿君を持ちたいもの』と、お考え遊ばして。

シャクンタラー　それはあなたさまご自身の心にあるお望みでございます。（と言って、瓶の水を注ぐ）

アヌスーヤー　シャクンタラーさま、ここにあなたと同じように、カンヴァお父さまが、お手ずからお育てなされたマーダヴィー・ラターがございます。あなたはそれを忘れておいで遊ばしますわ。

シャクンタラー　そうといたしましたら、わらわ自らをさえ、忘れることになりましょう。（その蔓草に近づきうち眺め、喜んで）あら不思議、あら不思議。プリヤンヴァダーさま、嬉しいことをあなたにお知らせいたします。

プリヤンヴァダー　シャクンタラーさま、わらわに嬉しいこととは、何でございます。

シャクンタラー　花の咲く季節でもありませんのに、このマーダヴィー・ラターは、根元まで蕾に蔽われておりまする。

二人の友達　（急ぎ近づいて）シャククンラーさま、ほんにほんとでございますか。

シャクンタラー　ほんとでございますとも。なぜご覧あそばしませんの。

プリヤンヴァダー　（よく眺め、喜んで）それではご返礼に、嬉しいことをあなたにお知らせいたします。あなたは間もなく、ご結婚あそばすでございましょう。

シャクンタラー　（むっとして）それはきっとあなたさまご自身のお望みでございます。

プリヤンヴァダー　決して戯れに申しているのではございませぬ。わらわはカンヴァお父さまのお口から、この前兆はあなたの幸運を示すものと、伺っておりまする。

アヌスーヤー　プリヤンヴァダーさま、さればこそシャクンタラーさまは、愛情をこめて、マーダヴィー・ラターに水をおやり遊ばすのですわ。

シャクンタラー　あれはわらわの妹でございますもの、どうして水をやらずにおられましょう。（と言って、瓶の水を注ぐ）

王　そもそも姫は、家長どのと階級*を異にする女性の腹から生れたのであろうか。しかし疑惑は無用じゃ。

疑いもなく　武夫（もののふ）の　妻にめとるに　ふさわしや、日ごろ気高き　わがこころ　かくあこがれて　望むとは。定めかねたる　おりおりは　心の奥の　ささやきぞ　世のよき人の　たよりなる。　（二一）

とはいえ、ありのままに姫を観察することといたそう。

＊注　もし姫の両親がバラモン階級に属するならば、王と姫との結婚は、法典の規定に背く。せめて姫の母親が、自分と同じように、クシャトリヤ階級の出身であることを、王は望んでいる。

シャクンタラー　（仰天して）あれ、蜜蜂がナヴァマーリカーから飛び立って、わらわの顔に向って参ります。（と言って、蜜蜂に悩まされたこなし）

王　（欲望にみちて）ここにかしこに　蜜蜂の　飛びゆくままに　ここかしこ　かわゆきまなこ　移しつつ　なまめきひそむ　眉とじめ　恋は知らねど　手弱女は　恐れのゆえにながし目を　送る秘（ひ）めわざ　今日まなぶ。　（二二）

また、（不快らしく）

まなじり軽く　うごめきて　おののくまなこ　いくたびか　いましは触れつ、みそかごと　ささやくに似て　ほのあまき　羽音かそけく　耳もとを　かすめては飛び、いといつつ　払う手もとに　つけいりて　愛のうま汁　みちたとう　君がくちびる　なれは吸う。まこと求めて　ためらえる　われ敗れたり、蜜蜂よ、望みをとげし　なれ勝ちほこる。　（二三）

シャクンタラー　お二人さま、この意地悪の蜜蜂に、苛められているわらわをお救いくださいませ。

二人の友達　（笑みを含んで）わらわたちにお救いする力がございましょうか　それにはドゥフシャンタさまを、お念じ遊ばせ。苦行林は王さまに守護されるものでございますほどに。

王　今ぞ姿を現わすによい機会じゃ。恐れるには及ばぬ。（と半ば言って、独語）そういたすと、余が王であることが分ってしまう。よし、賓人（まろうど）のさまをよそおうことにいたそ

う。

シャクンタラー　このいたずら者は、まだやめませぬ。それゆえわらわは、よそへ参りましょう。(一歩進み、あちこち見廻して)やれやれ、まあここまでわらわの後を追って参ります。なにとぞお救いくださいませ。

王　(急ぎ近づいて)ああ、

いやなき者を、うちこらす　プルの族の　世を知るを　苦行の森に　生いたちて　塵に
汚れぬ　乙女子に　誰ぞや無礼げに　ふるもうは。　(二四)

皆々王を見て、少しく当惑のてい

アヌスーヤー　殿さま、別に恐しいことが起ったのではございませぬ。実はわれわれのこの仲よしの友達が、蜜蜂に驚いて、とり乱しているのでございます。(と言って、シャクンタラーを指し示す)

王　(シャクンタラーに近づいて)苦行恙のうござるか。(シャクンタラー驚愕して、うつむき立つ)

アヌスーヤー　ただ今のところ、苦行は栄えておりまする、すぐれた賓人を、お迎え申したことなれば。

プリヤンヴァダー　ようこそおいでくだされました。シャクンタラーさま、さあ、小屋から木の実など、*おもてなしの品々を取っておいで遊ばせ。おみ足のすすぎ水は、これにいたしましょう。

*注　客を迎えた時は、先ず洗足の水をだし、米・ドゥールヴァー草・花・果実等に清水を添えて与える。

王　淑女よ、親切なお言葉だけで、もてなしはすんだというもの。

アヌスーヤー　それならば、自ずと涼しいこのサプタパルナの木の下の腰掛にお坐り遊ばして、お疲れをおいやしなされませ。

王　そなた達も、その務めの仕事で、定めしお疲れのこと。さればしばし憩われたがよろしかろう。

プリヤンヴァダー　(シャクンタラーだけに聞えるように)シャクンタラーさま、賓人にかしずくのは、われらの務め。されば、さあ、われらも坐りましょう。(と言って、皆々坐る)

シャクンタラー　(独語)何としたことか、このお方を見て、苦行林にそぐわぬ心のざわめきを、覚えるようになりました。

王　(一同を眺めて)おお、年頃も美しさも同じのこととて、そなた達の友情は、うるわしいことでござる。

プリヤンヴァダー　(アヌスーヤーにだけ聞えるように)アヌスーヤーさま測り知れぬ荘重なお姿で、やさしい言葉をお語りなされ、威厳と慇懃とをお示し遊ばすこのお方は、いったい

どなたなのでございましょう。

アヌスーヤー　プリヤンヴァダーさま、わらわもまた知りたくてたまりません。そのお方にただ今お尋ねいたしてみましょう。（一般に聞えるように）殿さまの優しいお言葉を聞いて、信頼の念が高まり、お伺い申す気になりました。そもそもどの王仙*のお血筋が、殿さまによって飾られておりますか。またどのお国が、殿さまとの別離を歎いておりますか。なぜ殿さまは雅たお姿をもって、わざわざ苦行林をお訪ね遊ばす気になられましたか。

＊注　王族から出て聖者となった者。

シャクンタラー　（独語）わが胸よ、気を落してはなりませぬ。お前が考えていることを、アヌスーヤーさまが口にだしてくだされます。

王　（独語）さて今わが身の素姓を明かしたものか、またはわが身分をかくしたものか。（熟慮して）よし、このように申しておこう。（一般に聞えるように）淑女よ、余はヴェーダ*の学匠にて、プル族の王により、都の司法の役を仰せつかりし者、神聖な庵を拝見つかまつりたく存じて、苦行林へ参ったのでござる。

＊注　バラモン教の根本聖典の総称。

アヌスーヤー　苦行林に守護者ができました。

シャクンタラー愛情の羞恥を感じるこなし

二人の友達　（両人の感動に気づいて、シャクンタラーにだけ聞えるように）シャクンタラーさま、もし今日お父さまが、ここにおいでになりましたら、

シャクンタラー　そうしたらどうなると仰せになりますの。

二人の友達　そうしたら命に等しい宝物（シャクンタラーを指す）をもさしあげて、この立派な賓人を満足させることでございましょう。

シャクンタラー　（怒ったふりをして）いやなお方。何ぞ心に思うところあっての話しよう。あなたさま方のお言葉は、もう聞きとうございませぬ。

王　余もまた、あなた方のお友達のことにつき、ちとお尋ね申したき儀がござる。

二人の友達　殿さま、お求めはわれらにとって、ありがたき仕合せ。

王　カンヴァ仙は常住の梵行（禁欲生活）を修せられるに、あなた方のお友達が、その息女とはいかなこと。

アヌスーヤー　殿さまにはお聞き遊ばしませ。族名によってカウシカと申す、大威力ある王仙（ヴィシュヴァーミトラを指す）がございました。

王　かくれもなきカウシカ仙人のこと。

アヌスーヤー　そのお方こそ、われらが友達の父御とご承知くださいませ。しかし捨子を

王　拾い育てられましたによって、カンヴァさまがあの方の養い親でございます。されば初めから詳しく承りたく存ずる。

アヌスーヤー　殿さまにはお聞き遊ばしませ。昔その王仙が、激しい苦行をつんでおられました時、神々は何か恐れを感じられ、戒行の障礙をさせるため、メーナカーと申すア*プサラスを遣わされました。

＊注　インドラ天の世界に住む仙女。メーナカーはその最も有名なものの一人。

王　神々がそのように、他人の瞑想三昧を恐れることは、ままあるならい。

アヌスーヤー　しかも春立ちそめた麗かな時に、恋心をそそるその姿を見て、（と半ば言って、羞恥のこなし）

王　その先は言わずとわかる。あの女性は、まぎれもなくアプサラスから生れた方。

アヌスーヤー　しかとさようにござります。

王　そうなくてはならぬこと。
人の親より　いかにして　かかる姿の　生れいでん。空にひらめく　いなずまは　たちのぼるまじ　地のもより。（二五）

シャクンタラー恥かしそうにうつむき立つ

王　（独語）うれしや、わが願望のかのう道がひらけた。

プリヤンヴァダー　（笑みを含み、シャクンタラーを眺めて）殿にはもう一度お話しになりたいご様子。

シャクンタラー指で友達をたしなめる

王　正にあなたのご判断の通り。清い生活につき、お聞きいたしたい儀がござれば、なおほかのことをお尋ね申さねばならぬ。

プリヤンヴァダー　そのお気使いには及びませぬ。苦行女たちには何なりとご遠慮なく、お申しつけ下さいませ。

王　お尋ね申したきはこの事、
嫁ぎの日まで　かの姫は　世の恋風を　よそに聞く　森の苦行の　ちかいごと　守りたもうや。あるはまた　末の末まで　すずろげる　眼指も同じ　羚羊を　侶としここに住まるるや。（二六）

プリヤンヴァダー　殿さま、あの方は、務めを果すことさえも、他人の意志に従わねばならぬ身の上。しかしお師匠さま〈カヴァン仙〉はあのお方を、似あいの婿君に嫁がせるおつもりでおられまする。

王　（喜んで独語）

のぞみに奮え　わが胸よ　いま疑いの　雲はれつ。火と見て汝が　恐れしは　触れて悔いなき　うずの珠。（二七）

シャクンタラー　（怒ったかのように）アヌスーヤーさま、わらわはあちらへ参ります。

アヌスーヤー　それはまた何として。

シャクンタラー　ここでプリヤンヴァダーさまが、とりとめもないことを、お口走りなされますのを、ガウタミー尼さまにお知らせするつもりでございます。（と言って、立ちあがる）

アヌスーヤー　シャクンタラーさま、おもてなしもすまさずに、立派な賓人をうちすてて、勝手気ままにたち去りますのは、庵に住む者にふさわしくございませぬ。

シャクンタラー返事をしないで、たち去ろうとする

王　（独語）何と、行ってしまうのか。（捉えようとするかのごとく立ちあがり、欲望を制して）おお、恋する者の心のはたらきは、体を動かしたと同じ気のするものじゃ。何となれば余は、

今し聖の　娘御の　あと追わましと　思いしに　いやなきわざと　覚りては　たちまち足も　すくみにき。この場は　つゆも動かねど　君を慕えば　夢うつつ　ゆきて戻りし心地こそすれ。（二八）

プリヤンヴァダー　（シャクンタラーに近づいて）怒りっぽい方、たち去ってはなりませぬ。

シャクンタラー　（振り返り、眉をひそめて）なぜでございます。

プリヤンヴァダー　あなたはわらわに、二本の木に水をやる仕事を、借りていらっしゃいます。それをすませて、ご自由の身におなり遊ばせ。そうしてからおたち去りなされませ。

（と言って、無理に戻らせる）

王　木に水をやることで、姫はすっかり疲れておいでと存ずる。と申すのも、姫の

水くむわざの　しげければ　肩力なく　しなだるる　かいなの先の　たなごころ（掌）くれないさして　あたらしく、せわしく喘ぐ　息づかい、見よや乳房の　たゆたいに、汗のしずくの　ところせく　面輪おおえば　耳はさむ　シリーシャの花　ゆれあえず、緑の御髪　紐とけて　乱れかかれる　ほつれ毛を　片手に押う　たたずまい。（二九）

されば余が、姫の借りを返して進ぜよう。（と言って、指環を与える。二人の友達受け取って、名前の文字を読み、互に顔を見合わせる）

王　余の身の上を、あらぬ方にご推量めされるな。それは王様から拝領いたした品でござる。

プリヤンヴァダー　それなれば殿さまは、この指環とお離れ遊ばしてはなりませぬ。殿さまのお言葉だけで、このお方は借りをすませたことにいたしましょう。

アヌスーヤー　シャクンタラーさま、お情深い殿さま、いや大王さまのおかげで、あなたは自由な身になりました。さあ、今どこへおいでなされます。

シャクンタラー　（独語）自らを押えることができるなら、このお方を避けはしまいものを。

プリヤンヴァダー　こんどはどうしておたち去り遊ばしませんの。

シャクンタラー　今となってもなぜわらわは、あなたさまの自由にならねばなりませんの。気が向いた時に、たち去るでございましょう。

王　（シャクンタラーを眺めて、独語）そもそも余が姫に感じていると同じように、姫も余に対して感じているのであろうか。とはいえ、余の希望のかなう道がひらけた。

わが語るとき　自らは　あえて言葉を　交えねど　聞きもらさじと　ひたすらに　耳そばだてつ。わが前に　面を合せ　立たねども　わき目もふらぬ　眼指は　よそに向くとも　おもほえず。（三〇）

（楽屋の内で）おお　おお、苦行者たちよ、苦行林の近辺に住む生き物を護るため、用意おさおさ怠られるな。ドゥフシャンタ王が狩競しつつ近づかれたよし。

あれ、捲きあがる　砂ぼこり　駒の蹄に　蹴たてられ　蝗のむれか　天つ日の　色さえ変えて　空くらく、梢の上に　干もやらぬ　木の皮衣　たれかかる　庵の木々に　降りそそぐ。（三一）

王　（独語）これはしたり、いかなこと、余を探して軍兵どもが、苦行林をさわがしているわい。

（再び楽屋の内で）おお　おお、苦行者たちよ、老人・婦女・少年をおびやかしつつ、それそこにやって来た。

触るれば破る　威もすごく　行く手さえぎる　木の幹に　一つの牙は　折れくだけ、茂れる森の　蔓草を　ひき抜きひきずり　身にまとい、自ずとわなに　からまれど　羚羊の群　蹴ちらして　苦行障礙の　権化かや　車駕にであいて　驚ける　象王くるい　正法の　森の寂寞かきみだす。（三二）

一同聞いて、驚き立ちあがる

王　これはしたり、何と、余は苦行者たちに罪を犯したことに相なった。よし、さらば、余がたち向う。

二人の友達　殿さま、この象の狼藉のため、わたくしどもは気も顛倒しております。それゆえ小屋へ帰りますほどに、おいとまを賜りませ。

アヌスーヤー　（シャクンタラーに向い）シャクンタラーさま、ガウタミニー尼さまが驚いておいでのことでございましょう。さあ、おいで遊ばせ。わらわらもすぐさまご一緒になりまする。

シャクンタラー　(歩行困難のこなし)やれやれ、腿がしびれて動かなくなりました。

王　ご一同安心してお行きなされ。庵に障碍の起らぬよう、余は懸命につとめる所存。

二人の友達　殿さま、お気心はよく分りました。今おもてなしも半ばに終りまして失礼の段は、何とぞお赦しくださいませ。不充分なおもてなしは、かえってまた再びお目もじできる因かと、恥かしながら殿さまに申しあげます。

王　痛みいるご挨拶。淑女がたにお目にかかれただけで、余は光栄に存ずる。

シャクンタラー　わらわの足は、若いクシャ草の葉の先で傷つきました。またわらわの木の皮衣は、クルヴァカの枝にひきかかりました。それゆえそれをひき離す間、わらわをお待ちくださいませ。

と言って、王をうち眺めつつ、二人の友達と共に退場

王　(歎息して)みな行ってしまった。ままよ、余もまた行く。シャクンタラーを見てからというもの、都へ帰ることに、とんと気が進まぬ。してこれから、供の者どもを、苦行林から遙かに離れたところに、宿らせることにいたそう。ほんに余は、シャクンタラーのことにかまけるのを、やめることはできぬわい。何となれば、

からだは前に　進めども　落ちいぬ心　あとずさる、風に向いて　担わるる　旗先なびく　布のごと。　(三三)

と言った後、一同退場

狩猟と題する第一幕　終

第二幕　内証事

ヴィドゥーシャカ登場

ヴィドゥーシャカ　（溜息をついて）ああ、なさけない。この狩好きな王様の友達であるばかりに、みじめなことだ。くさくさするわい。ここに鹿が、ここに猪がという声に、時もあろうに真昼間、木陰もうすい森また森の長道を駈けめぐり、飲むものは、朽葉まじりに渋辛く、ぷんと鼻をつく山の小川のぬるま水。また時はずれに食うものは、焼きたての熱い肉。馬と象とのなき声に、夜もおちおち睡られず。まだ夜も明けきらぬ中から、碌でなしの鳥追の喚きたてる、耳をつんざく森へ出発の合図の声で、目がさめる。とはいえ、悩みはまだこれで尽きたのではない。腫れものの上にまたおできがふき出したのと同じこと。わしがお供をせぬ間に、王様は鹿を追いつつ庵の森へ踏みいって、わしにとっては不幸にも、シャクンタラーとか申す苦行者の娘を、お目にとめられた。この娘を見初めてからというもの、今は都へ帰還の儀はおくびにも出されない。このことばかり思い思って、まんじりともせぬ中に夜が明けた。何といたせばよいことやら。ともあれ

先ず、日毎の定めの通り沐浴塗香を了えられた王様に、お目通りいたそう。（歩き廻り、見廻して）王様が弓を手にして、いとしい人を心に抱きしめ、野花づくりの花環をかけ、こちらへ進んで来られる。ままよ、過労のため手足の萎(な)えたふりをして、立っておろう。こうすれば、ひょっとして、疲れ休みにありつけるかも知れぬわい。（と言って、杖にもたれて立つ）

その時、上記の姿で王登場

王　（独語）吾妹子(わぎもこ)は、まことと得がたし、さりながら　その心ばせ　目に見ては　望みに躍る　わが胸や、恋はいまだに　みのらねど　たがいに想い　想われて　愛のうま汁　すでに味おう。　（一）

（ほほ笑んで）このように、愛を求める者は、おのが望みにまかせて、いとしい人の心の動きを想像するゆえついだまされる。何となれば、

眼はよそに　向けながら　かくれて流す　やさしきまざし、腰の肉(しし)おき　重ければ　媚態(しな)と見るまで　たゆとう歩み、な去り行きそと　はばまれて　恨みがましき　友への言葉、これみな実(げ)にも　わがためと、ああ、愛はすべてを　わがものと見る。　（二）

ヴィドゥーシャカ　（前の通り立ったままで）おお、王様、拙者の手は伸びませぬ。ただ言葉だけで、君に勝利あれと申しあげます。

王　(うち眺め、ほほ笑んで)何としてそのように、手足が利かなくなったのじゃ。

ヴィドゥーシャカ　何としてとは、聞えませぬ。ご自分で目を突いておきながら、涙の出るわけをお尋ねなさいますのか。

王　余にはとんと解しかねる。はっきりと申してみるがよい。

ヴィドゥーシャカ　岸辺の籐が、せむしのまねをいたしますのは、自分の力によってでございましょうか、それとも、川水の勢によってでございましょうか。

王　川水の勢がそうさせるのじゃ。

ヴィドゥーシャカ　拙者にこうさせるのは、あなたさまでございます。

王　それはまた何として。

ヴィドゥーシャカ　あなたさまが、王者の務めと、あのように揺ぎもない安全な場所とをうち捨てて、山人のような生活をなさるのは、正しいことでございましょうか。またこの点は何と申してよいのやら、バラモンともある拙者が、くる日もくる日も、野の獣のあとを追うため、手足の蝶番もがくがくになって、われながら自由にならぬとは。されば お慈悲をお願いいたします。せめて一日、疲れ休みをお与え下さいませ。

王　奴め、ああ申しおるわい。カンヴァ仙の娘御を想うにつけ、余の心も狩にはとんと気が進まぬ。と申すのも、

手にもつ弓に　弦はりて　征矢はつがえど　鹿の群　的とししぼる　すべもなや、わが
おもう人の　そば近く　ともに住めばか　美しき　涼しのまざし　分けもつものを。(三)

ヴィドゥーシャカ　(王を眺めて)王様は、何かしら心にもって、呟いていらっしゃる。拙者は曠野に独り泣きというところ。

王　(ほほ笑んで)ほかのことなど思うものか。友人の言葉は等閑に附せぬと、考えておったのじゃ。

ヴィドゥーシャカ　(満足して)それでこそ王様万歳。(と言って、立ちあがろうとする)

王　待たれよ、申し残した言葉を聞いてくれ。

ヴィドゥーシャカ　御意のままに。

王　疲れが休まったら、骨の折れぬほかの用事があるから、余に力をかしてもらいたい。

ヴィドゥーシャカ　砂糖菓子に食らいつけとでも、仰せられますか。

王　今余が申しつけることをじゃ。

ヴィドゥーシャカ　しかと承ります。

王　これこれ、誰かある。

門衛　(登場して)王様のご命令まちあげます。

王　ライヴァタカ、すぐさま将軍を呼んで参れ。

門衛　かしこまりました。（と言って退場、将軍を伴って、再び登場）将軍、こちらへ、こちらへ。王様には、ご会談に耳傾ける用意をなされ、ここにおいで遊ばします。将軍、王様のそば近くお進みなされませ。

将軍　（王を眺めて、独語）こはいかに、狩猟と申すものは、著しい欠点を持つものだが、わが君にあっては、よいことずくめになっている。と申すのも、王様は、

弓弦ひく　あらき仕業の　たえまなく　強き日ざしを　堪えしのぎ　汗の滴に　冒され
ず　余りの肉は　落ちたれど　すこやかなれば　目にたたず、山ふみ分くる　象のごと
力あふるる　手足うるわし。　（四）

（近づいて）わが君に勝利あれ。王様、森の鹿の通い路も見つかりました。野獣のすみかも分っております。さて何かほかにいたすことがございましょうか。

王　バドラセーナ、マーダヴィヤ（ヴィドゥーシャカの名）が狩を、悪しざまに申すので、余も興味を失った。

将軍　（ヴィドゥーシャカだけに聞えるように）マーダヴィヤどの、そなたは持論を固く執るがよい。しかしわしは、主君の心に適うように話しをする。（一般に聞えるように）王様、この阿呆めは、馬鹿げたことをしゃべります。わが君が模範ではございませぬか。王様、ご覧じませ、

狩倉に　いそしむ人は　見るからに　姿ぞかろき、脂はおちて　腹ほそり　心のままの
身のはこび、恐れ怒りの　おりふしに　変る有情の　性さとる。うごく的にも　矢のた
つは　弓ひく人の　腕の冴え、狩を罪とは　いわれなし、かかる楽しみ　いずくにかあ
る。　（五）

ヴィドゥーシャカ　（怒って）出て失せろ、おお、騒動の張本人、出て失せろ。王様は今本心にたちかえられたのだ。碌でなしの貴殿など、森から森へとさんざん駈けめぐり、あげくの果ては、豺（山犬）や鹿に餓えている老いぼれ熊の口の中に、落ちこむがよい。

王　バドラセーナ、余は今仙者の庵のほとりにいるため、そちの言葉に賛成しかねる。さて今日は、

しげしげと　角もて打ちし　池水に　水牛深く　沈めかし、木かげに集う　鹿の群　心
ゆくまで　にれがめよ（反芻せよ）、沼には野猪の　長たちも　草ふみしだけ　憂いなく、
弓弦の結び　解きはなち　安けく憩え　わがこの弓も。　（六）

将軍　わが君の御意に適いますように。

王　それゆえ、弓をもって先発した者共を引き戻せ。軍兵が苦行林を乱さぬよう、また遠く離れて留まるよう、禁令を布告せねばならぬ。見よ、

苦行の森は　寂静を　いのちとはなせ　そが中に　かくれて潜む　熱気あり。指のさ

わりの　涼しかる　太陽石も*　ほかの火の　犯すにあえば　ほむら燃えたつ。　（七）

＊注　原名スーリヤ・カーンタ。太陽の光線をあてれば、高熱を発すと伝えられる神話的石の名。

将軍　わが君の御意のままに。

将軍退場

ヴィドゥーシャカ　おお、騒動の張本人、退れ、退れ。

王　（従者を眺めて）皆の者、狩の装束を脱ぐがよい。ライヴァタカ、そちも自分の役目を怠るなよ。

ライヴァタカ　大王様のご命令のままに。（と言って退場）

ヴィドゥーシャカ　王様はうるさい蠅どもを、追い払ってくださいました。それゆえ、木陰のさしかける日除に蔽われた、この石の腰掛にお坐りなさいませ。そして拙者もまたこちよく、腰を下すことにいたします。

王　案内たのむ。

ヴィドゥーシャカ　王様、こちらへ、こちらへ。（両人歩き廻り、座を占める）

王　親愛なるマーダヴィヤ、凡そ目に見るものの中で、一番立派なものを見そこなったとは、そちも目の持ち甲斐がなかったと申すものだ。

ヴィドゥーシャカ　王様が私の目の前に、おいでなさるではございませんか。

王　誰でも自分を美しいと思うものだ。しかし余は、仙者の庵を飾るあのシャクンタラー姫を申しておるのだ。

ヴィドゥーシャカ　（独語）よし、王様のこの思慕を助長せぬようにいたそう。（一般に聞えるように）王様、その女性は苦行者の娘で、求婚できませぬ以上、それを見たとて、何の甲斐がございましょう。

王　愚か者、

またたきもせで　世の人の　まなこ連ねて　うるわしき　新月あおぐ　胸のうち　深き思いの　こもらずや。　（八）

またドゥフシャンタの心は、禁制のものを追いはせぬ。

ヴィドゥーシャカ　さらばお話しくださいませ。

王　仙者の子とは　伝うれど　母は艶なる　アプサラス　捨てしをやがて　拾いあげ　手塩にかけし　養い子、ナヴァマーリカーの　花一輪　蔓を離れて　風まかせ　アルカ〈大木の一種〉の上に　落ちしごと。　（九）

ヴィドゥーシャカ　（笑って）おお、後宮の美形に堪能された王様のそのお望みは、棗に飽きた人が、タマリンドを欲しがるのと同じでございます。

王　友よ、そちはまだ姫を見ていない。それでそのように申すのだ。

ヴィドゥーシャカ　王様に讃歎の念を起させるものは、ほんに美しいに相違ございません。

王　友よ、多弁は無益、

創造の主　かつて果たせし　すべての業を　思いうかべて　美しきもの　ひとつに集め
こころの中より　生みいだせしか、底し知られぬ　神の力と　姫の姿を　想いあわせば
美の女神　ここに再び　創られしと見ゆ。　（一〇）

ヴィドゥーシャカ　たしかに、いかなる美人も、その女性の前には、顔色ございますまい。

王　余はまたこう考える。

かの姫の　欠くるとこなき　あて姿　たとえて言わば　口づけの　汚れにそまぬ　うず
の花、爪先の　傷さえ知らぬ　若木の芽、みずみずし　まだ身につけぬ　あこや珠〈真珠〉、
まあたらし　味もためさぬ　蜂の蜜、善き業の　まったき功徳、あやなしや　われはえ
知らず　この世にて　誰をか夫に　選ばんとする。　（一一）

ヴィドゥーシャカ　それでは王様が、すばやいところお選びなさいませ。その苦行女が、誰かイングディー油を頭へ塗りこくった者〈苦行者を指す〉の手に落ちませぬように。

王　姫は他人に頼る身の上。また父君も今は御不在じゃ。

ヴィドゥーシャカ　してその女性の、王様に対する愛情のほどは、いかがでございます。

王　友よ、苦行者の娘御たちは、生れつき内気なものだ。とはいえ、

顔と顔　向いて立てば　まなざしを　伏せて恥じろぎ　よそごとに　かずけはすれど
なさけある　笑みにまぎらす。つつましく　抑えにたれば　その恋は　あらわれもせず
つつまれもせず。　（一二）

ヴィドゥーシャカ　王様を一目見たばかりで、お膝の上にとび乗るわけにもまいりますまい。

王　二人の友達とつれだって立ち去る折、また姫は、余に対する愛情を、いと明らかに示された。と申すのも、

草の葉に　足きずつきぬと　いつわりて　わが手弱女は　そこばくの　歩みの後に　立
ちどまり、木の皮衣　木の枝に　かかりしこなし、ひとの目に　解くと見せつつ　顔ふ
り向けつ。　（一三）

ヴィドゥーシャカ　その女性は王様に、長逗留の食糧を、用意させたと申すもの。それでこそ王様が、苦行林にご執心あそばすわけが察せられます。

王　友よ、どのような口実で、余が再び仙者の庵へ赴けばよいか、考えてたもれ。

ヴィドゥーシャカ　ほかに口実もいりますまい。申すまでもなくわが君は、領主様ではございませんか。

王　といたしたら、何と申す。

ヴィドゥーシャカ　「苦行者共は余に、米の収穫の六分の一税を貢ぐべし」と、仰せられませ。

王　愚か者、苦行者は、それとはちがう税を払っている。山と積まれた宝石にも増して、尊ばれるものじゃ。見よ、

国たみの　王者に貢ぐ　富の山　尽くる時あり、尽きせぬは　森の隠者が　捧げこす
苦行の貢。　　　　（一四）

（楽屋の内で）善哉（ぜんざい）、われら両人の目的は成就した。

王　（耳を傾けて）ああ、あの声は、深くて落ちついている。それゆえ苦行者たちにちがいない。

門衛　（登場して）王様に勝利あれ。仙家の若いお弟子二名、番所に見えました。

王　すぐさまお通し申せ。

門衛　王様の御意のままに。（と言って退場し、仙家の若い弟子二名と共に登場）こちらへ、こちらへおいでなされ。

その一人　（王を眺めて）おお、威厳に満ちつつも、親しみ易い姿ではある。とはいえ、これも聖者に等しい王様にあっては、当然のこと。何となれば、

かの君も　なべての快楽（けらく）　備われる　アーシュラマ*にぞ　住みたもう、かの君も　民の
守りに　はげみつつ　日にけに苦行　つみたもう。五感調御（ちょうぎょ）の　徳たかき　君にしあれ
ば　王**の名を　添えはしつれど　牟尼（むに）〈聖者〉という　浄きその名は　ガンダルヴァ***　高

く讃うる　歌声に　乗りてしばしば　天翔（あまがけ）りゆく。　　　　（一五）

*注　人生を分けて、学習・家長・林棲・遊行の四期（アーシュラマ）とする。ここではその第二期を指し、かつ仙者の庵の意味を兼ねている。

**注　単に仙人・聖者と言わず、王仙と呼ぶことを指す。

***注　インドラ天の世界にあって、音楽唱歌に従う半神族。アプサラス仙女を妻とする。

第二の苦行者　友よ、あれに見えるのが、インドラ天の友人、ドゥフシャンタ王なのか。

第一の苦行者　もちろんのこと。

第二の苦行者　さればこそ実（げ）に、

むべなりや　ただ独りして　青ぐろき　ひろ海原を　帯とする　大地くまなく　治むる
も。城門とざす　かんぬきに　似て逞しき　そのかいな。悪魔の群を　敵とする　戦の
庭に　神々も　弦うち張りし　かの弓と　インドラ天の　ヴァジュラ〈電撃〉とに　勝利
の望み　かけてこそあれ。　　　　（一六）

両人　（近づいて）勝利あれ、王よ。

王　（座から立ちあがって）ご両所には、よくこそご入来。

両苦行者　王に吉祥（きちじょう）あれ。（と言って、果実を呈する）

王　（敬礼して、受け取り）ご来訪のおもむき、承りたく存ずる。

両苦行者　王様がここにご滞在のよし、苦行者たちに知れわたっております。ついては王様にお願いの儀がござる。

王　何ごとのご用命。

両苦行者　仙家の尊き長(おさ)が不在のため、羅刹(らせつ)〈悪魔〉どもが、われらの苦行に障礙をなします。それゆえ数夜の間、王様には御者ともども、この庵をご守護くださいませ。

王　ありがたくお受けつかまつる。

ヴィドゥーシャカ　（王にだけ聞えるように）王様にとっては、今お誂えむきに頸を押えられたと申すもの。

王　ライヴァタカ、余の御者に申しつけよ、弓矢もろとも車をひいて参れと。

ライヴァタカ　王様の御意のままに。（と言って退場）

両苦行者　遠きみ親の　ならわしに　背かぬ君に　ふさわしや、なやめる者を　救うこそ
プルの族(うから)の　誓いなれ。　（二七）

王　ご両所には行かれませ。余もすぐ続いて参るほどに。

両苦行者　勝利あれ。（と言って退場）

王　マーダヴィヤ、そちも、シャクンタラー姫を見たいと思うかな。

ヴィドゥーシャカ　先ほどは恐しいこともありませんでしたが、羅刹が出ると聞いて、今は

桑原、桑原。

王　恐れるには及ばぬ。余のそばを離れずにいるのではないか。

ヴィドゥーシャカ　この拙者が、王様の車の脇を離れぬ護衛になってしまうのでございますか。

門衛　（登場して）お車の準備整い、わが君の勝利のお門出を、お待ちいたしております。また太后さまの使者として、都からカラバカが到着つかまつりました。

王　（敬意を表して）母君より派遣されてか。

門衛　しかとさようにございます。

王　しからば通すがよい。

門衛　（退場し、カラバカを伴って、再び登場）カラバカどの、わが君はここにおいで遊ばす。お近づきめされよ。

カラバカ　（近づき、敬礼して）わが君に勝利あれ。太后さまのお言伝がござりまする。

王　お言伝とは何事じゃ。

カラバカ　今日より四日目に、プトラ・ピンダ・パーラナ*と申す潔斎が行われまする。当日は是非とも陛下のご臨御を、待ちあげまするとのおもむき。

＊注　子息の無事息災を祈るための祭儀。

王　一方には苦行者の依頼、他方にはまた母君の命令。何れもゆるがせにしては相すまぬ。はていかにしたら、よいものやら。

ヴィドゥーシャカ　(笑って)おお、トリシャンク王*のように、中ぶらりんとおいでなさいませ。

＊注　ヴィシュヴァーミトラ仙の功力によって昇天するが、神々は王を拒否して、天界から真逆様に蹴落し、仙人は彼を再び天上へ戻そうとしたため、遂に南十字星となって、天地の中間に懸ったという神話による。

王　ほんに当惑いたした。

務めの場所の　遙けさに　二筋みちの　わが心、川の流れの　みちふさぐ　石に阻まれ
分かるるがごと。　(一八)

(思案して)友よ、母君はそちを、わが子のように扱っておられる。そちはここから帰還して、余が苦行者への務めに専念している旨を、お話し申し、母君に対する息子の務めを果してくりゃれ。

ヴィドゥーシャカ　おお、拙者が羅刹を恐れていると、思召しくださいますな。

王　(笑みを浮べて)おお、大バラモン、どうしてそちに向って、そのようなことが考えられようぞ。

ヴィドゥーシャカ　それでは、王様の弟分として参りとう存じます。

王　苦行林の患いとなることは、断じて避けねばならぬから、供廻りの者はこぞって、そちと一緒に送り返すことにいたす。

ヴィドゥーシャカ　(誇らしげに)ひい　ひい、まごう方なき日嗣の御子と、相なりました。

王　(独語)これは口の軽い男。いつかはわれらの恋の一件を、後宮の者どもにしゃべることもあろう。まずこういたしておこう。(ヴィドゥーシャカの手をとり、一般に聞えるように)親愛なるマーダヴィヤ、余が仙者の庵へ参るのは、聖者に対する尊敬のためじゃ。余が仙家の娘に、懸想したなどとは、まっかなそらごと。

見よ、

小鹿の群と　生い育ち　恋知りそめぬ　乙女子と　われとの間　いくそばく、ただ戯れ
に　口にせし　言葉のあやは　露ばかり　友よ、まことと　思われな。　(一九)

ヴィドゥーシャカ　実にも左様にございます。

と言った後、一同退場

内証事と題する第二幕　終

第三幕　恋の享楽

序

クシャ草を手にもって祭祀者の門弟登場

門弟　(感歎の思いいれで)ああ、ドゥフシャンタ王の威力は絶大なものだ。なぜかといえば、王様がご入来なされただけで、われらの祭祀の障礙はやんでしまった。

いずくんぞ用いん矢を番うるを　鳴弦遙かに響けば　強弓唸りを生ずるに似て　障魔たちまち退散す。　(一)

さて祭壇に敷きつめるこの草を、祭官がたのところへ運ぶことにいたそう。(歩み廻り、うち眺めて、舞台に見えぬ人に向い)プリヤンヴァダー、誰のために、ウシーラ草の香油と繊維のついた蓮の葉とを運ばれますぞ。(耳を傾けて)何と言わるる。暑さあたりでシャクンタラー姫が、重い病に悩んでいるので、姫の体を冷やすためと言われるか。プリヤンヴァダー、懸命の看護を頼みますぞ。と申すのも、姫は一家の主長たるお師匠さまの

命ともいうべきお方。拙者もまた、苦悩平癒の聖水を、姫のため、ガウタミー尼のお手にお渡し申そう。(と言って退場)

序　終

その時、王恋になやむ風情で登場

王　(思いになやみ、歎息して)

いやちこの　苦行の力　われは知る　はたまた姫の　ままならぬ　身のあり方も　とくと知る。とはいうものの　わがこころ　姫より離す　すべぞなき、流るる水を　低きより　高きにもどす　よしなきがごと。　(二)

恋の神よ、そなたは花*を武器としながら、この苛烈さはどこから来るのだ。ああ、わかった。

今もなお　ハラ**(シヴァ天)の怒りの　なが中に　燃えつぐなめり、海原***に　ひそみて燃ゆる　火のごとく。もしさもなくば　形なき　冷き灰の　ながために　かくもわれらの　マンマタ(愛の神の異名)よ、恋の炎に　焦がさるべしや。　(三)

＊注　恋の神カーマは、花を鏃とする五本の矢を武器として、人の心を射る。

＊＊注　苦行を妨げようとしたカーマは、シヴァ天の怒りをかい、その眼から発した火に焼かれて灰となり、それ以後、アナンガ(身体なき者)と呼ばれるに至った。

＊＊＊注　ウルヴァ仙の腿から生れ、世界を破壊する恐れがあったので海中に棄てられ、燃えつづける火、アウルヴァと呼ばれる。

その上また、心をゆるすに足るはずの、そなたと月とに、恋人たちはだまされている。

何となれば、

汝(なれ)の矢の　花よりなると　いうことも　月の光の　涼しさも　恋のやつこの　われらには　ふたつながらに　そらだのめ、氷と澄める　光もて　月は燃えたつ　火を送り、花うるわしき　ながら箭(や)には　金剛石の　堅さあり。　(四)

とはいえ、

心のなやみ　絶えまなく　もたらす恋の　神なれど　われ喜びて　迎えまし　魂をもとかす　切れながの　まなこの主の　ためにして　もし花の矢を　射たもうならば。　(五)

恋の神よ、このように恨みかこつこのわれに、そなたは憐れみの心を起さぬか。

甲斐なしや　百(もも)の望みの　やむまなく　なれをし思い　強むるも。弓を耳まで　引きしぼり　矢先をわれに　向くるとは　神にふさわず、ああ、アナンガ(恋の神の異名)よ。　(六)

障碍を退散させて進ぜたので、苦行の衆に、お暇乞をした今となっては、疲れた体を、いったいどこで休めたらよいのやら。(歎息して)いとしい人に会うよりほかに、憩の場所のあるはずはない。(上の方を眺めて)姫はこの凄まじく暑い時を、蔓草が自ずと四阿(あずまや)をつくりだすマーリニー河の岸辺で、友達と一緒に過される習わしだ。ままよ、余もそこへ参ろう。(歩み廻り、うち眺めて)すらりと優しい姫が、この若木の列の間を通り過ぎられてから、まだほどないものと思われる。何となれば、

姫が手折りし　花の柄の　うつろもいまだ　ふさがれず、この若枝の　折れ口の　汁にしめりし　跡みれば。　(七)

(ものに触れたこなし)おお、森のこの場所は、吹く風もすがすがしい。

蓮(はちす)の花の　香ににおい　マーリニー河の　さざ波の　しぶきを運ぶ　この風は　かたく抱くに　ふさわしや　恋にほてりし　手足もて。　(八)

(うち眺めて)嬉しや、籐に囲まれたこのあずまやの中に、シャクンタラー姫がおられるにちがいない。と申すのも、

白き真砂を　敷きつめし　戸口のほとり　足跡の　ま新しくも　目にうつる。つま先かろく　くぼめども　踵(くびす)のあとは　ふくよかの　腰の重みに　深まさり見ゆ。　(九)

まず枝の間を通して伺うことにいたそう。

(そうした後、喜びに満ちて)ああ、こよなき目の法楽をかち得たわい。ここにわがあこがれの的である愛人が、花の褥に蔽われた石台の上に横たわり、二人の友達にかしずかれている。よし、あの人たちの遠慮のないおしゃべりを、聞くといたそう。(と言って、うち眺めつつ立つ)

その時二人の友達と共にシャクンタラー登場

二人の友達 (風を送りつつ)シャクンタラーさま、蓮の葉扇の風は、きもち好うございますか。

シャクンタラー (疲れに悩んで)どうしてお二人さまは、煽いでくださいますの。

二人の友達がっかりして、互いに目を見合わせる

王 姫はいたく悩んでいるように見える。(沈思して)これは暑さのためなのか、または、余の想像するようなことのためなのか。(深く考えて)いや、いや、疑う必要はない。

ウシーラの　涼しの油　胸にぬり　蓮糸の　腕輪の一つ　ゆるやかに　いとしき人の
患いて　悩める姿　かわゆさまさる。恋と暑さと　苦しさは　同じかれども　しかすが
に　夏の日ざしの　所労は　乙女にかくも　いみじさ添えず。　(一〇)

プリヤンヴァダー (アヌスーヤーにだけ聞えるように)アヌスーヤーさま、あの徳高き王様に、

始めてお目にかかってから、シャクンタラーさまはあのお方を、お慕いなされておりまする。そのほかに、姫の患いのたねがありそうにもございませぬ。

アヌスーヤー わらわもどうやら、その通りと存じます。よろしゅうございます。わらわが尋ねて見ましょう。シャクンタラーさま、一寸お伺いしたいことがございます。あなたさまのお患いは、ほんにきつうございますか。

王 こう申さねばならぬ。

蓮糸の　姫の腕輪は　久方の　月の光を　あざむくに　いま色かわり　黒
ずむは　忍びがてなる　苦熱のしるし。　(一一)

シャクンタラー (寝床から上半身を起して)アヌスーヤーさま、仰せになりたいことをお話しくださいませ。

アヌスーヤー シャクンタラーさま、わたくしどもは、あなたさまのお心の中に起ったことを、よくは存じません。しかしあなたさまのご様子は、物語の本の中に書かれた恋人のありさまに、そっくりのように存じます。それゆえあなたさまのお患いが、何から起ったのやら、お話しくださいませ。患いのもとをすっかり知った後でなければ、療治も始められないものでございます。

王 アヌスーヤーも余と同じことを考えている。

プリヤンヴァダー　シャクンタラーさま、アヌスーヤーさまのおっしゃることは、尤もでございます。なぜ御自分のその悩みをおかくしなさいます。一日一日とあなたさまのおからだに、やつれが見えて参ります。ただお美しい面影だけは、今も残っておりますが。

王　プリヤンヴァダーの申したことに、まちがいはない。と申すのも、姫の
面輪のやつれ　いちじるく　頬のまるみの　肉おちて　乳房の張りの　衰えに　やせし胸元　すがる〈腰細蜂〉なす　腰の細りの　いやまして　垂れ傾きし　両の肩　顔色蒼く　つやあせつ。恋に患う　この乙女　いじらしくまたうるわしや、つれなき風に　葉枯れたる　マーダヴィーの　蔓さながらに　（二）

シャクンタラー　（溜息をついて）あなたさまがたのほか、誰にお話し申す人がございましょう。

二人の友達　シャクンタラーさま、さればこそわたくしどもが、無理にもお願い申すのでございます。不幸も分けもてば、忍び易くなるものでございます。

王　嬉しきにつけ　憂きにつけ　ともに笑み泣く　友垣に　切に問われて　手弱女は　心に秘むる　なやみごと　語りいずらん。いく度か　情をこめし　まなざしに　顧みられし　われながら　応えの言葉　聞く際は　むねたち騒ぎ　おそろしや。　（三）

シャクンタラー　苦行林をお守りくださるあの徳高き王様を、お見かけ申してから、（となかば言って、恥じらうこなし）

二人の友達　いとしいシャクンタラーさま、つづけてお話しくださいませ。

シャクンタラー　それからというものは、王様をお慕いするばっかりに、このありさまになりました。

二人の友達　おめでとう存じます。あなたさまの愛情は、いま似合いの婿君に向けられたと申すものでございます。また大河の流れは、わたつみ〈海〉をよそにして、どこへ注ぐでございましょう。

王　（喜んで）聞くべきことを聞いてしまった。
憂かりける　悩みのたねの　恋はいま　わが憂さはろう　玉箒。黒雲こむる　暑き日も　夏すぎゆかば　人の世に　恵みの雨を　降らしこそすれ。　（四）

シャクンタラー　それゆえ、もしお二人さまが　ご承知くださるならば、あの徳高き王様のご同情が得られますよう、なにとぞお計いのほど願います。さもなければ、死んだ後まで、わらわのことを、覚えていてくださいませ。

王　あの言葉は、全ての疑いを晴らすに足りる。

プリヤンヴァダー　（アヌスーヤーにだけ聞えるように）アヌスーヤーさま、恋患いも深く進んで、シャクンタラーさまは、少しの猶予も我慢できないほどになっておられます。

アヌスーヤー　プリヤンヴァダーさま、シャクンタラーさまのお望みを、猶予なく、また人知れず叶えてあげるには、どういう手だてがございましょうか。

プリヤンヴァダー　アヌスーヤーさま、人知れずということは、やりとげねばなりません。猶予なくということは、むずかしくございませぬ。

アヌスーヤー　どのようにして。

プリヤンヴァダー　あの徳高き王様も、このお方に懸想されていることは、優しいまなざしに、はっきり表われておりまする。このごろ王様は、眠れぬ夜の多いためか、やつれたように見受けられます。

王　ほんに余はその通りじゃ。と申すのも、

胸の悩みの　火ともえて　頬杖支う　まなじりゆ　夜ごと夜ごとに　わが流す　あつき
涙の　ひまをなみ　黄金の腕環　珠くもり　弓弦の傷に　触れもせで　手くびすべりて
いくたびか　脱けて落つるを　引きもどす。　(一五)

プリヤンヴァダー　(深く考えて)アヌスーヤーさま、いま姫に恋文を書いてもらいましょう。それをわらわが花にかくして、神様に献げたお供物の残りと申したて、あの王様のお手に届けましょう。

アヌスーヤー　プリヤンヴァダーさま、その雅た手だては、わらわの気にいりました。シャクンタラーさまは何と仰せられます。

シャクンタラー　お言附を、とやかく申す筋がございましょうか。

プリヤンヴァダー　それでは、ご自分のことを仄めかすにふさわしい、きれいな言葉の歌を一つ、お考え遊ばせ。

シャクンタラー　考えて見まする。しかしわらわの心は、王様に拒まれはしまいかと恐れて、震えております。

王　なれと添う　願いに燃えて　ここに立つ　男の子はあるに、その人の　拒みにあうを
なれ恐る　気弱き乙女。恋の幸　求めて人の　得るもあり　得ざるもあらめ　さりなが
ら「幸」みずからの　選びてし　男のいかで　得がたかるらん。　(一六)

また、

ながなさけ　求めこがれて　なれ近く　男は立つに　手弱女よ、ゆめ恐るるに　あたら
ぬを　つれなき応え　憂えつつ　なれはためろう。美しき　珠みずからは　求めねど
珠こそ人に　求められつれ。　(一七)

二人の友達　まあ、ご謙遜な方。苦熱を払う秋の夜の月の光を、傘でさえぎる者がありましょうか。

シャクンタラー　(笑みを含んで)お言附に従っております。(と言って思案する)

王　余が瞬きを忘れた眼で、いとしい人を見つめているのも無理はない。と申すのも、

歌文の　思いに耽る　君が面　柳の眉の　片あがり　頬の和毛の　逆だちて　心のたけに　われ想う　深き情は　色にでにけり。（一八）

シャクンタラー　お二人さま、歌を考えつきました。しかしお手紙を書く道具が、ここにございませぬ。

プリヤンヴァダー　この鸚鵡の胸毛のような柔かい蓮の葉を切りとって　その上に爪でお書き遊ばせ。

シャクンタラー　ふさわしい意味が、こもっておりますかどうか、まずお聞きくださいませ。

二人の友達　よく伺うことにいたします。

シャクンタラー　（読む）

君が心は　知らねども　君を慕いて　火と燃ゆる　わが恋ごころ　ひるに夜に　さしも知らじな　身をこがす。（一九）

王　（突然近づいて）君が身を　恋はこがすと　のたまえど　それにも増して　絶えまなく　われ焼きつくす　手弱女よ。わが身を月に　喩うれば　君は夜さく　クムダ花*　ひるとしなれば　消えてゆく　月のなやみの　いや深からめ。（二〇）

*注　夜開き、朝になると凋む睡蓮の一種。

二人の友達　（うち見やり、喜び立ちあがって）願いごとが忽ち、望み通りに実を結びまして、おめでとう存じます。

シャクンタラー立ちあがろうとする

王　美しい姫、お気づかいは無用、無用。

なが手足　熱のほてりの　強ければ　花の褥に　うずもれて　蓮糸あみし　腕の環も見るまに色の　あせ萎る。常の会釈の　いまはあやなし。（二一）

シャクンタラー　（驚いて、独語）わが心よ、気が遠くなるほど焦れておきながら、今は一言の返事もできないとは。

アヌスーヤー　大王様には、何卒この石台の片隅に、お坐りくださいませ。

シャクンタラー少し退る

王　（坐って）プリヤンヴァダーどの、そなたのお友達は、いたく熱に悩む様子ではござらぬか。

プリヤンヴァダー　（笑みを浮かべて）良いお薬が参りましたほどに、熱は間もなくさがることでございましょう。大王様、あなた方お二人が、想い想われていることは、もうはっきりいたしました。ただ友達への心遣いから、余計なことまで申しあげることになります

る。

王　プリヤンヴァダーどの、言いそびれてはならぬ、言いたいことを言わずにおくと、悔いを後日に残すものでござるから。

プリヤンヴァダー　それゆえ王様もお聞きくださいませ。

王　しかと承る。

プリヤンヴァダー　王たる者は、庵に住む人の悩みを、取り除いてやらねばならぬと申すこと、これは定まった務めでございます。

王　それに超した務めが、ほかにござろうか。

プリヤンヴァダー　さればこそお聞きくださいませ。われわれのこの優しい友達は、恋の神のお思召により王様に懸想して、このようなありさまになりました。つきましてはお恵みを垂れさせられ、この方の命を長らえてあげてくださりませ。

王　プリヤンヴァダーどの、この恋は相みたがいのもの、余は深く満足に存ずる次第。

シャクンタラー　（嫉妬の笑みを浮べて）プリヤンヴァダーさま、後宮のご婦人と離れておさびしく、ご帰還をいそがれる徳高き王様を、お引きとめするのは、およし遊ばせ。

王　心の宿の　恋人よ、このわが心　君をおき　よそに向かめや。わりなくも　なれ疑わ
ば　魂とかす　まなざしの主よ　恋の矢に　手負いしわれの　またも傷つく。　（三一）

アヌスーヤー　大王さま、王様というものは、大勢のお后をお持ちになると、うかがっております。それゆえわれわれのいとしい友達が、身寄の者の歎きの種となりませぬよう、お計いくださいませ。

王　アヌスーヤーどの、多言は無用。
後宮数は　しげくとも　わが王室の　栄えになう　貴の后は　ただ二人　青海原を　帯
とする　広き大地と　ながこの友と。　（三二）

二人の友達　わたくしどもも、それで安心つかまつりました。

シャクンタラー喜びを表わす

プリヤンヴァダー　（アヌスーヤーにだけ聞えるように）アヌスーヤーさま、ご覧遊ばせ、ご覧遊ばせ。夏の日に雨雲をよぶ風に吹かれた孔雀のように、シャクンタラーさまに段々生気が戻って参りました。

シャクンタラー　お二人さま、無遠慮なおしゃべりに耽ってわたくしどもが、はしたなく話し合っていたことを、王様にお詫びなさいませ。

二人の友達　（笑みを浮べて）そうおっしゃる方こそ、お詫びなさいませ。ほかの者には、何の罪もございませぬ。

シャクンタラー　大王様には、御前をも憚らぬ言葉の数々、何卒お赦しくださりませ。聞

く人のない時は、口に戸をたてぬものでございますれば。

王 （笑みを浮べて）その科を　赦しはすれど　われもまた　腿うるわしき　君に乞う、なが肌ふれし　花しとね　少しゆずりて　わがために　疲れをいやす　席を賜れ。　（二四）

シャクンタラー （怒ったふりをして）おだまり遊ばせ、意地悪な方。この有様になったわらわを、まだおからかいなされますか。

プリヤンヴァダー それだけでは、ご満足がゆきますまい。

アヌスーヤー （そとの方を見て）プリヤンヴァダーさま、あそこに、苦行の衆の鹿の仔が、あちこちと目を動かせて、はぐれた母親を探しておりまする。それゆえ、わらわはこれから、仔鹿を母親のもとへ、連れていってやりましょう。

プリヤンヴァダー アヌスーヤーさま、あの仔鹿は、なかなかじっとしておりませぬ。あなたさまお独りでは抑えきれますまい。それゆえわらわも、お手伝いいたしましょう。

（と言って、両女いでたつ）

シャクンタラー お二人とも、ここからよそに、おいでなされては、いやでございます、わらわが独りぼっちになりますほどに。

二人の友達 （笑みを浮べて）あなたさまが独りぼっちとは、聞えませぬ、地界を護る王様が、おそばにおいで遊ばしますのに。（と言って両女退場）

シャクンタラー まあ、お二人とも、行ってしまいなされました。

王 （四方を眺めて）美しい姫、心配はご無用。余がお世話を引き受けて、お友達の代りに、そばに附き添って進ぜる。さればお言附けくだされい。

蓮の葉団扇　ゆるがせて　疲れをいやす　水玉に　うるおう風を　送らんか、または蓮華の　ほの赤き　君がみ足を　膝にのせ、腿うるわしき　手弱女よ、心ゆくまで　さすらんか。　（二五）

シャクンタラー お敬い申すべきお方に、罪を犯しとうはございませぬ。（その状態にふさわしく立ちあがり、去ろうとする）

王 （おしとどめて）美しい姫、日はまだ暮れきらぬ。それにそなたの体もその様子。

花の褥を　うち棄てて　熱気をはらう　蓮の葉を　胸にあてがい　夏の日の　もなかになぞや　行きたまう、かよわき君が　み手足は　荒きしぐさに　堪うるものかは。　（二六）

と言って、抱き支う

シャクンタラー お離しくださいませ、お離しくださいませ。ほんに自らのままにならぬ身でございます。されば友達ばかりを頼る身の、今ここで何をいたすことができましょう。

王 これはしたり。お恥かしき次第じゃ。

シャクンタラー　いえ、わらわは決して大王様のことを、申しているのではございませぬ。
運命を咎めているのでございます。

王　運命は好意を示しているのに、何ゆえお咎めなされるぞ。

シャクンタラー　どうして今咎めずにおられましょう。自らのままにならぬわらわに、他人のいみじさを見せつけて、恋心を起させますゆえ。

王　（独語）あこがれに　胸たか鳴れど　恋人の　求めをこばみ、添伏の　幸は願えど　身をまかす　際となれば　すずろためらう。恋の神　時機を恵めど　乙女子は　時をあだにす。悩ますは　恋の神ならで　乙女子ぞ　神を悩ます。　（二七）

シャクンタラー去る

王　わが身の望み、やわか叶えずにおけようぞ。（近寄って、衣の裾をつかむ）

シャクンタラー　プルの血筋の大王様、おたしなみをお忘れ遊ばしますな。聖の衆があちこちお歩きになっております。

王　美しい姫、目上の者を憚るには及ばぬ。カンヴァ仙は法の掟にくわしいお方ゆえ、そなたのために、心を痛めることはあるまい。

聖の娘　いままでも　*ガーンダルヴァ婚に　則りて　嫁ぎしためし　多かめり、相思の契り　父も許しつ。　（二八）

（四方を眺めて）こはいかに、余は外に出てしまった。（シャクンタラーを残して、再び元の道を通って引き返す）

＊注　結婚の一形式、当事者相互の恋愛により、長上の許可をまたず、また何等の儀式を用いずに行われる。

シャクンタラー　（一歩進んで、振り返り、ぐったりとして）プルの血筋の大王様、わらわは、あなたさまのお望みを叶えず、ただお言葉を交えただけの知合でございますが、何卒お忘れくださいますな。

王　美しい姫。
眼路はるか　なれは去るとも　恋いわたる　わが心より　たまゆらも　なれの去らめや
ひんがし〈東〉に　向う木の根に　夕ぐれの　影の離れず　より添うがごと。　（二九）

シャクンタラー　（僅かに進んで、独語）ああ　ああ、これを聞いては、わらわの足は前へ進まぬ。ままよ、この廻りに生えているクルヴァカの中に身をかくし、王様の愛情のほどを見守りましょう。（と言って、その通りにして立つ）

王　いとしい姫、なんとしてそなたは、ひたむきに恋いわたる余を見棄てて、にべもなく、立ち去ってしまったのか。
姿なよびて　抱きしめの　あらきに堪えぬ　なれなるに　なぞかく固き　心かは、シリ

ーシャの茎　さながらに。（三〇）

シャクンタラー　これを聞いては、立ち去る力もありませぬ。

王　恋人のおらぬこの所で、今何をしようというのか。（前を眺めて）はて、ゆくてはふさがれている。

君が胸　しかと触れにし　ウシーラの　移り香いとも　なつかしき　蓮糸腕環　手首ゆ
すべりて落ちて　わが前に　横たわる見ゆ　足枷なして。（三一）

（恭しく取りあげる）

シャクンタラー　（手を眺めて）あれ、衰弱のために弛くなった蓮糸の腕環が、ぬけ落ちたのに気づかなんだ。

王　（蓮糸の腕環を胸に押しあてて）ああ、何んという肌ざわり。
うるわしき　ながただむき〈腕〉を　離れにし　いみじき腕環　恋人よ　今ここにあり。
心なき　ものにはあれど　幸うすき　われをなぐさむ　なれに代りて。（三二）

シャクンタラー　このうえためろうことはできませぬ。ままよ、ちょうどこのことを口実に、姿を現わしましょう。（と言って、近づく）

王　（喜んで見て）ああ、わが命の主が現われた。歎きの言葉が、終るか終らぬうちに、早や運命の恵みに助けられたわい。

喉の渇きに　堪えかねて　水恋う鳥の　一声に　たちまち雲の　湧く見えて　雨の滴の
口をうるおす。（三三）

シャクンタラー　（王の面前に立って）わが君さま、途中まで参りました時、思いだしまして、あの腕から落ちました蓮糸の腕環を求めて、帰って参りました。虫の知らせと申しましょうか、王様がお拾い遊ばしたような気がいたします。何卒それをお返しくださいませ。わらわも王様ご自身も、聖の衆に見とがめられませぬように。

王　一つ約束をなさるなら、返して進ぜる。

シャクンタラー　どのような約束でございます。

王　もし余にその腕環を、元のところへ嵌めさせてくださるならば。

シャクンタラー　（独語）しかたのない仕儀。（と言って近づく）

王　こちらの石台へ参ろう。（と言って、両人歩き廻り、坐を占める）

王　（シャクンタラーの手を執って）ああ、何という手ざわり。

ハラ〈シヴァ天〉の怒りの　火に焼けて　枯れしと見えし　愛の木に　甘露の雨の　恵み
もて　若芽のまたも　萌えいでにしか。（三四）

シャクンタラー　（手ざわりを感じたこなし）殿さま、お急ぎくださいませ、お急ぎくださいませ。

王　(喜んで、独語)今こそ安堵いたした。あれ*は夫を意味する言葉じゃ。(一般に聞えるように)美しい姫、この蓮糸の腕環は、きつ過ぎはいたさぬか。お許しあらば、余がほどよく直して進ぜよう。

*注　前の科白でシャクンタラーの使った殿様(アーリヤ・プトラ)という語は、貴公子・殿下を意味するほか、普通妻が夫を指す時に用いられる。

シャクンタラー　(笑みを浮べて)よろしきように。

王　(故意に手間どり、腕環を嵌めて)美しい姫、御覧くだされ、

新月の　そのうるわしさ　増さんとて　両つの端を　とじ合せ　蓮の糸の　環とはなり

天つみ空の　雲すてて　なよびいみじき　蔓草に　似たるなが手に　今ぞかかれる。(三五)

シャクンタラー　わらわには、今それが見えませぬ。耳飾の蓮華の花粉が、風にゆられて飛びちり、目先が暗くなりました。

王　(笑みを浮べて)お差支なければ、余が口気をもって、お目をはっきりさせて進ぜよう。

シャクンタラー　そうしていただけば、ご同情を得たことになりましょう。しかし王様は、ご信用いたしかねまする。

王　そう言われるな。新しい召使は、主人の命じたことのほかは、いたさぬものゆえ。

シャクンタラー　その余りご親切すぎますことが、かえって不信用のたねとなりまする。

王　(独語)余は自分の思いを遂げるに都合のよいこの機会を、のがしはせぬ。(と言って、姫の顔をもちあげようとする。シャクンタラーこれを拒むこなしを装いつつ、抵抗を中止する)

王　ああ、魂とかす眼の主よ、余が不躾に振舞うなどという懸念は無用。

シャクンタラーちらと見て、顔をうつむけて立つ

王　(二本の指で顔をもちあげ、独語)

くちづけの　汚れにそまぬ　やわらかき　君が唇　かすかなる　震えいじらし、うま汁

に　渇くこの身の　祈事を　拒みもあえず　許すにも似て。(三六)

シャクンタラー　殿様、お約束を果されますに、ちとひまどるようでございますが。

王　美しい姫、耳飾の蓮華がま近にあるので、そなたの目とまぎらわしく、迷っている次第。(と言って、口気をもって目を吹く)

シャクンタラー　もう結構でございます。目は常の通りになりました。殿様にご親切にして頂きながら、何のご返礼もできませぬのが、お恥かしゅうございます。

王　美しい姫、ほかに何の返礼がいり申そう。

かぐわしき　なが口の香を　かぎ知りて　こよなき報い　すでに得つ。蓮の花追う　蜜

蜂は　匂ばかりに　心みちたる。(三七)

シャクンタラー　もしそれで満足がゆきませなんだら、蜂は何といたしまするぞ。

王　これこの通り。（と言って、決然と口に近づく）
（楽屋の内で）チャクラヴァーカ*の雌鳥よ、夫鳥に別れを告げなされ。夜が近づいて来ましたぞや。

＊注　鴨の一種。昼は雌雄少しも離れず、極めて睦まじい夫婦の喩に引かれるが、或る詛の結果、夜は別れて過すという伝説をもつ。

シャクンタラー　（耳を傾け、驚いて）殿様、わらわの様子を尋ねるため、ガウタミー尼さまが、ここへおいでになりました。それゆえ、叢のかげにおかくれ遊ばしませ。
王　よろしゅうござる。（と言って、片隅に立つ）
ガウタミー　（盤を手に持ち登場して）いとし子よ、苦悩平癒の聖水を持って来ました。（シャクンタラーを見、立ちあがらせて）まだ本復しきらないのに、そなたはここにただ独り、守護の神々に見まもられておいでかい。
シャクンタラー　今しがた、プリヤンヴァダーさまとアヌスーヤーさまとは、マーリニー河の方へ下っておいでなされたところでございます。
ガウタミー　（聖水をシャクンタラーに注ぎかけて）いとし子よ、無病息災に長生きしてたもれ。身うちの熱気は薄らぎましたか。（と言って、触れる）
シャクンタラー　ガウタミー尼さま、良い方に向っております。

ガウタミー　日も暮れに近づきました。さあ、おいでなされ。小屋へ帰りましょうぞ。
シャクンタラー　（漸く立ちあがり、独語）わが心よ、先ほどは、たやすく手の届くところに、願望成就があったのに、そなたは空しく時を費した。今その行の報いを味われるがよい。（一歩進んで振り返り、一般に聞えるように）悩みを払う蔓草の四阿よ、さらばまたの日の楽しみのため、今はおいとまいたします。（と言って、両女退場）
王　（以前の位置に戻り、歎息して）ああ、願望成就には、障礙の多いことじゃ。

美しき　睫毛の君が　肩ごしに　そむけし面輪、いくたびか　指もて固く　くちびるを
押え閉じつつ　否とよと　拒むことばも　くごもりて　﨟たさ増さり　とにかくに　も
たげはしつれ　口づけは　かなわざりけり。　（三八）

さて今は、どこへ参ろうか。いや、いとしい姫が憩われたこの蔓草のあずまやに、しばしたたずむことにいたそう。（諸方を見て）

君が身の　重さにくぼむ　花しとね　石の上にあり、蓮の葉に　爪もて彫りし　なつか
しの　恋の玉章、蓮糸の　腕環の落ちて　残るよと　思いたどりて　まじろがず　眺め
てあれば　あずまやを　急ぎ去らめや、君はなくとも。　（三九）

（沈思して）これはしたり、恋人の傍らにあった時、空しく時を過したとは、余も不覚なことをしたものじゃ。しかし今は、

いつかまた　うるわしの君　わがねきに　忍び来まさば　空しくは　時をすごさじ。おしなべて　好事魔多き　世のならい、しげき障りに　苦しみて　かくとは知れど　愚かしき　わが弱心　恋人の　前としなれば　いかにせん　おくれたじろぎ　ちぢに乱るる。（四〇）

（楽屋の内で）おお　おお、王様、

夕べの勤行　始まる時しも　聖火燃えたつ　壇をめぐりて　羅刹の影の　敵もあまたにおどろおどろの　形とりどり　夕焼雲の　茜色おび　ゆききする見ゆ。（四一）

王　（聞いて、決然と）おお　おお、苦行の衆、な恐れ給いそ。余ここにあり、直ちに参ろうず。（と言って退場）

恋の享楽と題する第三幕　終

第四幕　シャクンタラーの門出

序

二人の友達花を摘むこなしで登場

アヌスーヤー　プリヤンヴァダーさま、たといいとしいシャクンタラーさまが、ガーンダルヴァ婚によって、似合いの婿君にお嫁ぎなされ、ほんに仕合せになられましても、わらわの心はまだ安心いたしませぬ。

プリヤンヴァダー　それはまたなぜでございます。

アヌスーヤー　今日あの徳高き王様は、祭祀もすみましたので、苦行の衆からいとまを取られましたが、ご自分の都にお帰りなされば、百を数える後宮のご婦人たちにお会い遊ばすことゆえ、シャクンタラーさまを覚えていてくださるかどうかと考えますと。

プリヤンヴァダー　そのことならば、ご安心遊ばせ。あのように立派なお姿をしている方々は、決して徳に背かぬものでございますほどに。とはいえ、これだけは心配でございま

す。お師匠さまが巡礼から帰られて、このことをお聞き遊ばした時、何と仰せられますやら分りませぬ。

アヌスーヤー　わらわの考えをお尋ねなら、申すままもなく、お師匠さまはお許しなさるにちがいございませぬ。

プリヤンヴァダー　それはまたなぜでございます。

アヌスーヤー　ほかに仔細はございませぬ。娘御を似合いの婿君に嫁がせねばならぬということが、お師匠さまの何にも増したお望みでございました。運命が今その望みを叶えた上からは、お師匠さまもきっとご満足にちがいございませぬ。

プリヤンヴァダー　ほんにその通りでございます。（花籠を眺めて）アヌスーヤーさま、ご供養にいる花は、もう十分摘みました。

アヌスーヤー　シャクンタラーさまも、ご自分の仕合せをお守りくださる神々に、ご供養なさらねばなりませぬ。それゆえもっと花を摘みましょう。

プリヤンヴァダー　ごもっともでございます。（両女その仕事のとなし）

（楽屋の内で）頼もう。

アヌスーヤー　（耳を傾けて）プリヤンヴァダーさま、賓人が訪れられた様子。

プリヤンヴァダー　小屋の中には、シャクンタラーさまがおいでのはず。（よく考えて）ああ、

しかし、今日姫の心は留守でございます。それゆえ、これだけの花で間に合わせることにいたしましょう。（と言って、両女立ち去ろうとする）

（再び楽屋の内で）ああ、何故あって賓客たるそれがしを軽蔑されるぞ。

苦行をつみし　賓人の　わがおとないも　耳にせで　心もそらの　ひとすじに　なが恋
いわたる　その人は　思出の糸　たぐるとも　なれを忘れん、酔いしれて　己が語りし
くさぐさの　こと残りなく　忘るるがごと。　（一）

両女聞いて、落胆する

プリヤンヴァダー　やれ、やれ、とんだことが起りました。誰か尊いお方に、心もそらのシャクンタラーさまが、失礼をしたのでございます。

アヌスーヤー　（前を眺めて）プリヤンヴァダーさま、それもただのお方にではありませぬ。あれは怒りっぽい大仙人、ドゥルヴァーサスさまでございます。あの通り大股に躍りあがる足どりで、お帰りなされます。

プリヤンヴァダー　火の神のほか、誰があの仙人のように焼く力をもちましょう。されば早うおいでなさいませ。お足許にひれ伏して、おつれ戻しなさいませ。その間にわらわも、仙人をもてなす水の用意をしましょうほどに。

アヌスーヤー　かしこまりました。（と言って退場）

プリヤンヴァダー　（一歩進んで、躓いたこなし）あれ、心せくまま躓いて、花籠を手先から落したわいな。（花を拾い集めるこなし）

アヌスーヤー　（登場して）プリヤンヴァダーさま、怒りの権化とも申すべきあの仙人が、誰の頼みを聞き届けてくれましょう。とはいえ、ほんの僅かばかり同情する気になられました。

プリヤンヴァダー　それだけでも、あの仙人としては大したことでございます。どうかお話しくださいませ。

アヌスーヤー　戻ろうとはなされませなんだゆえ、お足許にひれ伏して、わらわはこう申しあげました。仙人さま、あの娘が、以前あなたさまに捧げた真心を思召されて、あなたさまの験力のほども弁えず、今日犯したその罪を、赦してやってくださりませと。

プリヤンヴァダー　それから、それから。

アヌスーヤー　そこで、「わしの言葉は変えられぬ。しかし思出の品を見る時は、娘の詛は消えるであろう」と、申されながら、姿は見えなくなりました。

プリヤンヴァダー　やっと息がつけるようになりました。あの徳高き王様が、ご出発の際、ご自分の名前を刻んだ指環を、自らシャクンタラーさまの手に嵌められて、「思出の品」と、仰せられました。姫の自由になる手だては、その指環に求められましょう。

アヌスーヤー　おいで遊ばせ。姫のためにご供養をいたしましょう。（と言って、両女歩み廻る）

プリヤンヴァダー　（うち見やって）アヌスーヤーさま、ご覧あそばせ。いとしい姫は、左手に顔をのせ、絵にかいたようにじっとして、王様のことばかりを思いつめ、ご自分のことさえ気づかぬ様子。まして大事な賓人に気づかぬのも、無理ない仕儀。

アヌスーヤー　プリヤンヴァダーさま、この出来事は、われら二人だけの胸の中に、しまっておきましょう。生れつきかよわい姫は、労ってあげねばなりませぬ。

プリヤンヴァダー　誰が熱湯をナヴァマーリカーに注ぎましょうぞ（と言って、両女退場）

序　終

その時、カンヴァ仙の門弟一人、目覚めたばかりの様子で登場

門弟　プラバーサ（第一幕に見えた巡礼地ソーマ・ティールタと同じ）から帰られたカンヴァさまに、時刻を見定める役を、仰せつけられた。それゆえ外に出て、夜がまだどれほど残っているか、見ることにいたす。

(歩き廻り、うち眺めて)ああ、もう夜が明けた。と申すのも、

草木の主の　月の影　西の山辺の　峰の上に　かかると見れば　ひんがしに　曙つぐる色あかく　日は今のぼる。月と日と　かたみに沈み　昇りつつ　栄えうつろう　人の世を　統べ導くに　似たらずや。　(二)

また、

月消えぬれば　蓮池の　花も凋みて　見はるかす　目もなぐさまず、まなかい〈眼前〉にさやかの光　のこれども。恋しき人と　きぬぎぬの　乙女のなやみ　しみじみと　今ぞ忍ぶに　いや難からめ。　(三)

また、

あかつきは　棗の上に　おく露を　あかく染めなし、眠り足り　孔雀めざめて　草ぶきの　小屋の屋根より　降りたちつ。祭壇のほとり　羚羊は　土に蹄の　跡しるく　にわかに立ちて　身をのばす　伸びのまにまに　腰たかく見ゆ。　(四)

また、

足曳の　山の王者と　聳えたつ　須弥〈神話的山の名〉のいただき　足かけて　中空たかく天翔り　闇おいのけし　月もまた　残んの光　影あわく　今し落ちゆく。すぐれ人　登りつめては　やがてまた　消え亡びゆく　世のならい。　(五)

アヌスーヤー　(幕を押しあけて登場、独語)世の中のことには、とんと疎いわらわではあるけれど、あの王様がシャクンタラーさまに、ひどい仕打ちをなされたことだけは、まちがいない。

門弟　さて拙者は、護摩の時の近づいたことを、お師匠さまにお知らせいたそう。(と言って退場)

アヌスーヤー　夜が明けました。それでわらわも、直ぐ目を覚しました。目は覚したものの、何をしてよいことやら。慣れている朝の仕事にさえ手が進まぬわいな。恋の神は、今こそ満足なさるがよい、いとしい無邪気な姫が、約束を守らぬ人を、信用なされたのだもの。とはいえ、あの徳高き王様の罪ではない。ドゥルヴァーサス仙のあの詛が、はたらいているに相違ない。さもなくばどうして、あの徳高き王様が、あのような言葉を仰せになりながら、こんなにも長い間、一言の消息もお送りなさらぬことがあろう。(深く考えて)それゆえ、思出の指環を、ここから王様にお送りしよう。とはいうものの、苦労に鈍感で冷淡な苦行の衆の中から、どなたにお願いしたらよいものやら。また姫には罪のないことと、固く信じてはいるものの、シャクンタラーさまがドゥフシャンタ王と枕をかわし、みごもっておられると、カンヴァ父さまにお話しできようか。さて今ここで、わらわは何をしたらばよいのやら。

プリヤンヴァダー　（登場して）アヌスーヤーさま、お急ぎ遊ばせ、シャクンタラーさまの鹿島立の儀式が行われます。

アヌスーヤー　（驚いて）プリヤンヴァダーさま、それはまた何として。

プリヤンヴァダー　お聞き遊ばせ。ただ今、よく眠れたかどうか尋ねるため、シャクンタラーさまのところへ参りました。

アヌスーヤー　それから、それから。

プリヤンヴァダー　丁度その時、カンヴァ父さまが、恥じらいうつ向く姫を抱きしめて、喜びの言葉を述べておられました。「いとし子よ、芽出度いことじゃ。祭祀者の眼は煙に遮られていたとても、供物は聖火のただ中に落ちたのだ。立派な門弟に受け継がれた知識と同様、そなたを手離しても、悔いるところはない。それゆえ、今日直ちに、そなたを聖者たちに守らせて、夫君の許へ送りだすことにいたす」と。

アヌスーヤー　プリヤンヴァダーさま、いったい誰が、あのことをカンヴァ父さまに、お話しなされたのでございましょう。

プリヤンヴァダー　お師匠さまが、聖火の小屋にはいられました時、姿は見えぬ歌声のお告げがありました。

アヌスーヤー　（驚いて）それはまたどのような。

プリヤンヴァダー　お聞き遊ばせ。（サンスクリット語を用いて）

知れ、バラモンよ、なが養い子　人の世の　栄えのため　ドゥフシャンタの　種をやどすと、火をはらむ　シャミー樹のごと。　(六)

アヌスーヤー　（プリヤンヴァダーを抱擁して）プリヤンヴァダーさま、まあ、なんと嬉しいこと。とはいえ、今日のうちにシャクンタラーさまが、お旅立になると思いますと、悲しさと嬉しさとが、混じりあった気が、いたします。

プリヤンヴァダー　われら二人は何としてでも、悲しみを払いのけるようにいたしましょう。おかわいそうな姫が、今は晴れ晴れとした気持になられますように。

アヌスーヤー　さればこそ、マンゴーの木の枝にかけたこの椰子の籠に、長もちのするケーサラの花粉を入れておきました。あなたさまはそれを、蓮の葉にお包みくださいませ。その間にわらわは、姫のために、ゴーローチャナ（香料の一種）と巡礼地の土とドゥールヴァー草の若芽とを混ぜ合せて、縁起のよい香油を作りますほどに。（プリヤンヴァダーその通りにする。アヌスーヤー退場）

（楽屋の内で）ガウタミー尼、シャールンガラヴァとシャーラドヴァタたちに、シャクンタラー姫を伴い行く用意をせよと、申しつけられよ。

プリヤンヴァダー　（耳を傾けて）アヌスーヤーさま、お急ぎ遊ばせ、お急ぎ遊ばせ。*ハスティ

ナーブラへ参られる聖者の方々が呼ばれておりまする。

＊注　ドゥフシャンタ王の都城。今のデリーの東北約六十マイルの地。

アヌスーヤー　（香油を手に持って登場）プリヤンヴァダーさま、さあ、われらも参りましょう。（と言って、両女歩み廻る）

プリヤンヴァダー　（うち見やって）日の出と共に沐浴（みずあみ）をすませたシャクンタラーさまが、手に手にニーヴァーラ〈野生の米〉を持って、お祝いの言葉を述べる苦行女の衆に迎えられて、立っておられます。さあ、姫のおそばへ参りましょう。（と言って、両女その通りにする）

その時、上記のような人々に従われて、シャクンタラー、ガウタミーと共に登場

シャクンタラー　皆さま、ありがとうと存じます。

ガウタミー　いとし子よ、背の君のあがめに応（こた）える女王の名を、かち得ませ。

苦行女達　かわいいお方、いみじ男の子の母となりませ。（と言って、ガウタミー以外の者退場）

二人の友達　（近づいて）シャクンタラーさま、沐浴は快くすみましたか。

シャクンタラー　ようこそ、お二人さま。ここにお坐り遊ばしませ。

二人の友達　（坐って）シャクンタラーさま、まっすぐにしておいで遊ばせ。わたくしども

が縁起のよい香油をあなたさまに塗ります間。

シャクンタラー　日頃なれておりますことながら、とりわけ今日は、ありがたく思わねばなりませぬ。と申しますのは、これから先、お二人さまにお化粧をして頂けますのも、むずかしゅうございましょうから。（と言って、涙を流す）

二人の友達　シャクンタラーさま、お芽出度い時に、泣くものではございませぬ。（涙を拭って、両女化粧を施すこなし）

プリヤンヴァダー　ああ、立派な身の飾にふさわしいそなたのお姿を、庵にあり合せの品々で装いましては、却ってお美しさを損います。

庵の少年　（装身具を手に持って登場）ここに装身具一式持参つかまつりました。これにて姫君を荘厳（しょうごん）なされませ。

一同うち見やって驚く

ガウタミー　ハーリータよ、いずこよりしてこれは。

ハーリータ　カンヴァお師匠さまのご威力からでございます。

ガウタミー　念力で造りだされたと言われるかや。

ハーリータ　いや決して。お聞きくださいませ。カンヴァさまは、シャクンタラー姫のため、木から花を採って来よと、われらにお命じなされました。その時、

月の光か　白妙の　沢なす幸の　麻衣　一つの木より　現われぬ。足の化粧に　ふさわしき　から紅の　ラク*の汁　また他の木より　ほとばしり、森の女神は　うす緑　若芽の色と　艶きそう　やさしのみ手を　さし伸ばし　手首までも　現わして　ほかの木々より　かずかずの　飾の品を　われに授けつ。　(七)

＊注　原語ラークシャー。特殊の小さい虫から作られる紅色の染料・化粧料。

プリヤンヴァダー　（シャクンタラーをうち見やって）木の洞から生れる蜜蜂でも、蓮華の蜜をほしがります。

ガウタミー　この恵みにより、そなたが背の君の邸で味わう王家の幸福が、さし示されたと申すもの。

シャクンタラー恥じらうこなし

ハーリータ　さて私は、森の木のこの好意を、沐浴のためマーリニー河の岸辺へ降りて行かれたカンヴァさまに、お知らせいたします。（と言って退場）

アヌスーヤー　シャクンタラーさま、われらは着附にとんと不慣れでございますほどに、どのようにあなたさまをお飾りしたらよいものやら。（思案し、うち見やって）でも絵では見慣れておりますゆえ、今あなたさまのお体に、飾の品々をお附けすることにいたしましょう。

シャクンタラー　お二人さまのご器用は、よく存じております。

二人の友達、シャクンタラーに装身具を附けるこなし

その時、沐浴を終ってカンヴァ登場

カンヴァ　シャクンタラー　今日去ると　思いわびては　胸せまる。忍ぶとすれど　せきあぐる　涙をしげみ　言たえて　深き思いに　目もかすむ。こころ静かに　森ふかく世を捨てし身も　かくやかく　愛にほだされ　乱るるを、めぐしわが子を　嫁がする世の常びとは　いかばかり　つらき別れに　なやむらん。　(八)

（と言って、歩き廻る）

二人の友達　シャクンタラーさま、お身仕度はもうすみました。こんどは、色もあやなこの麻衣の上下を、お召し遊ばせ。

シャクンタラー立ちあがって衣服を着るこなし

ガウタミー　いとし子よ、あそこにそなたのお師匠さまが、お近づきなされた。お目は嬉し涙に満ち溢れ、まるでそなたを抱きしめているような。さあ、お行儀よくご挨拶なされ。

シャクンタラー恥かしそうに挨拶する

カンヴァ　まな子よ、

むかし名高き　ヤヤーティ*に　あがめられつる　シャルミシュター、なれも劣らず　背の君の　高きあがめを　身にうけよ。そのシャルミシュター　プルを生む。なれもならいて　母となれ、四海を統ぶる　大王の。　（九）

＊注　ヤヤーティとシャルミシュターは、プル王の両親で、シャクンタラーの夫と定まるドゥフシャンタ王の祖先。

ガウタミー　いとし子よ、そのお言葉は、嫁入りのかずけ物〈贈物〉。ただの寿詞ではありませぬ。

カンヴァ　まな子よ、ここで、供物を享けたばかりの聖火を、右遶*せられよ。

一同歩き廻る

＊注　事物に右側を向けて周行し、敬意を表する儀式。

カンヴァ　まな子よ、

祭壇を　周りて置きし　火炉の中　吉祥草を　敷きなべて　薪に炎　いや赤く　浄き祭の　火は燃えて　捧げし贄の　香を高み　罪を攘いて　なれを守護せよ。　（一〇）

シャクンタラー右遶する

カンヴァ　まな子よ、はや旅立たれよ。（あたりを見廻して）あのシャールンガラヴァとシャーラドヴァタたちは、いずこにおるか。

両門弟　（登場して）お師匠さま、御前に。

カンヴァ　シャールンガラヴァ、そちの妹弟子の道しるべを頼むぞよ。

門弟　姫、こちらへ、こちらへ。

一同歩き廻る

カンヴァ　おお、森の神々を宿す苦行林の木立よ、

なが根の土の　うるおいを　見るまで水は　飲まざりし、かざしに欲しき　花つぼみされどなが身を　いとおしみ　萌ゆる若芽は　折らざりし、春の初花　まちかねて　その日を祝い　よろこびし　そのシャクンタラー　今ぞ去る。な惜しみそよ　はなむけのさらばさらばの　一ことを。　（一一）

シャールンガラヴァ　（コーキラ鳥の鳴声を聞いたこなし）お師匠さま、

ゆるしを得たり　シャクンタラー　森に住む身の　友とする　木々も別れを　うべないつ。聞き給わずや　こだまする　声音めでたき　コーキラの　歌にかずけし　その応え。（一二）

（楽屋の内で）蓮のみどり　池に映え　旅のつかれを　慰めん。木陰涼しき　道のべに照る日の光　うすらがん。蓮の花しべ　粉ちりて　やわき埃に　まがいつつ　そよ吹く風の　頬づとう　旅路安かれ　幸おおく。　（一三）

一同驚いて、耳を傾ける

ガウタミー　いとし子よ、苦行林の神々が、縁者に向ってのように親切に、そなたの鹿島立を嘉せられてじゃ。尊い神々にぬかずきなされ。

シャクンタラー　(ぬかずきつつ、歩き廻って)プリヤンヴァダーさま、背の君にお逢いしたいは山々なれど、庵を後に去ると思えば、わらわの足も、とかく渋って進みませぬ。

プリヤンヴァダー　あなたさまばかりが、苦行林とのお別れを、痛まれるのではございませぬ。間もなくあなたさまと別れねばならぬ苦行林のたたずまいを、ご覧あそばせ。

牝鹿は　食みし若草　口より落し、雌孔雀は　舞の足どり　はたとやめ、朽葉ふるいし
蔓草は　梢しなだる。　(一四)

シャクンタラー　(思いだして)お父さま、妹と思う蔓草のマーダヴィーに、別れの言葉をかけとう存じます。

カンヴァ　まな子よ、そなたがそれを慈しむ心根は、よく知ってじゃ。それすぐその右手にある。見るがよい。

シャクンタラー　(その蔓草に近づき、抱きしめて)妹の蔓草さん、枝の手でわらわを抱いてたも。今日からは、そなたと遠く離れて住む身となりまする。お父さま、わらわと思召して、これを世話してやってくださいませ。

カンヴァ　まな子よ、

なれを思えば　かねてより　胸にえがきし　わが理想、いみじき徳の　かいありて　身
にふさわしき　背の君を　嬉しやなれは　選びけり。今は心も　安らぎて　その蔓草の
婿選び　かたえに生うる　マンゴーを　いとし夫と　定めなん。　(一五)

さあ、この道を進まれよ。

シャクンタラー　(二人の友達に近づいて)お二人さま、この蔓草は、あなた方お二人さまの手に、お預けいたします。

二人の友達　しかしわれらは、誰に預けられるのでございます。(と言って、涙を流す)

カンヴァ　アヌスーヤー、プリヤンヴァダー、泣くのはおやめ。シャクンタラーの気を引き立ててやるのが、そなたたちの務めじゃ。

一同歩き廻る

シャクンタラー　お父さま、孕子の重さに足も鈍って、小屋のほとりを歩いておりますこの牝鹿が、芽出度く分娩いたしました時には、どうぞ誰なりと、その嬉しい知らせを告げる使者を、わらわの許へお遣わしくださいませ。

カンヴァ　まな子よ、それは必ず忘れまい。

シャクンタラー　(歩みを阻まれたこなし)あれ、足もとに追いすがるようにして、わらわの

着物の裾に、たえず寄り添うのは、いったい誰なのかしら。(振り返り、うち眺める)

カンヴァ　鋭きクシャの　葉をなめて　傷つき痛む　口のうち　なれが手ずから　塗りやりし　イングディー油を　忘れめや。いとし赤子と　育みて　餌には稷の　一握り。むべなりなれが　足跡を　その小男鹿の　離れぬも。　(一六)

シャクンタラー　かわいい鹿、起き伏しを共にした方々を、棄てて去りゆくわらわの後を、なぜに追っては来られます。そなたを生んで間もなくみまかった母親なしに、わらわの手で育てられたように、これからは、わらわと別れても、お父さまがそなたの面倒を見てくださりましょう。それゆえ後へお戻りなさい、かわいい鹿、お戻りなさい。(と言って、泣きつつ進む)

カンヴァ　まな子よ、泣くのはおやめ。しっかりなされ。ここから行手を眺めてご覧。

睫毛の反の　美しき　まなこに宿り　眼路はばむ　重き涙の　露の玉　心たしかに　払われよ。とかくに道は　高低の　定かにそれと　見えわかず。なれぬ足なみ　乱れてはつまずくことの　なからめや。　(一七)

シャールンガラヴァ　お師匠さま、親愛の人を送るに、水際をもって境となすという掟を、想い起されませ。してここは池の岸でございます。ここでわれらにお指図なされまして、お引き取りくださいませ。

カンヴァ　さらばこのクシーラ・ヴリクシャの木陰に憩うことにいたそう。

一同その通りにするこなし

カンヴァ　さて、ドゥフシャンタ殿にふさわしい言伝は、何と申したらよいものやら。(と言って、考える)

アヌスーヤー　シャクンタラーさま、われらの庵の森で、心あるもの一つとして、今日あなたさまとのお別れを、悲しがらぬはございませぬ。ご覧あそばせ、

蓮の葉かげに　身をよせて　鳴く恋妻の　呼ぶ声に　呼びも返えさず　くちばしに　入れし蓮の根　とり落し　チャクラヴァーカは　なれをのみ　まざし凝らして　仰ぎ見る。(一八)

カンヴァ　シャールンガラヴァ、そなたは先ず、シャクンタラーを引き合せ、わが言葉として、王にかく申しあげよ。

われらは苦行　つみし身ぞ、おんみは高き　家の出ぞ、またこのたびの　夫さだめ　親のはかりし　ことならず、あこが誠の　ひたぶるに　君に捧げし　恋ゆえと　このことわりを　弁えて、君が数ある　後宮の　うちに加えて　誰かれに　劣らずあがめ　めでられよ。さてその先は　運命に　まかせてあらん、新妻の　里のあずかる　ことならず。(一九)

門弟　お師匠さま、そのご伝言たしかに承りました。

カンヴァ　(シャクンタラーをうち見やって)まな子よ、こんどはそなたに、訓戒を授けよう。

森には住めどわれらは世俗のことにも疎からず。

門弟　お師匠さま、賢い人は誰でも、諸事に通じておられます。

カンヴァ　まな子よ、ここを出てそなたが、夫の家に着いた時には、

深く目上を　敬いて　ともにかしずく　后には　やさしき友の　居ふるまい、たとい夫君の　つらくとも　怒り逆ろう　ことなかれ。厚く下部を　いつくしみ　身の幸いに驕らざれ。若き女子は　かくてこそ　まことの妻と　仰がるれ。これに違わば　かならずや　家のなやみと　なるべかり。（二〇）

ガウタミー尼、何と思われるぞ。

ガウタミー　女子の守るべき庭訓は、それに尽きておりまする。（シャクンタラーに向って）いとし子よ、忘れてはなりませぬぞよ。

カンヴァ　さらばじゃ、まな子、わしを抱け。それからそなたの友達を。

シャクンタラー　お父さま、いとしいお友達は、ここからもうお戻り遊ばすのでございましょうか。

カンヴァ　まな子よ、この二人も、やがて嫁がせるつもりじゃ。それゆえ、二人があちらまで行くのはよろしくない。ガウタミー尼がそなたについて参るであろう。

シャクンタラー　（父の胸を抱いて）今お父さまのお膝許から引き離されてわらわは、まるで

マラヤの山から根こそぎにされた栴檀のよう、どうして他国で命をながらえられましょう。（と言って、泣く）

カンヴァ　まな子よ、なぜそのように心弱いのじゃ。

血すじ尊き　背の君の　栄えある妻の　名を負いて　高き御稜威に　影と添う　重き務めの　数々に　心やすまる　ひまもなく　朝日生みなす　ひんがしの　空にならいて　やがてまた　清らの御子の　母者人。われと別れの　うき雲も　あとなく消えん　いとしまな子よ。（二一）

シャクンタラー　（足許に伏して）お父さま、ありがとう存じます。

カンヴァ　まな子よ、わしの望むところ、必ずそなたに成就あれ。

シャクンタラー　（二人の友達に近づいて）お二人さま、さあ、どうぞお二人ご一緒に、わらわをお抱きしめくださいませ。

二人の友達　（その通りにして）シャクンタラーさま、もしあの徳高き王様が、あなたを思いだすのに、手間どることでもありましたら、王様ご自身のお名前を彫りつけたその指輪を、お見せ遊ばしませ。

シャクンタラー　お二人さまのそのご心配を聞くにつけ、わらわの胸は震えます。

二人の友達　シャクンタラーさま、ご心配遊ばしますな、おいとしさの余り、つい取越苦

労をいたします。

シャールンガラヴァ　(うち見やって)お師匠さま、日は山の端を替えました。されば姫君にはお急ぎめされ。

シャクンタラー　(再び父の胸を抱いて)お父さま、いつまた再びこの苦行林を、見ることができましょう。

カンヴァ　まな子よ、

四方にひろがる　この地の面　王の后と　人は言う。なれも並びて　末ながく　ともに暮して　たぐいなく　猛き世嗣の　み子を生み、位をゆずり　気もかろく　肩の重荷を下してし　夫もろともに　静かなる　浮世はなれし　この庵を　訪るる日も　めぐり来ん。　(二二)

ガウタミー　いとし子よ、そなたの旅立の時刻が遅れます。それゆえ、お父さまをおかえしなされ。とはいえ姫は、長い間おかえしなさることもありますまい。されば お師匠さまの方で、お引き取り遊ばしませ。

カンヴァ　まな子よ、苦行林でのわしの務めが妨げられる。

シャクンタラー　苦行林でのお務めに忙しくて、お父さまは悲しみを、お忘れ遊ばします。しかし、わらわは悲しみに、つきまとわれておりまする。

カンヴァ　ああ、なぜわしを、そのように感じのない者と思われるぞ。(溜息をついて)

なれが撒きにし　バリ*供養　そのこぼれ米　地に入りて　庵の戸口に　芽生ゆるを　見るにつけても　思いだす　わが悲しみの　いつの日か　消えんとすらん　めぐし子よ。　(二三)

行かれよ、一路平安に。

*注　毎朝の行事として、米等を戸口に撒き、家神を始め禽獣に供養する。その残粒の時に地に入って、芽をだすことがある。

シャクンタラーと共に、ガウタミー、シャールンガラヴァ、シャーラドヴァタ等退場

二人の友達　(長い間うち見やって、悲しげに)ああ、悲しや、ああ、悲しや。シャクンタラーさまは森の木並に隠れて、見えなくなりました。

カンヴァ　アヌスーヤー、プリヤンヴァダー、そなた達の友達はたち去った。悲しみにとりつかれぬよう堪え忍んで、わしの後について来られよ。(と言って、歩きだす)

二人の友達　お師匠さま、シャクンタラーさまを失って、うつろのような苦行林に、われらははいります。

カンヴァ　細やかな愛情は、そのように思わせるものじゃ。(思いに耽り、歩き廻って)これでよし、シャクンタラーを送り出して、今は心の平静を取り戻した。と申すわけは、

いずれは嫁ぐ　世のならい　娘は他人の　あずけもの　今婿許に　送りては　心おちい

て　すがすがし、長の年月　あずかりし　品を返しし　あとのごと。　(二四)

と言った後、一同退場

シャクンタラーの門出と題する第四幕　終

第五幕　シャクンタラーの否認

侍従登場

侍従　(溜息をついて)いやはや、年をとって、何という始末になったことだ。

われ後宮の　長(おさ)として　習いのままに　手に執れる　役目のしるし　籐の杖、長き月日の　うつろいに　足の運びも　ままならぬ　老いの身支う　杖となりぬる。　(一)

さて、奥へ行かれた王様に、ご親裁なさらねばならぬ火急の用件を、お知らせ申そう。(僅かばかり中に進んで)してその用件は何であったかな。(深く考えて)ああ、思い出した。カンヴァ仙の門弟たる苦行者たちが、王様に拝謁を請うているのだ。おお、不思議なものだ。

瞬時に想起すといえども　黒闇忽焉(こつえん)として掩う。老来記憶衰え　燈火の将(まさ)に消えんとするに似たり。　(二)

(歩き廻り、うち見て)王様はここにおられる。

おのが子のごと　国民を　育み支え　まつりごと　終えての後の　ひとり居を　こころ

静かに　楽しめり、燃ゆる日ざしに　身をさらし　群ひきつれて　導きし　務め終りて
象王が　涼し木陰に　憩うごと。　(三)

それゆえ、ほんにわしは、いま裁きの椅子から立ちあがったばかりの王様に、カンヴァ仙の門弟の到着を、お知らせするに気が進まぬ。とは申せ、王様という者に、どうして休憩があり得よう。何となれば、

日神一度馬を軛して再び解くことなく　風大不断に芳を運んで昼夜を分たず、シェーシャ竜王地を載せて未だ嘗て休まず、租を徴する王者の責務亦復是の如し矣。　(四)

と言って歩き廻る

その時、王、ヴィドゥーシャカならびに王の従者と共に登場

王　(政務に疲れたこなし)願望を成就させれば、誰もみな仕合せになる。しかし、王というものは、その目的を達しても、苦労の絶えぬものだ。何となれば、

高き位も　あこがれを　満たす手だてに　ほかならず。得て離れじと　思ほえば　守る
なやみは　いや深し。王者の栄え　誰かいう　疲れをいやす　くつろぎと、疲れ果なく
身に添うを。重き傘の柄　おのが手に　握らばなぞか　安からん。　(五)

二人の伝令*　(楽屋の内で)王様に勝利あれ、勝利あれ。

＊注　原語ヴァイターリカ。詩節で王に時刻を告げ、その日課を想起させるのを本務とする。

その一人　おのが楽しみ　顧みなくて　日毎世のため　身をば疲らす、さもあらばあれ
そは生れつき　君に備わる　徳にこそあれ。巨いなる木は　烈しき暑さ　おのが頭に
さえぎり支え　憩い求めて　立ちよる人に　木陰涼しき　影を惜しまず。　(六)

第二の伝令　王杖手にあり、道ふみそらす　邪人を　たしなめ懲らし　いさかいごとは
正しく鎮む、君ふさわしや　民の守りに。巨いなる富　山なすところ　ゆかりの者は
競いつどわん。さあれ君ひとり　なべての人に　縁者のつとめ　くまなく果す。　(七)

王　(耳を傾けて)不思議なことだ。訴えごとの裁きには、疲れきっているものの、これを聞くと、また生れかわったような気がいたす。

ヴィドゥーシャカ　王様、牛群の長と呼ばれれば、牡牛も疲れを忘れるものでございます。

王　(笑みを浮べて)まず腰をおろすことにいたそう。

両人座を占め、従者も各々その位置に立つ

楽屋の内で、ヴィーナー(弦楽器の一種)の音

ヴィドゥーシャカ　(耳を傾けて)王様、音楽堂の中へ、お耳をお向けください。拍子も清らかなヴィーナーの諧音が聞えます。ハンサヴァティーさまが、歌のお稽古をされていることと存じます。

侍従　（うち見やって）ああ、王様は何かほかの考えに、耽っておられる。それゆえ、よい折を待つことにいたそう。（と言って、片隅に立つ）

楽屋の内で、歌声が聞える

新しい　蜜がほしさに　花から花へ　浮気な蜂の　にくらしや。あれあのように　口づけた　マンゴーの花を　忘れてか　蓮の奥に　入りびたり。　（八）

王　ああ、歌に熱情があふれている。

ヴィドゥーシャカ　王様、して陛下には、あのお方の歌のほんとの意がお分りでございますか。

王　（笑みを浮べて）かっては余も、あれを愛したことがある。それで今、余はハンサヴァティー女王の件で、非難されているのじゃ。マーダヴィヤ、余の言葉と申して、ハンサヴァティー女王に告げてくりゃれ、非難まことに尤もじゃと。

ヴィドゥーシャカ　御意のままに。（立ちあがって）王様、陛下は、他人の手で、熊のやつの脳天辺の毛を摑ませる気でいらっしゃる。それでは、情欲のおさまらぬ沙門と同じこと、今それがしに、救われる道はございませぬ。

王　行け、粋人の抜目のないやり方で、女王をなだめてやってくりゃれ。

ヴィドゥーシャカ　もう逃れる道はない。（と言って退場）

王　（独語）恋人と別れているというでもないに、あのような歌を聞いて、なぜこんなに強く、哀れを催すことか。さては、

うるわしきもの　目にながめ　甘き声音を　耳にして　幸にみち足る　人にすら　ものの哀れの　身にはしむ。そはさきの世の　友垣の　こころに固く　結ばれて　なじか知らねど　胸のうち　よみがえりくる　ゆえなめり。　（九）

思い出せぬことのため、当惑のこなし

侍従　（近づいて）王様に勝利あれ、勝利あれ。ヒマーラヤ山の麓の森に住む苦行の衆が、婦人を伴い、カンヴァ仙の言伝をもって、到着つかまつりました。王様お聞きの上は、何かのお指図願いあげます。

王　（驚いて）何と申す。婦人を伴い、カンヴァ仙の言伝をもって、苦行の衆が参ったとな。

侍従　しかと左様にございます。

王　さらば余の言葉と申して、ソーマラータ尊師に告げられよ。その苦行の衆を、ヴェーダの掟に従って手厚くもてなし、自ら導き入れるようにと。余もまた、その苦行の衆との面会にふさわしい場所で、お待ちうけいたそう。

侍従　御意のままに。（と言って退場）

王　（立ちあがって）ヴェートラヴァティー、聖火の小屋へゆく道の案内たのむ。

門衛女　王様、何卒こちらへ、こちらへ。(歩き廻って)王様、ここが聖火の小屋の丘でございます。お掃除がすみましたばかりですがすがしく、護摩の乳を出します牝牛も、そばにおりまする。それでは王様、お登り遊ばしませ。

王　(登ってゆくこなし、従者の肩にもたれて立ちつつ)ヴェートラヴァティー、何のためにカンヴァ仙は、余の許に苦行の衆を、送られたのであろうか。

戒律きびしき　聖者の苦行　障礙にあいて　空しかりしか、聖なる森の　有類に誰か
よからぬ罪を　犯したりしか、あるはまたわが　非行のゆえに　草木の芽生え　滞りし
か、とさまこうさま　思いあまれば　定めかねつつ　心みだるる。　(10)

門衛女　王様がお腕の弓音によりまして、聖者の庵は安けさを得ておりますに、何でそのようなことがございましょう。それとはことかわり、聖者の衆はご善政を喜びまして、王様を尊び敬うため、参られたものと考えます。

その時、ガウタミーと共にカンヴァの門弟二人、シャクンタラーを伴って登場。王室附き祭官および侍従、彼らに先行する

侍従　皆の衆、こちらへ、こちらへ。

シャールンガラヴァ　シャーラドヴァタ殿、

威望すぐれし　王なれど　徳義の道を　あやまらず、種姓いずれも　正を執り　卑賤と
いえど　異ならず、さあれ常々　寂寞の　孤独になれし　わがこころ　人の群れ住む
この家を　炎さかまく　火宅とぞ見る。　(11)

シャーラドヴァタ　シャールンガラヴァ殿、
都城に足を踏み入れて以来、そなたがそのような昂奮を覚えられるのも、ご尤も。拙者もまた、

おのが自在の　身にくらべ　快楽に耽る　齷齪の　都の人を　眺むれば　水浴みし者
塗香者を、清らなる者　不浄者を、目ざめたる者　夢睡者を、心まかせに　歩む者　繋
縛の人を　見るごとし。　(12)

王室附き祭官　さればこそ、そなた方は偉大なのでござる。

シャクンタラー　(*凶兆を感じたこなし)なぜわらわは右の眼が、ひきつるのでございましょう。

＊注　男子とは逆に、婦人の右眼に痙攣の起るのは凶兆。

ガウタミー　いとし子よ、不吉は失せよ。吉祥がそなたの身にありますよう。(と言って、一同歩き廻る)

王室附き祭官　(王を指し示して)おお、苦行の衆、かしこに四姓*・住期の保護者が、いま司

法の座から立たれたばかりにもかかわらず、そなた方を待ちうけていらせられる。ご覧ぜよ。

＊注 バラモン等四種の基本的階級と人生の四期。これに関する規定の正しい遂行を監視・保護するのが、王の義務とされる。

シャールンガラヴァ それは重畳。とはいえ、われらにはかかわりのないこと。何となれば、

枝もたわわの 実を重み 木は伏しかがみ 雨水を 孕めば雲も 低く垂る、品よき人は 栄行くも 富におごらず。よそびとを 助くる者に おのずから 生れつきにし 性ぞこれ。 (一三)

門衛女 王様、聖者の衆は、何の心配もないように、はれやかなお顔つきに見うけられます。

王 (シャクンタラーを眺めて)ああ、

誰ぞやその 面をつつむ 手弱女は、やさしの姿 さやに見えねど 苦行者の 中にし立てば 若枝の 朽葉がくれに ほの映ゆるごと。 (一四)

門衛女 王様、からだつきの美しいお方のように見えまする。

王 もうよい。人妻を見つめるものではない。

シャクンタラー (手を胸において、独語)わが心よ、どうしてそんなに震えるの。背の君の

深い愛情を思い出して、さあ、しっかりしてたもれ。

王室附き祭官 (前に進んで)王に吉祥あれ。王様、苦行の衆は、掟の通り恭しくもてなされ、ここに控えておられます。お師匠より、何か言伝をもって来られました様子。王様には何卒それを、お聞きくださいますように。

王 (恭しく)謹んで承る。

両門弟 (手を挙げて)おお、陛下、勝利あれ。

王 (稽首して)卿等一同に敬礼つかまつる。

両門弟 陛下に吉祥あれ。

王 苦行に何の障礙もござらぬか。

両門弟 善き人を 守りて君の 世を知るに 浄き祭の さまたげの そもいずこより 来るべき。天つ日影の あまねきに いかでか暗の とざしやはする。 (一五)

王 (独語)げにこそ、余の担う王という名も、伊達ではない。(一般に聞えるように)カンヴァ仙どのはご機嫌ようござるか。

シャールンガラヴァ 陛下、成満位にある者は、その健康も意のままになるものでござる。師匠は先ず陛下の息災を問われ、次のような言伝を送られました。

王 何ご用でござるかな。

シャールンガラヴァ 「陛下が、互いの合意により、わが娘と契られしこと、われ喜びて両
人のために、そをうべなえり。何となれば、
われは知る 君しこよなき 傑れびと、美徳の化身 シャクンタラー。久しい哉や 創
造王 劣り勝りの なき夫妻 めあわせ了えて 世の人の 常の譏りを まぬかるると
は。 (一六)
されば今、みごもれる姫を迎えとり、ともどもに儀式の務めを果されよ」と。

ガウタミー 王様、私も申しあげたい儀がございます。私には、話す折がありませなんだ
ほどに。

王 老尼、お語りくだされ。

ガウタミー 親も目上も 姫かえりみず、君とてもまた みよりの人に こと問わざりし。
かたみに選びかわせし契り 今はた何を 何れにか言わん。 (一七)

シャクンタラー 背の君はいったい、何と仰せられることか。

王 (疑懼を伴い、当惑して聞いて)ああ、それは何を指してのこと。

シャクンタラー (独語)おお、王様の嘲りに満ちたお言葉の、傲慢に聞えること。

シャールンガラヴァ 「それは何を指してのこと」とは、そも何ごと。陛下は、浮世のしき
たりを、つまびらかにご存知のはずなるに。

操はかたく 守るとも 夫ある身の いつまでも 別れて里に 住むときは 人の口こ
そ うるさけれ。されば縁者の 望むらく 若き人妻 背の君の かたえ離れず あら
まほし、君のおぼえの めでたきと 否とは問わじ、さもあらばあれ。 (一八)

王 以前に余が、この女性を娶ったとな。

シャクンタラー (悲歎にくれて、独語)わが心よ、お前の恐れていたことが、ほんとになっ
て、現われました。

シャールンガラヴァ 陛下、
*おのが所行の みにくさを いとうがままに 正法に おもてを背く、そは王の 名に
ふさわしき ふるまいか。

王 何故あって、かく虚構のことを誣いられるのか。

シャールンガラヴァ (怒って)かく定めなき* 移り気は 世の常として 権勢に 酔いて心
の おごりたる 痴れ者にこそ 現わるれ。

*注 王の言葉を間にはさむこの二句は、アーリヤー調の詩節をなしている(カペッラー)。

王 そは余に対する甚だしき侮辱。

ガウタミー (シャクンタラーに向って)いとし子よ、恥かしがることはない。そなたの覆面
をとって進ぜよう。そうすれば背の君も、そなたを思い出されるであろう。(と言って、

その通りにする)

王　(シャクンタラーを眺めて、独語)望月の　虧くることなき　この姿　いまわが前に　立てれども、枕かわせし　ことの有無　定めかねつつ、朝まだき　露をふくみし　茉莉花を去りがてにする　蜂に似て　味わいかねつ　さりとては　離れもあえず　思いわぶ。(一九)

門衛女　(独語)おお、わが君は、あまりに正義を重んじ遊ばす。好運のもたらしたこのような珠玉の女性を、目に見ては、王様のほか誰が、思いためらいましょうぞ。

シャールンガラヴァ　陛下、何故かくは沈黙を続けられるや。

王　おお、苦行者、いかほど考えても、この女性との婚姻は、思い出されぬ。されば何として、自らを邪淫の者と見なし、懐妊の兆もしるきこの婦人を、迎え入れようぞ。

シャクンタラー　(独語)あら悲しや、あら悲しや。何として王様は、われらが婚姻を、お疑い遊ばすのやら。高く伸びたわが望みの蔓も、今は断ち切られたわいな。

シャールンガラヴァ　さな宣いそ。

ながく肌ふれし　娘御を　心ひろくも　ゆるしてし　聖に恥を　与えんや、なれが汚せしうず宝　持ち去るままに　任せつつ　盗人に似し　なれをしも　あがめさえする　その人に。(二〇)

シャーラドヴァタ　シャールンガラヴァ殿、もはや語るを止められよ。シャクンタラー、わ

れらは既に、言うべきことを言い尽した。そこなお方は、そなたの聞いた通りに語られた。そのお方に返答なされ。

シャクンタラー　(独語)あれほどの愛情が、このように変り果てた今となっては、思い出させたとて、何の甲斐があろう。とはいえ、われらは自らの証を立てねばならぬ。よし、きっぱりと申しましょう。(一般に聞えるように)背の君、(となかば言いかけて)いや、今はこうお呼びしてよいかさえ、疑われております。プルの血筋の王様、先ごろ庵では、固く契ったあげくのはて、生れつき無邪気なこのわらわに、あついお情をおかけくださいましたのに、今そのようなお言葉で、お拒みなさるのは、王様にふさわしいことでございましょうか。

王　(耳をふさいで)お黙りめされ、お黙りめされ。

わが家の誉　汚すべく　またこのわれを　堕すべく　なれがたくらむ　世迷いごと、岸を削りて　ゆく川の　清き流を　濁らせて　水辺の木立　倒すごと。(二一)

シャクンタラー　よろしゅうございます。もし王様がほんとうに、わらわを人妻とお気づかいなされて、そのように振舞われるのでございましたら、ある思出の品をお目にかけて、王様の疑いをお晴らし申しましょう。

王　何よりの名案。

シャクンタラー　(指環を嵌めるところに触れて)あら悲しや、あら悲しや。わらわの指には、指環がありませぬ。(と言って、悲歎にくれ、ガウタミーを見る)

ガウタミー　いとし子よ、シャクラ・アヴァターラ＊のシャチー・ティールタで、そなたが聖水を拝んだ時、指環が落ちたに違いありませぬ。

＊注　巡礼地の名。そこにシャクラ(＝インドラ)の神妃シャチーに捧げられた沐浴所がある。

王　これこそ、世に婦人の頓智と申すものじゃ。

シャクンタラー　運命の力が、ここに現われました。ほかのことを、王様にお話し申しましょう。

王　今こそ聞かねばならぬ。

シャクンタラー　ある日のこと、籐のあずまやで、蓮の葉の器に入れた水が、王様のお手に置かれておりました。

王　聞いている。それから。

シャクンタラー　丁度その時、わらわが養い子としておりました仔鹿が、近づいて参りました。そこで、王様はご同情遊ばされ、まずこの仔鹿から先に飲むがよいと、お呼びよせになりました。しかし仔鹿は、なじみの薄い王様のお手から水を飲むために、おそばへ寄りつきませんでした。その後でわらわが、同じ水を手にいたしましたら、仔鹿は安

心した様子を見せました。その時王様は、笑って仰せられました。ほんに誰でも、ゆかりの者を信頼するものじゃ。そなた達二人は、森住まいの者だによってと。

王　このように様々な、おのが所行を言い飾る、蜜のような偽り言で、道楽者はおびき寄せられるのじゃ。

ガウタミー　大王様、左様に仰せられるものではございませぬ。苦行林に生いたったこの人は、偽りごとを知りませぬ。

王　老尼よ、

習うとしもは　あらねども　およそ女子の　さかしさは　鳥けものにも　知られたり、
ましてや人の　心ある　さとき女性に　おいてをや。コーキラ鳥(郭公)は　その雛の
巣だつところまで　よそ鳥に　育ましむと　聞えたり。　(二二)

シャクンタラー　(怒って)見さげたお方、おのが心根から推し量って、万事を判断なされます。誰が、正法の鎧の陰にかくれて、草で掩われた井戸にも似たそなたのまねを、いたしましょう。

王　(独語)森に住んでいるためか、この女性の怒りには、どうも手管のあとが見えぬわい。と申すのも、

見つめしまなこ　血走りて　わきにもそれず、口もるる　言の葉いとど　荒けれど　か

ざり描き　いい廻し、紅き唇　わななきて　霜になやめる　花あわれ、やさしくたれし
細眉は　二つながらに　怒り逆だつ。 (二三)

しかし、余が心に思い惑うと見てとって、この女性は、無邪気のさまを装いつつ、怒りを発したのだ。何となれば、

覚えなければ　わがこころ　つれなく閉ざし　人知れず　かわせし情　否む見て、まな
こ血走り　怒り燃え　柳の眉の　逆だてば、スマラ〈愛の神の異名〉の神の　細弓の　二つ
に折れし　風情あり。 (二四)

(一般に聞えるように)女性よ、ドゥフシャンタの行跡は、民の間によく知られてじゃ。しかし、そなたの言われるようなことは、誰も認めぬ。

シャクンタラー　よくぞ仰せられました。わらわは、今自堕落な女にされました。と申すのも、プルの血筋のこのお方を信頼し、口には蜜、心は石のお方の手の中に、落ちましたれば。(と言って、衣の裾で顔を掩い、泣く)

シャールンガラヴァ　制御を欠く軽率は、このように焼きつく後悔を、もたらすもの。

人と人との　結びあい　わけてはばかる　密ごと　とく見定めて　なすべかり。かたみ
に心　知らずして　友と許せば　やがてかく　仇と変り　果つものを。 (二五)

王　ああ、何故そなた達は、この女性の言葉を信じ、多くの科を言いたてて、余を侮辱し召さるるぞ。

シャールンガラヴァ　(不快げに)互いの言い分に、上下顛倒あるは、お聞きの通り。

生来かつて　いつわりを　習いしことの　なき者の　語る言葉に　権威なく、ひとを欺
く　すべをのみ　知識と称え　学ぶちょう　人の言葉ぞ　真理なる。 (二六)

王　おお、実言の人よ、よし、われらは、げに、言わるる通りの者と認め申そう。しからば、この女性を欺いて、何の得るところかある。

シャールンガラヴァ　没落。

王　プルの後裔が、没落するとは信じられぬ。

シャールンガラヴァ　陛下、この上は問答無益。師匠の命令は果された。われらはこれにてお暇申す。

とまれこの者　君が妻　棄てられもせよ　取りもせよ。妻としあれば　背の君に　果な
き力　あるものを。 (二七)

ガウタミー尼、先に立って行かれませ。(と言って、出発する)

シャクンタラー　わらわは、この嘘つきに騙されました。あなたさま方も、わらわを棄てて、おいでなさりまするか。(と言って、後を追う)

ガウタミー　(振り返り、うち眺めて)シャールンガラヴァ殿、シャクンタラー姫が、哀れに

泣き悲しみ、われらの後を追って参ります。つれなく拒む夫の許で、あのかわいそうな姫は、どうしたらよいのやら。

シャールンガラヴァ　（怒って振り向き）出過ぎ者め、勝手気ままに振舞う所存か。

シャクンタラー、恐れて震える

シャールンガラヴァ　姫、聞かれよ。

なれにして　王の言葉の　ままならば　家の汚れの　なれを見て　父君何の　用かある。
もしまたなれの　誓いごと　やましからずば　背の君の　家に留り　はした女に　身は
やつすとも　忍ぶべからん。（二八）

留まられよ。われらは罷り申す。

王　おお、苦行者、何故この女性を欺かれるぞ、見よ、

月の光は　ほかならぬ　クムダの花を　開かしめ　日はパンカジャ〈蓮華の一種〉を　目
ざましむ。みだら心の　おさまれる　気高き人の　いかでかは　抱きしめなん　人妻を。（二九）

シャールンガラヴァ　王よ、たとい錯乱のため、以前の出来事を忘却したにせよ、不法を恐れる者が、いかにして妻を棄ててよかろうぞ。

王　事の軽重を尊師に問い申す。

われ迷えるか　あるはまた　この手弱女の　いつわるか、その疑いの　雲深み　妻棄つ
べきか　あるはまた　汚らわしくも　人妻を　抱きしめんか。（三〇）

王室附き祭官　（深く考えて）もしこのようになされましたら。

王　尊師のお指図承る。

王室附き祭官　その女性は、分娩の時まで、拙者の家に、留まられるが、よろしゅうございます。

王　それはまた何故に。

王室附き祭官　堪能な占者たちが、かつて陛下にお告げ申しあげました。陛下は先ず、天地両界を支配する転輪聖王を、御子として、生ましめられましょうと。もしこの仙人の娘の子が、そのような瑞兆を具えておりましたら、その時こそ娘御を喜び迎え、後宮へお入れなさいませ。もし然らずば、娘御を父の許へ、お返しなさるは、必定のことでございます。

王　尊師がよいと思うように、取り計らわれよ。

王室附き祭官　（立ちあがって）娘御、こちらへ、こちらへ。拙者の後について来られよ。

シャクンタラー　大地の神様、わらわのために開き給え。（と言って、泣きつつ、王室附き祭官、苦行者およびガウタミーと共に、立ち去る。呪詛のため記憶の乱れた王、シャクンタラーのことを考える）

（楽屋の内で）　あら不思議、あら不思議。

王　（耳を傾けて）何事が出来いたした。

王室附き祭官　（登場して、驚きにみち）陛下、実に稀有なことが起りました。

王　そもいかような。

王室附き祭官　カンヴァ仙の門弟が、退出いたしました時、
おのが定めの　つたなさを　かこちわびつつ　手弱女が　手をさし伸べて　さめざめと
泣くよと見えし　折しもあれ、

王　その時、何といたした。

王室附き祭官　女形の光　たちまちに　娘を掠め　空遠く　名にし仙女*の　霊場の　方に
向いて　消え失せつ。　（三一）

＊注　原名アプサラス・ティールタ。

一同驚愕のこなし

王　尊師、余はこの件を既に却下いたした。何故埒もない臆測で、更に追求いたそうぞ。
すてておけ。

王室附き祭官　王様に勝利あれ。（と言って退場）

王　ヴェートラヴァティー、心も乱れ気味じゃ。休息所へ案内たのむ。

門衛女　王様、何卒こちらへ、こちらへお運び遊ばしませ。

王　（歩き廻りつつ、独語）拒みてし　聖の娘　わが妻と　覚えはせねど　わが心　いたく騒
ぎて　かの人の　切にしみらの　語り草　うべなわしめんと　われを誘う。　（三二）

と言った後、一同退場

シャクンタラーの否認と題する第五幕　終

第六幕　シャクンタラーとの別居

序

警視総監、後手に縛った男を引立てて、巡査二人と共に登場

二人の巡査　（男を打擲して）こら、物取りめ、ありていに申せ。貴様はどこで、こんな大きな宝石のぴかぴか光る、御名を彫りつけた、王様の指環を手に入れた。

漁夫　（恐怖のこなしで）旦那さま、ご慈悲でごぜえます。わしは、そんな大それたことを、しでかす者ではごぜえません。

巡査の一人　貴様を清浄無垢なバラモンと思召して、王様が貴様に引出物を、賜ったとでも申すのか。

漁夫　まずお聞きくだせえ。わしは、シャクラ・アヴァターラに住んでいる漁師でごぜえます。

第二の巡査　こら、物取りめ、貴様の素姓や住所を、誰が尋ねた。

警視総監　スーチャカ、順序よくなんでも話させるがよい。中途で口をはさむなよ。

二人の巡査　閣下のご命令のままに。とっとと申せ。

漁夫　やつがれめは、網や釣針などさまざまの道具で魚を捕え、家の者の口をすごしておりますんで。

警視総監　（笑って）はてさて、そちの生計は、清らかなものじゃな。

漁夫　旦那さま、そうおっしゃるもんではごぜえません。

親代々の　生業は　嫌われたとて　棄てらりょか。けものを殺す　肉屋でも　慈悲の心
が　ないじゃなし。　(一)

警視総監　それから、それから。

漁夫　してある日のこと、わしはでっかい鯉*を一匹、細かにおろしやした。そしたらその腹の中に、でっかな宝石のぴかぴかする、この指環を見つけたというわけ。そのあとこで、そいつを売り飛ばそうと、見せていたところを、旦那さま方にとっつかまりましたんで。これが指環の来歴でごぜえます。こうなった上は、殺すなり、打つなり、存分になせえませ。

*注　原名ローヒタ・マツヤ(赤い魚)。鯉の一種で長さ三尺に達するものもあり、背はオリーヴ色、腹部は金色、鰭と目は赤い。

警視総監　（指環を嗅いで）ジャーヌカ、これが魚の腹の中にあったことは、疑いない。この通りまだ生臭いにおいが残っておる。さてどうして、魚腹へはいったかを、詮議いたさねばならぬ。されば参れ。われらは王宮へ赴こう。

二人の巡査　（漁夫に向って）こら、歩け、巾着切め、歩け、（と言って、一同歩き廻る）

警視総監　スーチャカ、ここな城門の入口で、油断なく、わしを待っておれよ。お城に参内して、わしが出てくるまでな。

二人の巡査　閣下、ご参内なされて、王様のご恩寵にあずかられますように。

警視総監　そうありたいものじゃ。（と言って退場）

スーチャカ　ジャーヌカ、閣下はごゆっくりだな。

ジャーヌカ　ほんに王様というものは、よい折でないと、拝謁できぬからな。

スーチャカ　ジャーヌカ、指先がむずむずするわい。（漁夫を指さして）この巾着切の息の根を、とめてやりたくてな。

漁夫　旦那は罪もねえ者を、殺したりなさらねえように願いますだ。

ジャーヌカ　（うち見やって）あすこに、俺らのご主人が、王勅を持って、おいでになったぞ。（漁夫に向って）さあ、貴様は、もう一度家族の顔が見られるか、それとも、禿鷹や豺の餌食になるかだろうよ。

警視総監　（登場して）急げ、急げ。（となかば言いかけた時）

漁夫　ああ、もう駄目だ。（と言って、絶望のこなし）

警視総監　縄を解け、漁師の縄を解け。その指環を見つけた由来は、まぎれもなく正しいのだ。ほかならぬ王様が、わしに語られたのじゃ。

スーチャカ　閣下のご命令のままに。こやつ閻魔の庁まで降りていって、また娑婆へ舞い戻りくさったわい。（と言って、漁師を縄目から解放する）

漁夫　（警視総監に敬礼して）旦那さま、あなたのおかげさまで、わしの命が助かりましただ。（と言って、足下にひれ伏す）

警視総監　起て、起て。わが君のお恵みにより、指環の償い料として、この褒美をそちにくだされた。さあ、これを取るがよい。（と言って、一個の腕環を漁師に授ける）

漁夫　（喜んで受け取り）おありがとうごぜえます。

ジャーヌカ　こやつ、王様にいかいお恵みを施されたわい。串刺柱から下された上、象の背中に乗せられたというものだ。

スーチャカ　閣下、ご褒美から見て、わが君さまが、あの高直な宝石の嵌まった指環を、よほど大切に思召されたのが分ります。

警視総監　いや、高直な宝石が、あの指環に嵌まっているからと申して、ご満足遊ばした

のではない。わけはこうなのじゃ。

二人の巡査　何ゆえでございます。

警視総監　わしの察するところ、王様は、あの指環をご覧になって、誰か意中の人を思い出されたのじゃ。と申すのは、生れつき感動を外に表わさぬお方なのに、あれを眺めて、いたく憂鬱になられたもの。

スーチャカ　王様は、閣下に対して、定めしご満悦でございましょう。

ジャーヌカ　この漁師のおかげでと、俺は言いたいところだ。（と言って、羨ましげに漁師を見る）

漁夫　旦那さま方、この半分は、旦那方の酒代に進上いたしますべえ。

ジャーヌカ　漁師どん、そなたは、今わしにとって、前より何層倍も仲よしな親友になったわい。何はともあれ、カーダンバリーの酒を飲みあって、われらの友情を祝わねばなるまい。さあ、揃って酒屋へ出かけよう。

と言った後、一同退場

序　終

その時、空中を飛行して、ミシュラケーシー登場

ミシュラケーシー　順番で勤めるアプサラス・ティールタの見張りの役目を了えました。これから、この徳高き王様のご様子を、親しく見定めることにしましょう。メーナカーさんの縁につながるわたしには、シャクンタラー姫もわが身のように思われる。それに、メーナカーさまからの頼みもあるし。（四方を眺めて）まあ、何としたことか、時もさし迫った今日になって、王様のご殿では、お祭の仕度ができていない様子。わたしは瞑想によって、万事を見透す神通力をもってはいる。とはいえ、友達への義理も考えて見ねばならない。よろしい、これから、隠れ頭巾で身をかくし、御苑を取り締るお女中衆のそばに寄り添って、模様を伺うことにしましょう。（と言い、降下のこなしをして、立つ）

その時、マンゴーの蕾を眺めつつ、腰元登場、その後に続いて、他の腰元登場

第一の腰元　春のいぶきの　マンゴーの蕾　みどりの柄にも　紅さして　見えた見ました
マンゴーの蕾　お祭月の　よいしらせ。（三）

第二の腰元　パラブリティカーさん、何をそこで、独りごと言っていらっしゃるの。

第一の腰元　マドゥリカーさん、マンゴーの若枝を見ますと、パラブリティカー〈郭公の雌の意味がある〉は、気が狂ってしまいます。

第二の腰元　（喜んで）まあ、春の月がやって参りましたの。

第一の腰元　マドゥリカー〈恐らく蜜蜂の雌の意味〉さん、あなたにとっても、今は喜びと恋と歌との時でございます。

第二の腰元　パラブリティカーさん、どうぞわたしを支えてくださいませ、つま先で立ちあがり、この蕾で愛の神様に、お祈をいたしますほどに。

第一の腰元　もしそうなら、わたしにも、お祈の功徳を半分わけてくださいませ。

第二の腰元　パラブリティカーさん、お言葉がなくとも、きっとそういたします。わたし達二人は、一つ体も同じでございますもの。（友達に寄りかかり、マンゴーの蕾を取ったとなし）ああ、このマンゴーの蕾はまだ開いておりませんのに、柄を折っただけで、よい香りがいたします。（合掌して）南無尊き愛の神、

弓執りし　愛の大神に　なれ捧ぐ　マンゴーの蕾、五本（いつもと）の　恋の矢のうち　とりわきて
いみじくぞあれ。なが的は　神の選びし　うら若き　乙女のこころ。　(三)

と言って、マンゴーの蕾を投げる

侍従　（登場し、怒って）やめよ、無分別者め、春の祭が、王様によって、あの通りさしとめ

られているにもかかわらず、そちはマンゴーの蕾を折ったりして。

二人の腰元　（恐れて）お赦しくださりませ、お赦しくださりませ。侍従さま。わたくしどもはそのことをまだ存じておりませなんだ。

侍従　ふん、そち達は、それを聞いておらぬと申すか、春の木々も、それに宿る鳥たちも、王様のご命令に服しておるのに。と申すのも、

マンゴーの蕾　時ふれど　花しべの粉　見えそめず、咲くやと見えし　クルヴァカも
蕾のままに　ためらいつ。霜月は早や　いにたれど　コーキラ〈郭公〉の声　喉ごもる。
愛の神さえ　かしこみて　箙（えびら）にもれる　花の矢を　なかばは抜けど　梓弓（あずさゆみ）　射もせでまたも　納むらし。　(四)

ミシュラケーシー　疑いもないこと。この徳高き王様は、大きな威力をもっていらっしゃる。

第一の腰元　侍従さま、わたくしども二人が、王様の義理のご兄弟、ミトラーヴァスさまのお言附により、この園の中で絵をかきますため、王様のお足許へ遣わされましてから、幾日もたっておりませぬ。それでわたくしどもは、そのことをまだ聞いておりませなんだ。

侍従　それならば、二度とかようなことを、いたしては相ならぬぞ。

二人の腰元　わたくしどもは知りとう存じます。われらが伺ってよろしいことなら、侍従

さま、なぜ王様が、春の祭をご禁止遊ばしましたか、お話しなされてくださりませ。

ミシュラケーシー　王様方は、祭がお好きなもの。それゆえ、何か容易ならぬわけがあるに違いない。

侍従　(独語)これはもう広く知られていること。話してわるいわけはない。(一般に聞えるように)シャクンタラー姫否認の噂は、既にそち達の耳にはいっておるか。

二人の腰元　侍従さま、王様が指環をご覧になったところまでは、王弟さまのお口から、伺っております。

侍従　それならば、語り聞かすこともごく僅かじゃ。王様は、指環をご覧遊ばして、記憶を取り戻された時、「余はまことひそかに、シャクンタラー姫を娶っておきながら、心の迷いのため、姫を拒んだ」と、仰せられ、それ以来王様は、後悔に悩んでおいでなさる。

楽しみごとも　厭われて　常とはかわり　大臣らに　日ごとの謁を　賜らず、寝床のは
しに　伏しまろび　まどろみもせで　夜をあかす。後宮の女に　ねんごろの　日ごろな
れにし　言の葉を　かけんとすれど　あやにくに　名をとりちがえ　しばらくは　うち
恥じらいて　心みだるる。　(五)

ミシュラケーシー　うれしや、うれしや。

侍従　王様のこの御悩のゆえに、祭は禁止になったのじゃ。

二人の腰元　ご尤もなことでござります。

(楽屋の内で)　王様、お進み遊ばしませ、お進み遊ばしませ。

侍従　(耳を傾けて)おお、王様がここへおいで遊ばす。さあ、行け。そしてそち達の務めを果せ。

二人の腰元退場

その時、後悔を示すにふさわしい服装をした王、ヴィドゥーシャカ並びに門衛女と共に登場

侍従　(王をうち見やって)ああ、どんな状態にあっても、容姿の勝れた人には、優美が備わるもの。と申すのも、王様は、いかほど御悩に苦しめられても、やはり美しく拝される。

わが君は、
花やげる　きらびの飾　あともなく　黄金の腕環　ただ一つ　ゆるく弓手の　ただむき
に　品よくかかり、くちびるは　もるる吐息に　色かわり　思いつのりて　夜もいねぬ
血走るまなこ、さりながら　生れつきたる　かがやきの　そとに溢れて　なかなかに
やつれにたれど　痩せ枯れの　みにくさはなし、砥石もて　削り磨きし　うず珠のごと。　(六)

ミシュラケーシー　(王を眺めて)否認の恥かしめを受けてさえ、シャクンタラー姫がこの方

王　のために、思いこがれるのも無理はないわ。
（思いに耽り、ゆるやかに歩き廻って）
ああいまわしき　このこころ　鹿のまざしの　恋人に　ゆりおこされし　かの時は　深きねむりに　閉じながら　姫なき今は　めざめつつ　果なき悔いを　くりかえす。　（七）

ミシュラケーシー　あのかわいそうな姫の運命は、ほんにこの通りだわ。

ヴィドゥーシャカ　（独語）またしても王様は、シャクンタラー熱に悩まされてござる。どうしたら癒されるのか、拙者にはとんとわからぬ。

侍従　（近づいて）大王様に勝利あれ、勝利あれ。御苑の園生は、検分ずみにございます。御意のままに、ご休憩所へおこし遊ばしませ。

王　ヴェートラヴァティー、余の言葉と申して、ピシュナ大臣に伝えよ。余は不眠のため、今日司法の座につくことかなわぬ。民事に関し、そちの調査したところを、紙葉にしたため、余の許に送り届けるようにと。

門衛女　王様のご命令のままに。（と言って退場）

王　パールヴァターヤナ、そちもまた、職務を怠るなよ。

侍従　かしこまりました。（と言って退場）

ヴィドゥーシャカ　王様は、うるさ方をお遠ざけになりました。さあこれから、霜の季節も

過ぎて快いこの御苑で、気をお晴しなさいませ。

王　（溜息をついて）友よ、災厄は間隙より入ると申すことは、虚言でない。見よ、
聖が姫の　恋の思出　否み拒みし　心の闇の　晴るると見るや　早や愛の神　われを射んとて　わが友よ　マンゴーの征矢を　弓につがえつ。　（八）
また、
わが名刻みし　指環に記憶　ふとよみがえり、故なく棄てし　かわゆき人を　果なき悔いに　偲びては泣き、身近かにせまる　春の香りに　そぞろうらさぶ。　（九）

ヴィドゥーシャカ　王様、この杖で愛の神の矢をへし折る間、静かにしておいでなされませ。
と言って、杖をふりあげ、マンゴーの若枝を、たたき落そうとする

王　（笑みを浮べて）もうよい。バラモンの威力はよく分った。友よ、さていずこに坐って、愛人にどことなく似かよった蔓草に、目を楽しませたらよいかな。

ヴィドゥーシャカ　王様は、おそば附きの御右筆、メーダーヴィニーに申しつけられました、余はこの時を、マーダヴィー・ラター（蔓草の一種）のあずまやで、過そうと存ずる。余が手ずから画板の上にえがいたシャクンタラー姫の絵姿を、そこに持参いたせと。

王　そのようなものだけが、余の心を慰めてくれる。さればそのマーダヴィー・ラターのあずまやへ案内いたせ。

ヴィドゥーシャカ　王様、こちらへ、こちらへお運びくださいませ。（と言って、両人歩き廻る。
ミシュラケーシーその後に随う）

ヴィドゥーシャカ　宝石を鏤(ちりば)めた石台のありますこのマーダヴィー・ラターのあずまやは、人気もないため、声なき歓迎の辞をもって、王様をお迎えしているようでございます。さあ中にはいって、腰をおろしましょう。（両人その通りにする）

ミシュラケーシー　蔓草にかくれて、かわゆい友達の絵姿を、拝見しましょう。そうして、背の君の切なる愛情を、姫にお知らせいたしましょう。（と言って、立つ）

王　（溜息をついて）友よ、今はすべてを思い出す。始めてシャクンタラー姫を見た時のいきさつは、もうそちに話した。余が姫を否認した際、丁度そちは、余のそばにおらなんだ。姫の名は、前にも申したが、そちも余と同様に忘れたかな。

ミシュラケーシー　これだから、王様というものは、瞬きするまも、心ある介添と離れてはいけないのだわ。

ヴィドゥーシャカ　王様、忘れはいたしませぬ。しかし、すっかりお話し遊ばした後で、王様はおつけ加えになりました。これは戯れの思いつき、本気の沙汰ではないと。頭の鈍い拙者は、その通りのことと存じておりました。とは申せ、このたびの件につきましては、運命の力が強うございます。

ミシュラケーシー　ほんにその通りだわ。

王　（一瞬考えて）友よ、余を助けてくれ。

ヴィドゥーシャカ　王様。それはまた陛下に似つかわしからぬこと。傑れた人は、どんな時でも、悲しみにまけてはならぬものでございます。風あたりが強くても、山は決して揺らぎませぬ。

王　友よ、いわれなき苦しみにさいなまれたあの人の、あの時の有様を思い出すと、余はほんに、いても立ってもおられぬのじゃ。何となれば、姫は、

われに拒まれ　伴れびとと　ともに去らまく　欲(ほ)りすれど　とまれ、とまれと　声あら
く　師にも劣らぬ　師の弟子の　うち罵れば　せんかたも　なきの涙に　かいくもる
まざしをまたも　ふり向けつ　むごきこころの　わが方に。毒をちぬりし　矢にも似て
ああ、このことの　われをさいなむ。　（10）

ミシュラケーシー　やれやれ、おのが没義道(もぎどう)な仕打を、思いつめることは苦しいものだわ。

ヴィドゥーシャカ　王様、拙者が考えますに、姫は、誰か空中を飛行するものに、つれ去られたのでございます。

王　友よ、夫に貞節な姫に、誰が手を触れ得ようぞ。メーナカーが姫の生みの母であると、余は姫の友達から聞いている。メーナカーの仲間のものか、またはメーナカー自らによ

って、つれ去られたのだと、余の心は想像する。

ミシュラケーシー　驚くべきは、ほんに、記憶の昏迷で、その覚醒ではないわ。

ヴィドゥーシャカ　王様、もし左様ならば、ご安心遊ばせ。たしかに姫とめぐりあうに相違ございませぬ。

王　それはまた何として。

ヴィドゥーシャカ　父親にしろ、母親にしろ、娘が長く夫と離れているのを見て、我慢ができるものではございません。

王　友よ、

夢か、幻か、心の乱れか、善業の報い　はたこれまでか、切なる望み　険しき崖に　落ちて再び　帰りくる日の　あらじとぞ思う。　(一一)

ヴィドゥーシャカ　王様、そう仰せられますな。指環が、何よりその証拠ではございませぬか。不思議なめぐりあいがきっと起ることを示しております。

王　(指環を眺めて)たやすくは至り得ぬ場所(姫の指)から、すべり落ちたこの指環は、なげかわしい。

なが果報見て　思えらく　指環よ、なれが福業も　われに劣らず　うすかりと、爪くれないの　色はゆる　白魚の指に　はめられて　幸はかなくも　落つるとは。　(一二)

ミシュラケーシー　もしほかの人の手に渡ったとしたら、ほんになげかわしいことだったわ。姫、そなたは遠くにいらっしゃる。それでわたし独り、耳の法楽をしているのだわ。

ヴィドゥーシャカ　王様、お名前入りのこの指環は、いったいどのような言葉を添えて、姫の手に嵌められたのでございますか。

ミシュラケーシー　わたしと同じ好奇心で、王様に話させているわ。

王　友よ、聞いてくれ。苦行林からわが都へ向って出発しようとした時、姫は涙をためて、こう申した、どれほどたちましたら、背の君は、またわらわのことを、思い出してくださいますかと。

ヴィドゥーシャカ　それから、それから。

王　余は、この名前入りの指環を姫の指に嵌めながら、こう申したものだ。

ヴィドゥーシャカ　何と仰せられました。

王　指環に彫りし　わが名前　日ごと日ごとに　一字ずつ　かぞえ待たれよ、かがなべて終らぬ先に　わぎもこよ　わが後宮の　つかさ人　早やながもとに　近づきて　なれを都へ　みちびかん。　(一三)

それだのに余は、あれほどにつれないことを、いたしてしまった。

ミシュラケーシー　ほんに楽しい日限を、運命が守らせなかったのだわ。

ヴィドゥーシャカ　とはいえ、どうしてそれが、釣針みたように、鯉の口の中へはいったのでございましょう。

王　シャチー・ティールタで、姫が聖水を拝んだ時、ぬけ落ちたのじゃ。

ヴィドゥーシャカ　なるほど。

ミシュラケーシー　それで、不法を恐れる王様が、かわいそうなシャクンタラー姫を、娶るに躊躇遊ばしたのだわ。とはいえ、それほどの恋慕は、思出の品などを、気にしないはず。これはまた何としたことなのかしら。

王　ままよ、余はただこの指環を責めてやりたい。

ヴィドゥーシャカ　（笑みを浮べて）拙者もまた、この杖を責めてやりましょう。俺はまっ直ぐなのに、なぜ貴様は曲りくねっているのかと。

王　（この言葉が耳に入らぬこなしで）なれいかなれば　たおやげる　指うつくしき　手をはなれ　あと白浪と　水に沈める。

とはいえ、

心魂（こころだま）なき　器には　よきとあしきを　弁える　すべなきものを　詮（せん）なしや。これとはかわる　われはまた　何に狂いて　つれなくも　拒み棄てつる　わぎもこを。（一四）

ミシュラケーシー　わたしの言いたいと思うことを、ご自身で語られているわ。

ヴィドゥーシャカ　王様、拙者は空腹に殺されても、お構いなしでございましょうか。

王　（これに構わずに）姫、いわれなくそなたを拒んだことを悔い、心焼かれるこの身を憐んで、再び姿を現わしてくりゃれ。

腰元　（画板を手にもって登場）わが君さま、奥方さまのお絵姿を、ここに持って参じました。

（と言って画板を示す）

王　（うち見やって）ああ、何と絵姿の美しいことじゃ。と申すのも、

涼しまなこは　切れ長の　眦（まじり）に伸びて、柳まゆ　圓（まど）かにまがり、久方の　月の光か　皓（しろ）歯（は）もる　笑（えまい）のかげに　うるおいし　下つ唇、ほの紅き　棗の色に　さや匂（にお）う　上つ唇、わぎもこの　花のかんばせ　絵のうちに　語るかに見ゆ、恋さそう　たわむれの媚　はれやかに　あふるる色の　みなぎれば。（一五）

ヴィドゥーシャカ　（うち見やって）王様、真にせまって美しい絵でございます。拙者の目は、絵の高み窪みに従って、よろめくように思われます。とやかくと申すまでもないこと。魂がはいっているかと疑われまして、つい話しかけて見たくなります。

ミシュラケーシー　まあ、徳高き王様は、絵筆の道にもお勝れ遊ばしていること。いとしい姫が、わたしの前に立っているような気がするわ。

王　友よ、

この絵姿の　ここかしこ　うるわしからぬ　ふしあらば　そはわが技の　拙さに　よるとこそ知れ。しかすがに　絵筆のすさび　わぎもこの　あいくるしさの　いかほどかまねて伝えつ　そこはかと。　（一六）

ミシュラケーシー　後悔のため、いよいよ深まる愛情に、ふさわしいことだわ。

王　（溜息をついて）ああ、まのあたり　わぎもこが　訪れしとき　にべもなく　拒み棄てつる　われながら　いま絵姿を　恋いあがむ。心ゆくまで　掬びえし　道べの清水　よそに見て　沙漠の水の　まぼろしの　影をしたいて　あくがるる　（一七）

ヴィドゥーシャカ　三人の姿が見えます。どれもこれも皆美しい人ばかり。さてどれが、シャクンタラー姫でございますかな。

ミシュラケーシー　なさけないこの人は、姫の姿が見分けられないのだわ。目があっても節穴同然。この人はまだ姫に気づかないのよ。

王　そしてそちは、どれだと思うのかな。

ヴィドゥーシャカ　（じっと眺めて）思いますに、水を灌がれて若芽のぬれたアショーカの枝にもたれ、元結がゆるんで髪から花が落ちかかり、顔には汗の玉を浮べ、蔓草のような両腕は、枝一本ずつ握ってぐっと垂れさせ、腰衣はぬげて落ちそう、少し疲れ気味に画かれた女性、これこそ正にシャクンタラー姫。ほかの方はそのお友達でございましょう。

王　そちは中々の目利じゃ。そこには余の愛情のしるしがついている。

絵のはしはしは　汗ばみし　指跡しるく　よごれそみ、われとはなしに　頬つたい　落ちし涙は　ここかしこ　絵具の凝りし　跡に知らるる。　（一八）

チャトゥリカー（前出のメーダーヴィニーと同一の腰元）、余はこの憩いの園を、かきかけにいたした。されば行け。早速絵筆を持って参れ。

腰元　マーダヴィヤさま　私が帰って参りますまで、画板を持ちなされてくださいませ。

王　余が自らそれを持つことにいたす。（と言って、言葉の通りにする。腰元退場）

ヴィドゥーシャカ　王様、川をそこへおかき添えなさるおつもりでございますか。

ミシュラケーシー　いとしい姫の気にいった場所を、あれこれとおかき添え遊ばすおつもりだわ。

王　友よ、まあ聞いてくれ。

水清らなる　マーリニー　岸辺の砂に　寄りそいて　憩うハンサ（鵞鳥に似た水鳥）の　めおとづれ、川をめぐりて　汚れなき　雪のみ山の　裾の丘　より伏すヤクの　たたずまい　枝に吊して　干る間まつ　聖の衣　しなだるる　木の下陰に　雌鹿は　黒き雄鹿の角の辺に　左のまなこ　かいこする　静けき景色　えがき添えなん。　（一九）

ヴィドゥーシャカ　（独語）言葉の様子から察するに、王様はこの画板を、顎鬚が長いのでう

つ向き加減の苦行者の姿で、埋めつくすに違いない。

王　それから、シャクンタラー姫の好きな身の飾をもう一つ、ここにかき添えるのを忘れていた。

ヴィドゥーシャカ　いったい何でございます。

ミシュラケーシー　きっと、森住まいにも、乙女の身にも、ふさわしいものに違いないわ。

王　柄元を耳に　たばさみて　花しべ長く　頬に垂る　シリーシャの花、かつはまた　さ
やけき秋の　色はゆる　月の影かや　やわらかき　蓮の茎の　糸の紐　胸にかかるを
えがきもらしつ。（二〇）

ヴィドゥーシャカ　しかし、なぜ姫は、赤い蓮華のように美しい手先で、顔をかくして、ひどく驚いた様子をしておられるのでございますか。（うち見て）ああ、花の汁盗人、碌でなしの、恥しらずのこの蜜蜂めが、姫の蓮華のような顔を、狙っておりますわい。

王　そこな恥しらずを追い払え。

ヴィドゥーシャカ　王様だけが、不法者を懲らしめる力を、おもちでございます。

王　おい　おい、花の蔓に歓び迎えられる賓人よ、なぜここで飛び廻って、くたびれもうけをしているのじゃ。

あれ妻蜂は　花の中　のどが渇いて　苦しいけれど　夫おもいの　こころ意気　甘い蜜

とて　ひとりじゃ吸わぬ　いつのいつまで　待ちぼうけ。（二一）

ミシュラケーシー　何とねんごろに追い払われたこと。

ヴィドゥーシャカ　この蜂と申すやからは、とかく禁令に背くやつでございます。

王　（怒って）こらそちは余の禁令に従わぬな。さらばいま申し聞かすぞ。

若木の若芽　さながらに　うら好ましき　君が唇、恋のうたげの　さなかにも　心して
こそ　わが吸いし　まどかに赤き　君が唇、なれもし刺さば　蜜蜂よ　はちすの花の
奥ふかき　囚獄になれを　繋ぎとどめん。（二二）

ヴィドゥーシャカ　王様、陛下がそのように厳しい仕置をお定め遊ばしたからには、蜂めもどうして恐れずにおられましょう。（笑って、独語）王様は、ちとおつむが狂った様子。王様のそばにいるので、拙者まですっかり似てしまったわい。

王　何ゆえ追い払っても、立ち去らぬのか。

ミシュラケーシー　激しい愛情は、思慮深い人まで、狂わすものだわ。

ヴィドゥーシャカ　（一般に聞えるように）王様、これは絵にすぎませぬ。

王　何と、絵だとな。

ミシュラケーシー　わたしでさえ、やっと今、事の次第がはっきりしたのだもの、まして思出のままを経験遊ばす王様には、無理もないことだわ。

王　なぜそのように余計なことをいたすのじゃ。

恋しき人の　おもかげに　胸みちみちて　まのあたり　君見る幸の　酔いごこち、なま
じうつつに　覚されて　また空蟬の　命なき　絵となり果てぬ　わぎもこは。　(三三)

と言って、涙を流す

ミシュラケーシー　まあ、この運命の道は、こし方にも、ゆく末にも、塞がれているのだわ。

王　どうして余は、絶えまのない苦しみを味わうのであろうか。

烏羽玉の　めざめて明かす　夜な夜なは　夢に逢う瀬の　路もたえ　涙の雨の　ひまを
なみ　絵姿さえも　見るによしなし。　(三四)

ミシュラケーシー　王様、かわいいシャクンタラー姫が否認されて蒙った不幸を、陛下はすっかりお償い遊ばされたわ。しかも姫の友達の面前で。

チャトウリカー　(登場して)わが君さま、絵筆の箱を持ちまして、私がこちらへ参じようといたしましたら、

王　そしていかがいたした。

腰元　ピンガリカーをお連れになったヴァスマティー女王さまが、わらわ自ら背の君にお届けすると、仰せられ、その箱を無理やりにお取りあげになりました。

ヴィドゥーシャカ　そなたは、どんな風にして、逃げてきたのかな。

腰元　蔓草の枝にひっかかった女王さまの裾を、腰元が離しております間に、私は姿をかくしてしまいました。

(楽屋の内で)　女王さま、おひろい遊ばせ、おひろい遊ばせ。

ヴィドゥーシャカ　(耳を傾けて)王様、音に聞えた後宮の牝虎どのが、こちらへ突進、メーダーヴィニーを小鹿よろしく一呑にせんず勢で、早や身近かに迫られました。

王　友よ、余の寵をうけて心傲った女王がやって参った。それゆえそちは、この絵姿を守ってくりゃれ。

ヴィドゥーシャカ　そち自身をも守れと、なぜ仰せになりませぬか。(画板を取り、立ちあがって)王様が後宮の羂からお逃れになりましたら、拙者を凌雲閣からお呼びくださいませ。この絵をそこにかくまっておきます。あそこには、鳩よりほかに、誰も見るものはおりませぬ。(と言って、急ぎ退場)

ミシュラケーシー　ああ、お心は他の人に移っているものの、かつての恩寵を守り通しておいで遊ばす。王様の愛情は、長続きするのだわ。

門衛女　(紙葉を手に持って登場)王様に勝利あれ、勝利あれ。

王　ヴェートラヴァティー、そちは途中で、ヴァスマティー女王に出遭わなんだか。

門衛女　王様、お見かけ申しあげました。私が、紙葉を手に持っておりますのをご覧じて、

お引き返し遊ばしました。

王　女王は、時と場合を心得ておるから、余の政務の邪魔はいたさぬ。

門衛女　王様、大臣より言上の次第は、財務多端のため、民事はただ一件のみ調査仕りました。書面に誌しおきましたれば、叡覧のほど願い奉ります、との由にございます。

王　紙葉を見せよ。

門衛女その通りにする

王　（読む）謹んで奏聞仕る。海上交易を渡世とせる一商人、ダナヴリッディと申す者、難船のため死亡せり。しこうして彼に遺児なく、その遺産は数千万金に達す。今や財産は挙げて国庫の有に帰す。以上叡聞に達したる上は、何分のご裁断伏して願上げ奉る。

王　（悲歎にくれて）子供のないのは　実に悲しむべきことじゃ。ヴェートラヴァティー、巨万の財を積んでおったと申せば、定めし多数の夫人をもっておったであろうな。されば　その妻妾の中、誰か一人、その商人の胤を宿しておる者はないか。調べて見よ。

門衛女　噂によりますれば、故人の妻で、サーケータ（今のアウド）に住む長者の娘にあたります者が、丁度ただ今、男子誕生を願う儀典（原名プンサヴァナ）を執り行ったとの由にございます。

王　その孕子が、父の遺産を相続する権利をもっている。行って大臣にこの旨を伝えよ。

門衛女　王様のご命令のままに。（と言って、立ち去る）

王　戻って参れ。

門衛女　（後戻りして）御前に。

王　しかし、相続者があるとか無いとか申すことを、何であげつろうに及ぼうぞ。

＊よこしまごとは　さておきて　いとし身内と　別れたる　わが国民を　いたわりて　われドゥフシャンタ　亡き人の　代りとならん　かく布れよ。　（二四）

＊注　夫を失った婦人の夫となることは、曲事として除く意味。

門衛女　その旨、布告いたさせます。（退場して、再び登場）王様、勅令は陛下の民草により、時を得た慈雨のように、歓び迎えられました。

王　（長い溜息をついて）ああ、このように相続者が断絶して、行き場のない財宝は、嫡流の家長が死亡した時、他人に渡る。余が死ねば、プル家の繁栄もまた、同じ有様に立ちいたるのじゃ。

門衛女　不吉なことの起りませぬように。

王　なさけなや、近づいた幸福を、われと自ら退けたとは。

ミシュラケーシー　かわいい姫だけを、お胸に秘めて王様は、ご自身を非難遊ばしているに違いないわ。

王　わが身に代る＊　子の胤を　宿らせつつも　われはまた　正しき妻を　捨ててけり、時
を違えず　種まきし　大地のごとく　豊かなる　みのりをあげて　わが家の　栄えのも
とと　なるべかりしに。　(二六)

＊注　父は子として生れかわるという考えが、一部に行われていた。

ミシュラケーシー　今としては、姫をお棄てになったことにはならないわ。

腰元　(門衛女にだけ聞えるように)ヴェートラヴァティーさま、大臣がこの紙葉をお送りし
たので、わが君は、二倍の悔恨に悩んでおられます。それゆえ、王様の悩みを柔らげる
すべを知っているマーダヴィヤさまを、凌雲閣から呼んでおいで遊ばせ。

門衛女　よいことにお気づきなされました。(と言って退場)

王　ああ、ドゥフシャンタのご先祖は、＊不安に陥られた。
かれ亡き後を　おもほえば　われらが家に　誰ありて　掟のままに　しつらえし　供物
ささげて　祭るらん。かくうらさびて　大御祖　子の幸たえし　わがそそぐ　水は飲め
ども　味かわる　光る涙の　滴のみ。　(二七)

＊注　祖霊祭を行う子孫が絶えた場合、先祖は地獄へ堕ちると信じられた。

ミシュラケーシー　燈火があるのに、あいにく覆いがかかっているので、この徳高き王様は、
くら闇にいらっしゃるつもりだわ。

腰元　わが君さま、ご悲歎におくれ遊ばしますな。王様はまだ盛りのお年頃、ほかのお后
方から、ふさわしい子宝をお生み遊ばして、ご先祖へのお務めを、お果しなさるでござ
いましょう。(独語)わが君は、わらわの言葉に、お耳をおかし遊ばさぬ。とはいえ、良
薬は病をなおすもの。

王　(憂悶のこなしで)とにもかくにも、
そも始めより　清らなる　世嗣の御子に　つながりし　プルの家筋　われ子なく　今ぞ
滅びん、神さびし　サラスヴァティーの　川の水　いやしき土地に　涸るるごと。　(二八)

と言って、気を失う

腰元　(驚いて)わが君さま、お気をたしかに、たしかにおもち遊ばしませ。

ミシュラケーシー　今すぐ王様を、喜ばせてあげようかしら。とはいえ、シャクンタラー姫
を慈んでいらっしゃる、神々の母君(アディティを指す)のお口から伺ったところでは、「神
様方は、ご祭典のお相伴がしたいので、王様が間もなくそなたを正室に迎えられるよう、
とり計ろうであろう」とのこと。それゆえ、ここでぐずぐずしていてはいけないわ。今
のうちにこのことを知らせて、かわいい姫を慰めてあげようわいな。

と言って、空中に昇り、退場

(楽屋の内で)おおい、人殺し、人殺し。

王　（平心をとり戻し、耳を傾けて）ああ、マーダヴィヤが助けを求める叫び声のように思われる。

腰元　わが君さま、絵姿を手に持ったマーダヴィヤさまが、おかわいそうに、ピンガリカーさん達に捕ったのでなければ、よろしゅうございますが。

王　チャトゥリカー、行け。余の言葉と申して、召使どもの取締の行届かぬ女王を、咎めて参れ。

腰元　王様のご命令のままに。（と言って、退場）

（楽屋の内で）　おおい、人殺し、人殺し。

王　間違いもなく、驚怖のため声音の変ったバラモンどのじゃ、誰かある、誰かある。

侍従　（登場して）王様、何ご用でございます。

王　何故あってマーダヴィヤめが、あのように叫んでおるのか、よく見て参れ。

侍従　早速見届けて参りまする。（と言って退場し、再び登場）

王　パールヴァターヤナ、何ぞいまわしいことが、起ったのではないか。

侍従　起りましてございます。

王　して、なぜそのように震えておるのじゃ。と申すのも、

老いの身の　震えはつねの　ことながら　今ことさらに　いちじるく　手足戦く、あれ

狂う　風のまにまに　菩提樹の　枝ゆるるごと。　（二九）

侍従　大王様、ご友人をお救い遊ばしませ。

王　何ものから救わねばならぬのじゃ。

侍従　大きな災難からでございます。

王　ああ、はっきりと申して見よ。

侍従　四方を見晴らす高楼、あの凌雲閣、

王　そこで何ごとが起ったのじゃ。

侍従　その高楼に　聳えたち　手飼の孔雀　時おりは　登りて憩う　塔の先　姿は見えぬ　物の怪に　君が友人　掠われつ。　（三〇）

王　（急いで立ちあがって）ああ、わが家もまた、魔性のものに襲われるのか。とはいえ、王者の位には、多くの面倒がつきまとうものじゃ。

日ごと日ごとに　おのが身の　怠りゆえの　あやまちを　なべて知るさえ　難かるに　わが国民が　おのがじし　いかなる道を　たどるかを　くまなく極む　すべぞなき。　（三一）

（楽屋の内で）　助けて、助けて、おおい。

王　（耳を傾け、よろめくこなし）友よ、恐れることはない、恐れることはない。

（楽屋の内で）　ああ、どうして恐れずにおられましょう。何ものか、拙者の頸根っ子を後ざ

まに引摑み、甘蔗のように、蝶番をへし折ろうといたします。

王　(見渡して)弓を、弓をもて、早く。

護衛女　(弓を手に持って登場)わが君さま、弓矢ならびに弓籠手はこれに。

王、弓と矢とを手に取る

(楽屋の内で)　なが喉の　新血吸わんと　むら肝の　なれが命を　奪わんず、虎のけもの
を　殺すごと。さなもがきそよ、詮なしや。憂きめに悩む　国民の　恐れを払い　除く
べく　弓執りもてる　ドゥフシャンタ　今ながための　救いとはなれ。　(三二)

王　(怒って)いかなこと、余にあてつけて、ほざきおるわい。ああ、極悪の吸血鬼、汝の命も早や束のまぞ。(弓を引き絞って)パールヴァターヤナ、きざはしの道へ案内いたせ。

侍従　王様、こちらへ、こちらへ。

一同急いで進む

王　(諸方をあまねく眺めて)おお、誰もおらぬわい。

(楽屋の内で)　助けてくれ、助けてくれ。拙者には王様が見えますのに、王様には拙者が見えませぬか。猫に捕った小鼠そのまま、命の助かる望みはありませぬ。

王　おお、遁身の術に傲る者よ、わが矢もまた、汝を見ぬと申すか。そこ動くな。わが友に寄り添うゆえに安全と、心ゆるすな。今や矢を番えるぞ。

このわが弓矢　誅戮に　あうべきなれを　射殺して　保護を受くべき　バラモンの　命
を守る。*かのハンサ　混れる水を　選り分ち　乳の汁のみ　吸うと知らずや。　(三三)

と言って、矢を番える

*注　ハンサという水鳥は、牛乳と水の混合物から、前者だけを分けて飲むと伝えられる。

その時、マータリ、ヴィドゥーシャカと共に登場

マータリ　陛下、
インドラ天の　定めにて　阿修羅の群ぞ　なれが的、されはその弓　性あしき　魔類に
向けて　引くべかり。心の友に　よき人の　送るは優に　なごやげる　なさけのまさし
おとろしき　鋭き矢には　あらじかし。　(三四)

王　(驚いて、矢を外しつつ)ああ、こはいかに、マータリ殿、神々の長〈インドラ〉の御者、ようこそご入来。

ヴィドゥーシャカ　おお、拙者は、この者のために、すんでのこと、けもののように殺されるところでございました。それなのに王様は、この者を歓んでお迎えなさるとは。

マータリ　(笑みを浮べて)陛下、何ゆえにインドラ天がそれがしを、陛下の許へ遣わされましたか、お聞きくだされい。

王　謹んで承る。

マータリ　カーラネーミ〈百頭百臂の悪魔〉の子で、ドゥルジャヤと申す悪魔の群がござる。

王　それについてはそれがしも、ナーラダ仙人から伺っておる。

マータリ　なれが友なる　インドラも　その魔の群を　夷ぐる　すべしなければ　なれを
こそ　戦の庭に　先駈くる　猛き勇士と　定めたれ。七馬の車　天がける　日の神すら
も　断ちがたき　かの烏羽玉の　夜の闇を　＊月の光ぞ　払うなる。　(三五)

陛下には、弓を執って、今直ちに神車に乗り、勝利の門出をなし給え。

＊注　王はプルの後裔で、月種の王統に属する。

王　インドラ天の示されたこのご好意、ありがたく存ずる。とはいえ、何ゆえあって貴殿は、マーダヴィヤに対し、あのように振舞われたのかな。

マータリ　それも申しあげねばならぬこと。なぜかは知りませねど、陛下には、ご心痛のため、勇気沮喪の態にお見受けいたした。そこで、陛下のご発憤を促すため、あのように振舞ったのでござる。何となれば、

かきおこす　薪に火の面　ほむらだち、いらだたされて　蛇もまた　頭ふくらす。大方
は　猛き力に　富む人も　励まされてぞ　勇みたつ。　(三六)

王　友よ、インドラ天の命令は、拒み難いものじゃ。されば罷れ。よく事情を説き聞かせた後、余の言葉と申して、ピシュナ大臣に伝えてくりゃれ。

ながこころ　ただひたすらに　国民の　守りに向けよ、弦はりし　わがこの弓は　今よ
その　務めのために　せわしくあれば。　(三七)

ヴィドゥーシャカ　王様の御意のままに。（と言って退場）

マータリ　陛下には、車にお乗りくだされい。

王その通りにする

一同退場

シャクンタラーとの別居と題する第六幕　終

第七幕　大団円

王、車に乗り、空中を飛行し、マータリと共に登場

王　マータリ殿、ご命令は果したとは申せ、インドラ天より格別の款待を受けては、身分不相応のように存ずる。

マータリ　陛下、双方にご不満があると思召せ。何となれば、

インドラ天の　もてなしを　眼におきて　比ぶれば　おのが果せし　つとめをも　軽きにすぐと　君おもい、神またおのが　もてなしを　君の勲に　たぐえては　ものの数とも　おぼされず。　(一)

王　さな言われそ。おいとまを得る際に、インドラ天の示し給うた款待は、げに余の望みを遥かに越えたものでござった。と申すのは、神々の面前で、インドラ天と半座を分って、余が着席いたした時、

あらわにそれと　言わねども　片方にありて　欲し顔の　まな子ジャヤンタ　うち見やり、笑みを含みて　インドラは　白檀かおる　胸元ゆ　時じくの花　マンダーラ*　編みし華鬘を　手にとりて　頭の上に　かざし給いつ。　(二)

*注　インドラの楽園にある五種の宝樹の一つ。

マータリ　陛下は、天帝〈インドラ〉よりのいかなる優遇に、ふさわぬことがありましょう。見よ、

悦楽めずる　インドラの　天つみ国は　いばらなす　魔性の群の　障りより　清められたり　二どまでも、今すくよかの　なが征矢に　昔ヴィシュヌが*　化生せし　ナラシンハの　利き爪に。　(三)

*注　ヴィシュヌ天が半人半獅子の姿に権化し、インドラの帝座を犯した悪魔ヒラニヤカシプを退治した神話。

王　それはインドラ天の大威力のいたすところ。見よ、

つかわれ人の　大いなる　勲をたつる　ことあるも　そはその主の　くもりなき　めがねの徳と　知るべかり。紅そむる　あけぼのも　いかでか黒き　夜の闇を　よく独りして　払わんや、百千の光　世を照らす　日の神もしも　み車の　轅の先に　繋がざりせば。　(四)

マータリ　そのお言葉は、陛下に似合わしゅうござる。(僅かに進んで)陛下、蒼空までとどくご自身の誉の輝きを、ここからご覧なされ。

天つ乙女の　色きそう　化粧の残り　とりどりの　絵具をとりて　神々は、如意宝樹の
葉の上に　ながいさおしを　かき詰す、聞くも妙なる　歌ことば　心をこめて　思いつ
つ。　(五)

王　マータリ殿、昨日余が昇って参った折は、阿修羅との決戦の熱意に燃えて、この場所が目につかなんだ。さればわれらは今、いかなる風*の通い路におるのであろうか。

*注　大地に接し、雲・電光等の去来する空間から始めて、空界・天界を七層の軌道に分ち、その各々に特定の風を想定した。

マータリ　これやこの　ヴィシュヌ*の二歩に　浄められ　塵もとどめず　名にしおう　プ**
ラヴァハ風の　通い道、み空を降る　ガンガー***の　流を担い　日の神の　光あまねく
輪をなして　照りそそがしむ。　(六)

*注　ヴィシュヌ天は三歩をもって、地界・空界・天界を跨いた。ここではその第二歩を指す。

**注　プラヴァハは、第二層即ち太陽の軌道を吹く風で、太陽の運行を可能にする。

***注　ガンガー河は源を天上に発し、地界に降り、更に地下界を貫流すると信じられた。

王　さればこそ、げに五感もろとも余の内心も静まる思いがいたす。（車輪を眺めて）思うに、われらは雲の通い路（第一層）に降りたのであろうがな。

マータリ　陛下、どうしてさようにご推察なされます。

王　山のほこらを　飛び出ずる　チャータカ*の群、いなずまの　光を浴びて　走る駒、こ
のさま見ては　水はらむ　雲の上ゆく　われなりと、雨のしずくに　うるおえる　なれ
が車の　輪に知らる。　(七)

*注　雨の雫だけを飲むと伝えられる鳥。

マータリ　正にその通り。それにまた、一瞬の後陛下は、自ら支配される国土に到着なさるでござろう。

王　（下方を眺めて）マータリ殿、迅速な降下のため、人界は珍しい光景を呈している。と申すのも、

浮きあがる　山の峰より　地は沈み　幹見えそめて　葉がくれし　木々の姿も　今しる
し、川の細すじ　水増して　さやにひろかに　流れゆく。誰か知らねど　見よここに
投げ挙ぐらしも　地は今し　わが傍らに　もたらさる。　(八)

マータリ　陛下、よくぞ見そなわされた。（敬意をこめ、うち眺めて）おお、ことの外なる大地の美しさ。

王　マータリ殿、東西の海に洗われ、夕暮の雲にも似て黄金の流をしたたらす、かしこに見える山は何でござるか。

マータリ　陛下、これこそはキンプルシャ*の山にて、ヘーマ・クータ（黄金の峰）と呼ばれ、

苦行者にとり最高の成満道場でござる。見よ、
梵天の孫、マリーチの子、天神・阿修羅の　師と呼ばる　かの造物主〈マーリーチャ即ちカシャパ〉かしこにて　妻〈アディティ〉もろともに　今もなお　苦行の道に　いそしめり。　(九)

＊注　財宝の神クベーラに仕える、人体馬頭の神話的存在。

王　〈恭しく〉さらばこの冥加をよそに過すことはかのうまい。聖者に敬意を表わした後、道を続けたいと存ずる。

マータリ　陛下、天晴れの思いつき。〈降下のこなし〉この通り降りたち申した。

王　〈驚いて〉マータリ殿、
車輪軋らず　沙塵挙がらず　地に触れざれば　ながら車　揺ることなく　降りたてど　それと覚えず。　(一〇)

マータリ　陛下の車とインドラ天の車との相違は、かくのごとくでござる。

王　マーリーチャ聖者の庵はいずくに。

マータリ　〈手をもって指し示しつつ〉見よ、
その身のなかば　蟻塚に　埋るにまかせ　聖紐に　代りて蛇の　皮をつけ　枯れてからまる　蔓草の　頸環はかたく　喉をしむ、編みし髻　肩先に　長くかかりて　鳥の巣に　満ちてはあれど　たじろがず、切株なして　日に向い　かしこ聖者の　立つところ。　(一一)

王　〈うち見やって〉重き苦行を修する聖者に敬礼あれ。

マータリ　〈馬車の手綱を引きしめて〉われらはここに、アディティ様に育てられたマンダーラ樹の生い繁る、造物主〈マーリーチャ〉の庵にはいり申した。

王　おお、こはげに天上より更に勝れた寂静の聖域。甘露の池にひたる心地がいたす。

マータリ　〈車を停めて〉陛下、お降りくだされよ。

王　〈降りるこなし〉そなたは今いかがいたされるぞ。

マータリ　車は正しく停ってござる。されば拙者も下車つかまつる。〈その通りにして〉陛下、成満位に達した尊い聖者たちの苦行林を、ここからご覧なされ。

王　二つながら〈聖者と苦行林〉を、感歎して拝見つかまつる。
如意樹の森に　風を吸い　命をつなぐ　そのならい、黄金の蓮の　花の粉　落ちて黄ばめる　水の中　浄き水浴の　すがすがし、三昧こらす　禅定も　玉の台の　床の上、天つ乙女の　そば近く　六根すべて　静まりつ。常の聖者が　苦行もて　到らまほしと願うちょう　境につどう　かしこなる　ひじりの群の　めでたさよ。　(一二)

マータリ　偉大な者の望みは、げに高く駈けるもの。〈あちこち歩いて、舞台に見えない者に向い〉ヴリッダシャーカリヤ、マーリーチャ聖者は何をしておられるぞ。〈耳を傾けて〉何と言わるる。貞女の務めにつき、ダークシャヤニー殿〈ダクシャの娘、即ちアディティ〉に問わ

れ、それを夫人に説き明かしておいでになるとな。ご面談には、よい時期を待たねばならぬ。（王を眺めて）陛下にはこのアショーカの木陰にお坐りなされ。その間に拙者は、インドラ天のご尊父（マーリーチャ）に、陛下のご来訪を告げて参る。

王　何卒よろしきように。

マータリ退場

王　（前兆を感じたこなし）切なる望み　かなえんと　願うわれにも　あらなくに　なぜいまさらに　わが腕よ　空しくなれの　ひきつるや。かつて拒みし　さいわいは　やがて歎きと　なるものを。　（一三）

（楽屋の内で）無分別なことをなさってはいけませぬ、いけませぬ。ほんにいつもいつも、そなたはもって生れた本性を出されます。

王　（耳を傾けて）ここは狼藉の行われる場所ではない。いったい誰が、あのように制止を受けるものやら。

（声をたよりに眺め、驚いて）ああ、あそこに、二人の苦行女に追いすがられて、子供とは思えぬ気性の少年が、

母の乳房を　飲みおえず　かきむしられて　たてがみも　おとろ乱れし　獅子の仔の
いとい退るも　聞かばこそ　手にて打ちつつ　引き来たる。　（一四）

その時、上記のような有様の少年、二人の苦行女と共に登場

少年　口をおあけ、仔獅子、口をおあけ、お前の歯を数えてあげよう。

第一の苦行女　いたずらっ子さん。われらの子と区別のない生きものを、なぜお苛めなされます。そなたの乱暴は、まるで喧嘩をしかけるようなもの。聖者方がそなたを、サルヴァダマナ（一切の調御者）とお名づけなされたのも、ほんに無理のないことでございます。

王　何ゆえあって余の心は、実子のような愛情を、この子供に覚えるのやら。（深く考えて）ああ、たしかに子のないことが、余に愛情を感じさせるのじゃ。

第二の苦行女　仔獅子を放してやらないと、親獅子がそなたに飛びかかって参ります。

少年　（笑みを浮べて）あれ、おおこわや。（と言って、下唇を噛む）

王　（驚いて）この幼な子は　大いなる　力をやどす　種ならめ、薪なき火の　燃えたたず
火花くすぶるさまに似て。　（一五）

第一の苦行女　よい子さん。この仔獅子をお放しなされ。そなたにはほかの玩具をあげましょう。

少年　どこにあるの。あたいにお呉れ。（と言って手を差し出す）

王　（手を見やって）いかなこと、この子が転輪聖王の手相を備えているとは。と申すのも、

望みの品の　ほしければ　つとさし伸べし　手の指の*　あわいの膜の　目にはしむ、蓮(はちす)の花の　花びらの　すきなきまでに　重なりて　茜色(あかねいろ)さす　あけぼのに　ただ先のみの分るるがごと。（一六）

＊注　指間に膜のあるのは、転輪聖王に備わる相好の一つ。

第二の苦行女　スヴラターさま、このお子は、言葉だけではなだめられませぬ。それゆえ行ってくださいませ。わたしの小屋に、聖者の子マンカナカさんの持っている、彩色した土の孔雀がございます。あれをこのお子に取って来ておあげなさいませ。

第一の苦行女　かしこまりました。（と言って退場）

少年　その間、これと遊んでいよう。

苦行女　（うち見やって、笑いつつ）放しておやりなされ。

王　このいたずら者に、心がひかれてならぬ。（溜息をついて）

皓歯(しらは)のつぼみ　そこはかと　こぼれほの見ゆ　わけもなき　笑みのまにまに、舌たらず語る言の葉、いとしさの　いや添い増して　膝の上　慕いてのぼる　めぐし子を　抱く親の身　幸あふる、外(と)のも遊びに　まみれてし　手足の塵に　汚されつつも。（一七）

苦行女　（指でおどしつつ）坊や、わたしの言うことを聞かないの。（傍らを眺めつつ）聖者のお子たちのどなたか、そこにおいでになりませんの。（王を見て）あなたさま、おいでくだ

さいませ。一旦握ったら中々放さぬこのお子に、困っております。仔獅子を自由にしてやってくださいませ。

王　かしこまった。（と言って近づき、笑みを浮べて）ああ、これ、大仙の子、

なれ何ゆえに　かくばかり　庵のならい　かきみだし、生あるものの　信頼を　喜びめずる　苦行びと　なが父親の　名を汚す。黒蛇の子　栴檀(せんだん)を　食らいあらすに　似たらずや。（一八）

苦行女　あなたさま、これは聖者のお子ではありませぬ。

王　姿にふさわしいその行いが、正しくそれを物語ってはいる。しかし、場所柄につまされて、つい判断を誤り申した。（望まれたことを実行しつつ、少年との接触を経験して、独語）

誰と知らねど　ある人の　家の若芽の　このみ子に　触れしわが身に　みなぎれる　この喜びの　大いさよ　このめぐし子を　生みいでし　めでたき人の　こころには　そもいかばかり　幸の多かる。（一九）

苦行女　（両人をうち見やって）不思議なこと、不思議なこと。

王　苦行女どの、何ごとでござる。

苦行者　あなたさまはご親類でもありませぬのに、このお子があなたさまによう似ておりますので、驚いておりまする。それにまた、ふだんは言うことをきかぬこのお子が、見

なれぬあなたさまに、少しも逆らおうといたしませぬ。

王　（少年をいとしみつつ）苦行女どの、もしこれが聖者の子でないならば、この子は何家の出身でござるかな。

苦行女　プル家の出身でございます。

王　（独語）何と、この子は余と同じ家柄の者じゃ。さればこそ苦行女が、あのように思ったのじゃ。（一般に聞えるように）これがプル族の家憲でござる。

まず始めには　人の世の　地を護るべく　大いなる　白亜まばゆき　玉敷の　宮居のうちに　安らけく　住むを願いて、終りには　隠者の誓い　おごそかに　木の根をおのが住家とはする。　（二〇）

苦行女　いかにも仰せの通り。しかしこのお子の母親は、アプラサスの縁につながるお方ゆえ、神々のお師匠様（マーリーチャ）の苦行林で、生み落したのでございます。

王　（独語）よし、これは余に安心を与える第二の点じゃ。（一般に聞えるように）してその女性は、何という王仙の后でござる。

苦行女　正当な夫人を棄てられたその人の名前を、誰が口にいたしましょう。

王　（独語）何と、このことはまた、そっくりそのまま余にあてはまる。さてここで、この

子の母親の名を、尋ねるといたしたら、いかがなもの。（深く考えて）いやいや、他人の妻にかかずろうのは、卑しむべきことじゃ。

苦行女　（土製の孔雀を手に持って登場して）サルヴァダマナさま、鳥の美しさ*をご覧なさい。

＊注　原語サウンタ・ラーヴァンナ。サウンタラーで切れば、サンスクリット語シャクンタラーに相当し、少年の母の名となる。

少年　（あちこち見廻して）あたいのお母さまが、どこにいらっしゃるの。

二人の苦行女笑う

第一の苦行女　名前が似ているので、お母さま好きなこのお子が、だまされました。

第二の苦行女　この孔雀の美しさをご覧なさいと、申したのですよ。

王　（独語）何と、この子の母親の名は、シャクンタラーとな。いやしかし、同じ名前はままあること。このよい始が、蜃気楼のごとく、結局失望に終ることのないように。

少年　乳母、このきれいな孔雀は、あたいの気に入った。（と言って、玩具を手にとる）

第一の苦行女　（うち見やり、驚いて）あれ、このお子の手頸に護符が見えませぬ。

王　苦行女どの、驚きめさるな。その子が獅子を引きむしっていた時落ちて、ここにござる。（と言って、取ろうとする）

二人の苦行女　いけませぬ、いけませぬ。（うち見やって）何と、取りあげてしまわれたわい

な。（両女驚いて両手を胸におき、互に顔を見合せる）

王　何ゆえご両女には、余をおとどめなされたのじゃ。

第一の苦行女　殿様、お聞き遊ばせ。これはアパラージタと申す大威力ある神霊草で、お誕生祝いの折、マーリーチャ聖者からこのお子に、授けられたものでございます。これが地上に落ちました際、両親とこの子自らとを除いて、ほかの者が手に取ることはありませぬ。

王　もし手に取るといたしたら、

第一の苦行女　その時、それは蛇となって、手に取った人を嚙みまする。

王　してご両女には、ほかの折にいつか、そのことをまのあたりご覧なされてか。

二人の苦行女　しばしば。

王　（喜んで）さらば今いかにして、自らの願望成就を、喜ばずにおられよう。（と言って、少年を抱擁する）

第二の苦行女　スヴラターさま、さあ、この出来事を、戒行に余念のないシャクンタラーさまにお知らせいたしましょう。（と言って、両女退場）

少年　あたいを放して。お母さまのおそばへ行きたい。

王　坊や、余と一緒に、母御を迎えるがよい。

少年　あたいのお父さまは、ドゥフシャンタさまで、そなたではない。

王　（笑みを浮べて）この抗議が、かえって余に確信をもたせるわい。

その時、シャクンタラー、*一個の髻に編んだ頭髪を戴いて登場

＊注　喪中あるいは夫の旅行中における婦人の風習。

シャクンタラー　（熟慮して）姿を変える時が来ても、サルヴァダマナの護符の薬草が、そのままになっていると聞いても、わらわは自らの運命に、何の望みも持たなんだ。とはいえ、ミシュラケーシーさまがわらわにお話しなされたところによれば、これもまたあり得ること。（と言って、歩き廻る）

王　（シャクンタラーを見、喜びと悲しみとをもって）ああ、ここにシャクンタラー姫が、

灰色ごろも　身にまとい　苦行のはての　面やつれ　黒きみぐしも　一束ね、むごくつれなき　わがために　長き別れの　戒律の　誓い清らに　とげたもう。　（二一）

シャクンタラー　（後悔に顔色の変った王を眺め、熟慮して）この方は、わが背の君ではありませぬ。そしたら、魔除けの護符を身につけた、わらわの子を抱きしめて、汚しているあの方はいったい誰なのかしら。

少年　（母親に近づいて）お母さま、ここにいる誰かよその人が、あたいを息子と呼んでいます。

王　姫、余がそなたに加えたむごい仕打ちも、仕合せな結末を見ることになり申した。さればいま余は、そなたに見識っていただきたいのじゃ。

シャクンタラー　（独語）わが心よ、しっかりなさい、しっかりなさい。前にはわらわに敵意を示した運命も、今は嫉妬をすてて、同情をよせている。これは正しく背の君さま。

王　あら嬉し　よみがえりてし　思出に　深き迷いの　雲はれし　わが目の前に　君は立つ、蝕去りはてて　ローヒニー（月の恋人とされる星宿）月のかたえに　より添いつ。（二二）

シャクンタラー　勝利あれ、勝利あれ。（と半ば言って、涙に喉が塞がってやめる）

王　姫、

勝利あれとの　寿詞は　涙にかすれ　口ごもれど　正しくわれは　勝ちてけり、面うるわしき　わぎもこよ、化粧あとなき　くちびるの　ほのかに赤き　色そいし　君がかんばせ　見てあれば。（二三）

少年　お母さま、これはどなたなの。

シャクンタラー　坊や、運命にお聞きなさい。（と言って泣く）

王　臈たき君よ　つれなかる　拒みにあいし　悲しみは　君が胸より　去れよかし。なじか知らねど　かの時は　心の迷い　つよかりき。あわれ人の子　烏羽玉の　暗き闇路に迷うとき　幸にあいても　おおかたは　かく振舞うぞ　ならいなる、盲し人は　玉かずら　頭にかかる　花環さえ　蛇と疑い　ふり棄つる。（二四）

と言って、足許に伏す

シャクンタラー　お立ち遊ばせ、お立ち遊ばせ、背の君さま。幸福を妨げるわらわの前世の業が、きっとあのころ実を結ぼうとしていたのでございます、いつもお情深い背の君が、あのようになされましたところから見ましても。

王立ちあがる

シャクンタラー　しかし、どうして背の君には、この憐れな者を思い出されましたか。

王　悲しみの矢が抜きとられた後に、語り申そう。

深き迷いに　つれなくも　かつてはそれと　見すごせし　涙のしずく　手弱女よ、なが唇を　なやまして　今また反も　美しき　睫毛のあいに　かかれるを　拭いおおせて悔いもなき　身とならましを　わぎもこよ。（二五）

と言って、言葉の通りに行う

シャクンタラー　（涙を拭われ、指環をうち見やって）背の君、これこそあの指環でございます。

王　たしかに。不思議に手にはいったこの指環のため、余の記憶が戻って来たのじゃ。

シャクンタラー　ほんにこの指環は、わらわがあのように背の君を、説きふせ得なんだ始終をしでかしたのでございます。

王　さればこそ蔓草は、春の季節とのめぐりあいを告げ知らす花を、身につけるがよい。

シャクンタラー　わらわはこの指環を信用いたしませぬ。背の君、これをお持ち遊ばせ。

マータリ　（登場して）お芽出度うござる。正当の奥方とめぐりあい、またわが子の顔を見られて、陛下には定めしご満悦。

王　友人のお計いにより、わが望みは甘美の実を結び申した。してこのことは、まだインドラ天にお知らせしないのでござろうか。

マータリ　（笑みを浮べて）大神たちに隠れたことがあり得ましょうか。おいでくだされ。マーリーチャ聖者が陛下との会見を望んでおられる。

王　わぎもこよ、息子につき添われるがよい。そなたを先だてて、聖者に拝謁いたそうと存ずる。

シャクンタラー　背の君ともども聖者のおそばに参るのは、恥かしゅうございます。

王　喜びごとの折には、これが習いじゃ。さればはやおいでなされ。（と言って、一同歩き廻る）

その時、マーリーチャ椅子に坐し、アディティと共に登場

マーリーチャ　（王を眺めて）ダークシャヤニー（アディティ）、

これぞこの、ながいとし子（インドラ）の　戦陣に　魁け進む　勇猛の　名もドゥフシャンタ　地界の王、その弓ゆえに　インドラの　ほさき鋭き　金剛杵　なすべきわざを
失いて　ただいたずらに　飾とはなる。（二六）

アディティ　この方の姿は、その威力を想わせるに足りまする。

マータリ　陛下、ここに天神の父母たるご両所が、息子に対する愛情を示すまなざしで、陛下を眺めておられる。されば近う進まれよ。

王　マータリ殿。

*十二の相を　現じつつ　輝きわたる　日の基――聖賢かくと　宣り給う――三界の主・神の長　かのインドラが　生みの親、梵天よりも　いや高き　ヴィシュヌの神も　人の世に　権化するべく　やどかりし　かの二柱――ダクシャの娘　マリーチの子――あやに畏き　梵天の　孫と聞えし　お方にや。（二七）

＊注　アディティの子、アーディトヤ十二神は、太陽の十二相と考えられた。

マータリ　しかと左様。

王　（平伏して）お二方に対し、インドラ天の従者ドゥフシャンタ敬礼し奉る。

マーリーチャ　吾子よ、長く地界を護れかし。

アディティ　いとし子よ、無敵の勇者たれ。

シャクンタラー、息子と共に足下に伏す

マーリーチャ　吾子よ、

なれが夫は　インドラに、なれがまな子は　ジャヤンタ〈インドラの息子〉に　勝り劣りもあらなくに、なれにふさわん　ほぎごとは　ただこれ一つ　末ながく　シャチー〈インドラの神妃〉のごとく　さきくあれ。　(二八)

アディティ　いとし子よ、夫に尊ばれる身になられませ。その子は長寿を得て、両親の家に栄えあらしめんことを。さあ、お坐りなされ。

一同坐る

マーリーチャ　めでたやな　操ただしき　シャクンタラー、このよき世嗣　またいまし、敬虔・財富　はた規律　うずの宝の　三つ揃い。　(二九)

王　聖者、先ず最初に願望の成就があり、後に尊顔を拝し奉る。げに聖者の恩恵は、未曾(みぞ)有(う)のものにございます。聖者、ご覧あれ。

まず花さきて　木の実なり　まず雲わきて　雨きたる、因果の掟　かくあるに　君をおろがむ　み恵みに　まず先がけて　おおけなく　わが祈事(ねぎごと)ぞ　かないける。　(三〇)

マータリ　万有の大御祖(おおみおや)の恵みは、このように行われるもの。

王　聖者、あなたさまに仕えるこの女性を、ガーンダルヴァ婚〈恋愛結婚〉に従って妻といたしながら、時経て縁者に伴われて参りました折、記憶の衰えのため否認つかまつり、聖者のご同族たるカンヴァ仙に対し、罪を犯す身となりました。しかる後、指環を見ましたことにより、かつてこの者を娶ったことを覚りました。これは拙者に不思議のように存ぜられます。

象(きさ)ありて　形まざまざ　まのあたり　よぎると見つつ　疑いて、ほど経しのちに　足跡を　見るや正しく　象なりと　うべなうごとく　かくやかく　心の乱れ　われに起りつ。　(三一)

マーリーチャ　吾子よ、罪を犯したと心配する要はない。ただ迷乱がそなたに起っただけじゃ。聞かれよ。

王　しかと承っております。

マーリーチャ　アプラサス・ティールタに降り立って、そなたの否認に心動乱したシャクンタラーを伴い、メーナカーがダークシャヤニーの許に近づいた時、われは瞑想の力により、この憐れな女性が、ドゥルヴァーサスの詛のゆえに、夫に否認されたことを覚った。そしてその詛は、そなたが指環を見た時、解けたのじゃ。

王　(安堵して、独語)余は非難からまぬかれた。

シャクンタラー　(独語)うれしや。背の君はご本心からわらわを拒まれたのではない。ほんにいま改めてわらわを思いだされたのでもない。しかしわらわはあの時、心がうつろ

であったため、その詛が耳にはいらなんだのだ。さればこそお友達が、背の君に指環をお見せするようにと、しつこくおっしゃったのだ。

マーリーチャ　吾子よ、そなたは全てのいきさつを知られた。それゆえそなたは今や、祭祀を共にする夫に対し、怒りをいだいてはならぬ。見よ、

詛のために　なれはしも　かつて夫に　拒まれつ、その時かれは　消えうせし　記憶のゆえに　荒かりき、今は迷いの　闇はれて　力はなれに　戻りきぬ。塵にけがれし　鏡には　ものの姿の　写らねど、拭い清めし　面には　たやすくさやに　影やどる。　(三二)

王　聖者の仰せられる通りでございます。

マーリーチャ　吾子よ、シャクンタラーの胎から生れ、そのためにわれらが、誕生祝いその他の儀式を掟のごとく執り行った息子を、そなたは喜んで迎えられたか。

王　聖者、その子にこそ、わが族の存続がかかっております。

マーリーチャ　然り。天稟の剛勇により、その子は転輪聖王となると知られよ。見よ、

行く手を阻む　障りなく　王駕の進み　安らけく　野越え山越え　海越えて、七つの洲*の　集りし　地の面　あまねく　統べ恵む、抗う仇の　影もなく。ここ仙郷の　森の中　有類調御の　雄力に　サルヴァダマナと　呼ばるれど　やがてかち得ん　バラダの名　人界保全**の　徳ゆえに。　(三三)

*注　スメール（須弥山）を中心に環状をなして、七洲・七海があり、人間の世界（ジャンブ・ドゥヴィーパ、閻浮提）はその中心をなすという世界観による。

**注　原語バラナ。バラタと同一語根から作られた語。

王　聖者自ら諸々の儀式を執り行わされましたその子に、拙者は全ての望みを嘱しております。

アディティ　この娘御の願望が成就いたしました上からは、カンヴァ仙にも委細を知らさねばなりませぬ。またメーナカーもわらわに仕えて、そば近くにおります。

シャクンタラー　（独語）わらわの望むことを、アディティさまが仰せになってくだされた。

マーリーチャ　苦行の功力により、この一切はカンヴァ仙に明白になっている。（深く考えて）とはいえ、娘御が息子もろとも夫君に迎え容れられた上は、この吉報をわれらよりカンヴァ仙の耳に入れねば相ならぬ。誰かある。誰かある。

門弟　（登場して）ご尊師、御前に。

マーリーチャ　ガーラヴァ、今ただちに天路を行き、わが言葉と申し、カンヴァ仙にこの吉報を伝えよ、シャクンタラーは子をもうけ、ドゥルヴァーサスの呪詛解けて記憶を回復いたしたドゥフシャンタにより、受容された趣を。

門弟　ご尊師のご命令のままに。（と言って退場）

マーリーチャ　(王に向って)吾子よ、そなたもまた、妻子を伴い、盟友インドラの車に乗り、そなたの都へ出発なされよ。

王　聖者のご命令のままに。

マーリーチャ　さて今は、

なが国民に　インドラは　豊けく降らせ　雨の幸、なれも祭の　幣帛に　満ち足らわせ
よ　インドラを。かくてぞ天と　人の世と　かたみに恵み　恵まれて　ほめ称えなん
いさおしに　神もいましも　千よろずの　年たちかえり　すごせかし。　(三四)

王　聖者、力の及ぶ限り善きことにいそしむ所存でございます。

マーリーチャ　吾子よ、この上さらに、いかなる喜びをそちにかなえてつかわそうぞ。

王　聖者、これに増した喜びが、なおほかにございましょうや。とは申せ、この一事のかないますように。

王のこころは　民草の　幸にひたすら　向けられよ、弁才の神　サラスヴァティー　学
ある者に　ほめられよ、また願わくは　わがために　輪廻の絆　断ちたまえ、あがめあ
まねく　あつまれる　自生・自在の　シヴァの大神。　(三五)

一同退場

第七幕　終

カーリダーサとその作品

一、作品

カーリダーサ(Kālidāsa)に帰せられる作品は、三十篇以上にのぼるが、真作として一般に認められるものは、次の六篇である。

イ、美文体叙事詩

1、クマーラ・サンバヴァ(Kumārasaṁbhava「クマーラの誕生」) 未完、八章(第九—一七章は後人の追補)。最高神シヴァとその神妃ウマー(ヒマーラヤの娘、パールヴァティーと同じ)との結婚および軍神クマーラ(別名スカンダ)の誕生を歌おうとしたものに相違ないが、真作の部分は後半を欠いている。

2、ラグ・ヴァンシャ(Raghuvaṁśa「ラグの系譜」) 一九章。ラーマを中心とするラグ族諸王の事績を歌ったもので、インドでは美文体叙事詩(mahākāvya)の模範として、「シャクンタラー」以上の名声を博している。ただし、最後の三章においては、運筆の妙ならびに内容の興味が著しく減退し、あたかも詩人の素描に過ぎぬかの感が深く、「クマーラ・サンバヴァ」と同じく、

これもまた、未完成のままに終ったものと認められる。

ロ、抒情詩

3、メーガ・ドゥータ(Meghadūta「雲の使者」)またはメーガ・サンデーシャ(Meghasaṁdeśa「雲の伝言」) 一一〇ないし一二〇詩節。財富の神クベーラに仕える一ヤクシャが、怠慢の罪で地上(現在のナーグプルに近いラーマ・ギリ)に流謫され、憂悶の情を空ゆく雲に託して、ヒマーラヤ山腹の神都アラカーに住む愛妻に伝えることを骨子とし、雲の行程の風物を描出したもの。

このほかに、インドの区分による六季節の情景を歌った抒情詩「リトゥ・サンハーラ」(Ṛtu-saṁhāra「季節集」木村秀雄氏訳、昭和二十二年)があるが、多くの専門家はこれを真作と認めず、あるいは詩人の初期の作と考えている。筆致が極めて平淡で、「メーガ・ドゥータ」に見る円熟を示さないのは事実であるが、必ずしも偽作として排除する必要はない。五世紀後半の碑文(Mandasor inscription, 473 A. D.)は、これを模倣したと思われる詩句を含んでいる。

ハ、戯曲

4、マーラヴィカー・アグニミトラ(Mālavikāgnimitra) 五幕。ヴィダルバ(現在のベラール)の王女マーラヴィカーが、数奇の運命を凌いで、ヴィディシャー(ビールサー)に都するアグニミトラ王(前二世紀シュンガ朝の王名に仮託)と結婚する経緯を描いたもの。

5、ヴィクラマ・ウルヴァシーヤ(Vikramorvaśīya「武勇によって得られたウルヴァシー」)

五幕。古来の神話に取材し、プルーラヴァス王と仙女ウルヴァシーとの神人恋愛を主題とし、聖域に足を踏み入れたために蔓草に化したウルヴァシーの姿を回復して、偕老の契を結ぶ経緯を描いたもの。南北二種の伝本があり、北伝本は第四幕にアパブランシャ語(中期インド語の最新層に属する語形)の抒情詩句を含み、その真正性が疑われている。

6、アビジュニャーナ・シャクンタラ(Abhijñānaśakuntala「思出の品により回復されたシャクンタラー」)あるいは単に「シャークンタラ」または「シャクンタラー」 七幕。第三節参照。

このほか未発見の作品に、「クンタレーシュヴァラ・ダウティヤ」または「クンテーシュヴァラ・ダウティヤ」(Kuntaleśvaradautya, Kunteśvaradautya「クンタ(ラ)王への遣使」)があり、ヴィクラマ・アーディティヤ王が、クンタラ王の許に詩人を大使として派遣したことを内容とするらしいが、戯曲か否かは明らかでなく、かつクンタラ王を史上のいかなる人物に比定すべきかが問題となっている。

なお諸種の名句集に採録されてカーリダーサに帰せられる、詩節の真偽を判断することは困難であり、短篇抒情詩「シュリンガーラ・ティラカ」(Śṛṅgāratilaka「恋愛のティラカ(インド人が額の上にえがく化粧のしるし)」)のごときは、それ自体として佳什たるを失わないが、「リトゥ・サンハーラ」程度の確実性さえもっていない。

カーリダーサの作品を一貫している特色としては、用語が比較的に平明で、修飾が過度の煩瑣に陥らず、難解な語句や韻律の変化を衒う弊風を示さないこと、人間関係および自然界の観察が繊細で、諧謔をも解していること、古来彼の特技として称えられる巧妙な比喩(upamā)に富むこと等が挙げられる。彼は正統ヒンドゥー教の規範・倫理をそのままに受容し、カースト制度、一生を四期に分つアーシュラマ制度、人生の目的を愛・財・法・解脱に要約するチャトゥル・ヴァルガ思想の枠の中で、理想的王侯、可憐な女性を描きだすことに成功している。近代の観点からすれば、ドグマと忍従の世界であり、泰平の世の詩的遊戯であり、深刻な心理の分析、悲劇に終る葛藤を欠き、社会制度に対する辛辣な批判も問題も提起していない。しかし彼はあくまでヒンドゥー教の社会に生きた詩人であり、インドの「詩論」・「演劇論」(附録参照)の課した窮屈な規範の下に筆を執ったことを忘れてはならない。彼に続いて爛熟期に入ったサンスクリット文学全般に比較して見れば、カーリダーサの作品は内容と修飾との均衡を著しく破らない中庸を得たものであり、しばしばわれわれの趣味にも合う場面を展開している。インドの理論家が絶讃を惜しまない彼以後の詩人、特にバーラヴィ(Bhāravi 六世紀)やマーガ(Māgha 七世紀末)の難渋な技巧に比べれば、カーリダーサの文体・修辞は、単純そのものと評しても過言でない。

二、年代

カーリダーサはインドの最も有名な詩人として知られているが、その年代を決定することはできない。信用するに足りぬ後世の伝説を除いては、詩人の生涯に関しても、何一つとして知られていない。従って詩人の年代および伝記は、間接の証拠を集めて推論するほかに道がない。

インドの伝承は古くから、詩人をヴィクラマ・アーディティヤ王の名と結びつけている。これを、古典インドの隆昌時代にウッジャイニー(現在のウッジャイン)に都し、ヴィクラマ・アーディティヤと号したグプタ朝の英主、チャンドラ・グプタ二世(下記参照)に擬して考えることが、詩人の年代を推定する上に、最も有力な手掛りを提供する。

グプタ朝は、西北インドを根拠としたクシャーナ朝が衰微した後、東インドのマウリヤ朝の故地から興り、その第三代の王と伝えられるチャンドラ・グプタ一世(三二〇—三三五年)の時から強大となり、その子サムドラ・グプタ(およそ三三五—三七五年)は、アショーカ王以来始めて見る大領土に君臨すると同時に、文芸を奨励し、自ら詩を作り、音楽に長じ、文人を愛護した。次のチャンドラ・グプタ二世(およそ三七五—四一四年)もこれに劣らぬ英君で、版図を更に拡大すると共に文芸の志が篤かった。その後を承けたクマーラ・グプタ(およそ四一四—四五五年)も、父祖の偉業を恥かしめなかったが、その治世の終りごろから、フーナ(エフタル族または白匈奴)が西インドの境辺を侵し、次のスカンダ・グプタ(およそ四五五—四八〇年)は、いったんこれを撃破したが、重ねての侵略(四六五ないし四七〇年)を支えることができず、グプタ大帝国はつい

に瓦解するに至り、後インド中部の一藩王ヤショーダルマンに駆逐されるまで(五二八年)、インド北部はフーナの蹂躙にまかされた。サムドラ・グプタからクマーラ・グプタまでは、グプタ朝の最盛期で、文学に芸術に、インドの古典期はこれから始まった。王室は正統のヒンドゥー教を奉じたが、仏教もまた栄えたことは、チャンドラ・グプタ二世の治下に入竺した法顕の、親しく目撃したところである。チャンドラ・グプタ二世とクマーラ・グプタとの治世は、古典サンスクリット文学の代表詩人、カーリダーサの活躍した舞台として最もふさわしく、これを支持する若干の傍証も存在する。

カーリダーサの作品に現われた天文学上の知識は、インドに伝わったギリシャ天文学の関係から考えて、三五〇年以前ではあり得ないと言われる。もしこれが確実ならば、詩人の年代の上限が与えられる。

彼の作品の一つ「メーガ・ドゥータ」は、ウッジャイニーの詳しい描写を含み、恐らく詩人の故郷であったかと想像されているが、ここはチャンドラ・グプタ二世の首都であり、その宮廷に仕えた詩人としては、極めて自然なことである。

「ラグ・ヴァンシャ」第四章に見えるディグ・ヴィジャヤ(「宇内統一」)の叙述は、サムドラ・グプタの大征服を記念したものとも考えられる。さらに想像を逞しゅうして、グプタ諸王との関係を、作品自身に求めるとすれば、次の諸点が指摘される。戯曲「ヴィクラマ・ウルヴァシーヤ」の題名が、ヴィクラマ・アーディティヤ(略してヴィクラマ)すなわちチャンドラ・グプタ二世の威武を暗示し、叙事詩「クマーラ・サンバヴァ」が、クマーラ・グプタの誕生に対する祝意をこめたと解することは、自分の仕える王室を讃美するインド詩人の慣習に照らして、あながち牽強附会の説とのみ言うことはできない。

未発見の作品名「クンタレーシュヴァラ・ダウティヤ」に見えるクンタラ王を、デカンの北部、ヴィダルバに栄えたヴァーカータカ朝(およそ三〇〇—五〇〇年)のある王に比定する説が、正しいとしても、詩人の生時を四ないし五世紀と考えることと衝突しない。

「ラグ・ヴァンシャ」の一節(四・六八)は、フーナの婦女が敗北に顔色を失うことを述べているが、スカンダ・グプタの時代まで降って、フーナによるガンダーラ占拠を考える必要はない。フーナは四三〇年ごろオクサス河を越えているから、これ以後その名を聞知していたことは想像に難くなく、むしろ初期におけるグプタ軍の戦勝を念頭に置いたものと思われる。

いずれにしても、詩人の名声が、七世紀の中葉に確立していたことは、一碑文(Aihoḷe inscription, 634 A. D.)の記載から明らかである。もし他の碑文(Mandasor inscr., 473 A. D.)の作者が、カーリダーサの詩句を模倣したことが事実ならば、年代の下限はさらに一層古くなる。要するにカーリダーサの年代は、四世紀の後半から五世紀の前半にわたるものと見るのが、最も妥当と信ずる。長い間多くの学者の論議を経た問題で、関係文献は多量にのぼり、容易に断定することは

できないが、上記の範囲を、さらに正確に縮小することは、現在の知識に照らして困難である。もちろん、「メーガ・ドゥータ」の一句(一四)を、仏教の大論師ディグ・ナーガ(陳那、六世紀始)に対する諷刺と解することが正しいとすれば、詩人の年代を約一世紀おくらせる必要を生じその支持者も絶えないが、可能性は極めて薄弱である。

カーリダーサの生涯については、その作品の内部から推測する以外に、信頼すべき資料がない。恐らくウッジャイニーに育ったバラモンで、当時詩文にたずさわる者に必要とされたあらゆる教養をつみ、かつヒンドゥー教的社会の制度・慣習に順応したことは、疑いをいれない。全作品に流れる明朗な落着き、人生に対する満足、円満な良識、王室の権威と豪華に対する讃美は、グプタ朝の盛時に、その王室の恩顧に浴した詩人の面影を偲ぶに足りる。彼の思想・信仰は、当時の教養あるバラモンに共通したものであったらしく、近代の学者に通俗ヴェーダーンタと呼ばれ、サーンキヤ・ヨーガ哲学の世界観に立ちつつ、根本原理を具現する最高神を認めるものである。カーリダーサという名前が、「カーリすなわちシヴァ天の神妃の下僕」を意味することから見ても、シヴァ天を最高神として信奉したものと考えられ、この点は彼の作品にも反映している。しかしヴィシュヌ天を最高神とする信仰に対しても、決して冷やかでなかったことは、やはり作品の内部から窺い知られる。

なおカーリダーサおよびその作品については、サンスクリット文学あるいは戯曲に関するどの本にも詳説されているし、専門的書籍・論文も非常に多いから、全般的概説として最も適当な一書を挙げるにとどめる。

A. Hillebrandt: Kalidasa, ein Versuch zu seiner literarischen Würdigung, Breslau 1921.

三、「シャクンタラー」について

「シャクンタラー」の伝本は、次の四種に大別される。

1、デーヴァ・ナーガリー本(中印本)　3と比べて短く、第一幕、殊に第三幕は簡潔であり、第六幕における侍従の占める役割は単純である。登場人物の名についても、3と異なる点があり、王の名をドゥシヤンタとしシャクンタラーの養父をカシヤパと呼び、その他重要でない人物の名の相違する場合も少なくない。

O. Boehtlingk: Kâlidâsa's Ring-Çakuntala, herausgeg., uebers., etc. Bonn 1842.――Monier Williams: Śakuntalā. Hertford 1853, 2nd ed. Oxford 1876.――C. Burkhard: Sakuntala annulo recognita, fabula scenica Câlidâsi. Vratislaviae 1872. 数多いインド版の中、P. N. Patankar (Poona 1889)のものは推称に値し、Rāghavadatta の注釈を含むものとしては、N. B. Godabole

and K. P. Parab (3rd ed. Bombay 1891), M. R. Kale (Bombay 1898) のものを挙げるにとどめる。(翻訳) Monier Williams: Śakoontalá or the lost ring. Hertford 1853, etc.——H. C. Kellner: Sakuntala. Leipzig (Reclam) 1890.

2、ドラヴィダ本(南印本)　長さにおいては、1とほぼ同じであるがやや短い。相違点も比較的に少なく、かつ重要ではない。

R. Pischel: Über eine südindische Recension des Çakuntalam, Göttingen 1873 参照。しばしばマドラースで出版されている。例えば T. Foulkes (Madras 1904) のもの。

3、ベンゴール本　1に比して著しく長く、詩節の数は、1の一九四(Böhtlingk)に対して、二二一に達する。後に述べるジョーンズの翻訳、シェズィの労作を通じ、最初に学界に紹介されたのは、この伝本である。

R. Pischel: Kâlidâsa's Çakuntalâ. Kiel 1877, 2nd ed. Harvard Oriental Series vol. 16. Cambridge (Mass.) 1922. (翻訳) L. Fritze: Sakuntala, Schloss-Chemnitz 1877.——A. Bergaigne et P. Lehugeur: Sacontala. Paris 1884.

4、カシュミール本　第三幕の途中までは1と同じ形で進行するが、それ以下は少なくも部分的に3より更に拡大され、第七幕の始めに「序」(praveśaka)を挿むのを特徴とし、他の伝本に欠けた若干の詩節を含んでいる。

K. Burkhard: Die Kaçmirer Çakuntalâ-Handschrift. Wien 1884.

なお上記の四伝本を対照して、本文を一冊に収めたものに、A. Scharpé: Kālidāsa-Lexicon, vol. I, part I: Abhijñānaśakuntalā. Brugge (België) 1954 がある。

1・2・3の伝本も決して統一的ではなく、いわゆる混淆本の体裁を示すことが多く、各伝本の純粋な姿を回復することさえ困難であり、まして四種の伝本を通して、本初の形を再現することは不可能に近い。また伝本相互の優劣に関しても活潑に論議された。ピシェルの終生変らなかった熱情にもかかわらず、ベンゴール本が最も原形に近いとは信じられず、追加・改竄の点から見れば、むしろデーヴァ・ナーガリー本の方が、原形に近いと言わざるを得ない (R. Pischel: De Kālidāsae Çākuntali recensionibus. Vratislaviae 1870, Die Rezensionen der Çakuntalâ. Breslau 1875 *versus* A. Weber Indische Studien 14, 1876, p. 35 sqq., p. 161-311)。しかし程度の差こそあれ、どの伝本も無批判な追補の手から免れたものはなく、また他面において、部分的には原形を忠実に保存しているとも考えられる。それゆえ、原形に近づこうとする限り、あらゆる伝本を公平に扱いつつ、折衷的に処理するほかに道がない。「シャクンタラー」原典批判におけるこの方向に、顕著な一歩を進めた功績は、C. Cappeller (Kālidāsa's Śakuntalā. Leipzig 1909, übers. 1922) に帰せられる。

「シャクンタラー」は、近代ヨーロッパに紹介されたサンスクリット作品の中、最初のものの

一つで、翻訳(W. Jones: Sacontala or the Fatal Ring, an Indian Drama by Calidas. Calcutta 1789, これからの独訳 G. Forster: Sakontala oder der entscheidende Ring. Mainz und Leipzig 1791, 同じく仏訳 A. Bruguière: Sacontala ou l'anneau fatal. Paris 1803)を通して、ドイツのヘルデル、ゲーテ等に歓迎され、殊にゲーテはファウストのプロローグにその影響の跡を残した。余りにしばしば引用されるのでここに原文を繰り返さないが、彼の有名な讃辞(「年の初めの春の花　豊けき秋のその木の実　心すずろに喜ばすもの　満ち足らわして育むもの　げに天も地も一言にこめて尽して言わまくば　われは宣りなんなれが名を　ああサコンタラ、残るものなし」)は、この劇の名を不朽ならしめた。しかし学術的研究の出発点となったのは、コレジュ・ドゥ・フランスの初代梵語学教授シェズィの労作であった(A. D. Chézy: La reconnaissance de Sacountala. Paris 1830, Notes et corrections supplémentaires. 1832. 翻訳だけの別刊 1832)。これ以後、ヨーロッパ及びインドの学者によって、出版・翻訳・研究が続々と世に問われ、近代インド訳はしばらくおき、今世紀の始めまでに十三種のヨーロッパ語に移植された(M. Schuyler: A bibliography of the Sanskrit drama. New York 1906, p. 50–54, M. B. Emeneau: A union list of printed Indic texts and translations. New Haven 1935, p. 145–149)。日本でも河口慧海師によって訳出された(大正十三年)。またヨーロッパの舞台に上演され、オペラやバレーにも仕組まれたが、その台本がよろしきを得なかった憾みがある。この意味で推称すべきは、一流の梵語学者フォ

ン・シュレーデルの筆によるものである(L. von Schroeder: Sakuntala romantisches Märchendrama in fünf Akten und einem Vorspiel frei nach Kalidasa für die deutsche Bühne bearbeitet. München 1903)。

「シャクンタラー」は、カーリダーサの戯曲中、最も有名なものであるばかりでなく、サンスクリット劇中の最大傑作と認められる。古来その第四幕の中、シャクンタラーが養父カンヴァ仙の庵に訣別を告げる場面が、特に絶讃を博している。超自然の要素、ヒンドゥー教的社会観に煩わされている点を除けば、筋の運びに照応が保たれ、苦行林の牧歌的生活、単純可憐の中に女性の誇りを失わぬシャクンタラーの態度、ドゥフシャンタ王の庭園におけるメロドラマ的雰囲気、王宮の生活、漁夫と巡査との応対等、古今内外の名声に背かぬものがある。もちろん筋の骨子は、詩人の独創ではなく、大叙事詩「マハーバーラタ」は、かなり詳しい「シャクンタラー物語」(プナー批判版一・六二―六九、流布本一・六八―七四)をもち、簡単な記述は、諸種のプラーナにも見えている(パドマ・プラーナは別として、やや連絡ある物語は、バーガヴァタ・プラーナ九・二〇・八―三二のみ)。ただし大叙事詩中の物語は、劇の筋に重要な役割を演じる「思出の指環」および「仙人の呪詛」の要素を欠いている。これに反し、「パドマ・プラーナ」(ベンゴール本三・一―五)は、この二要素を具備する詳細な物語を含み、カーリダーサの劇の典拠と認むべき可能性は、つとにヴィンテルニッツの指摘したところである。(Indian Antiquary 27, 1898,

p. 136, Geschichte der indischen Litteratur I, p. 454, n. 1, III, p. 215, n. 2)。この示唆に基づいてインドのハラダッタ・シャルマー教授は、「パドマ・プラーナ」の当該個所を出版し、詳細な検討を加え、「シャクンタラー」のみならず「ラグ・ヴァンシャ」の典拠をも、このプラーナに求めた(Haradatta Śarmā : Padmapurāṇa and Kālidāsa. Calcutta 1925)。これにより学界多年の懸案に、終止符が打たれたかのごとくであるが(Winternitz : History of Indian literature I, p. 540, n. 1, n. 2 参照)、その類似があまりに甚だしく、もしシャルマー教授の結論を肯定するとすれば、カーリダーサにおける第四幕以下の発展は、指環の授与、ドゥルヴァーサス仙の呪詛、漁夫の場面、マーリーチャ聖者の庵の場面等劇と大叙事詩の物語とを区別する諸点につき、ことごとく「パドマ・プラーナ」の順序に従い、登場人物の名称すらこれを踏襲し、詩人はただ、サンスクリット劇の要求するヴィドゥーシャカの役割を添加したに過ぎないこととなる。むしろ逆にプラーナ作者が、大叙事詩の物語を予想しつつ、カーリダーサの劇に基づいて改作したと見る方が、遙かに自然な解釈と思われる。もちろん指環を思出のしるしとするモチーフは、仏教の本生話第七(Kaṭṭhahāri Jātaka)に好例があり、インドの内外にも類例がある(Winternitz : Geschichte III, p. 215, n. 2, A. Gawroński : Notes sur les sources de quelques drames indiens. Krakow 1921, p. 39-42)。すべてを詩人の独創に帰する必要はなく、大叙事詩以外に、指環と呪詛との要素を含むシャクンタラー物語が、簡素な形で存在したことも不可能ではない。しかしその確証があるまでは、依然として大叙事詩以外に劇の典拠と断定し得る資料がなく、詩人の非凡な創造力に対する称讃は存続するものと信ずる。

附記　筆者は以上の見解を詳しく述べた一文を草したことがあり、その前半、「パドマ・プラーナ」の当該個所の和訳を含む部分は、雑誌『象徴』第四号、一九四八年三月(福村書店)に載せられたが、論証の部分を含む後半は、ついに活字にされずに終った。

サンスクリット劇入門

一、はしがき　戯曲(nāṭya)は、ギリシャ文学におけると同様、サンスクリット文学においても重要な位置を占めている。修辞学者ヴァーマナ(八―九世紀)は、戯曲をもって文学作品の中、最も勝れたものとし、彩色絢爛の絵画のごとく、他の文学作品の特徴を綜合すると言い、綜合芸術としての価値を認めている。インドでは非常に早くから理論の方面も発達し、現存する最古のサンスクリット劇(二世紀)さえ、その規定の拘束を受けていたことを示している。観客も一定の約束を心得ていなければ、観賞することができなかったに相違ない。従って現代の読者も、その輪郭を知っておく必要がある。

演劇論として最も古くかつ最も権威のあるのは、バラタ(Bharata)の名を冠するナーティヤ・シャーストラ(Nāṭyaśāstra)で、現存の形では、六世紀あるいは八世紀以前にさかのぼれないとしても、その原形は相当に古く、内容の主要部分は、カーリダーサにも知られていたと推定される。これに立脚した綱要書として広く利用され、影響の大きかったものに、ダナンジャヤ(Dhanaṃjaya 十世紀)のダシャ・ルーパ(Daśarūpa)があり、ついで詩論家も演劇に章節を割き、諸種の専

門的な著作も現われ、大量の文献が残っている。

しかし今は、その内容を組織的に論述するのではなく、始めてサンスクリット劇を読む人に、簡単な手引として、その理解に必要な程度の常識を略説するにとどめる。なお、詳しい知識を求める人のために、次の概説書および翻訳を挙げておく。

Sylvain Lévi : Le théâtre indien. Paris 1890.
Sten Konow : Das indische Drama. Berlin und Leipzig 1920.
A. B. Keith : The Sanskrit drama. Oxford 1924.
Manomohan Ghosh : The Nāṭyaśāstra. Calcutta, vol. 1, 1951.
G. C. O. Haas : The Daśarūpa. New York 1912.

二、劇　場　常設の建物としての劇場はなかった。宗教的祝祭あるいは王室の祝典に際して、宮殿の内か、社堂の境内で、上演されるのを常とした。理想的な劇場は、横三二ハスタ(四八フィート)縦六四ハスタ(九六フィート)の長方形の建物で、これを二分して、前半を観客席にあて、後半の前面を舞台(raṅga)とし、その後に楽屋(nepathya)を置き、これに二個の出入口をつける。舞台も観客に面する部分とその背後の舞台裏とに分けられ、幕(yavanikā)で仕切られる。従って

演劇は幕の前で行われることになる。また舞台の両側には、マッタ・ヴァーラニー(mattavāraṇī)と呼ぶベランダ様の部分が設けられたが、その用途は明確でない。俳優の登場に際しては、通常二人の美少女が、幕の切目を開いたのであるが、特に唐突な出現を示すためには、俳優自身が幕を排して登場する。楽屋は俳優の扮装・休憩にあてられるが、規定によって舞台に上演できない事件、例えば暴動のような事柄は、楽屋内の擬音によって暗示される。またしばしば「楽屋の内で」と指示され、舞台に現われない人物の声が利用された。舞台のみならず、劇場内は絵画・彫刻等で装飾され、幕の色は、劇の表わす情調(第七節参照)に従って異なるが、赤色はいかなる劇に使用しても差支ない。王侯の一族・大官は別として、観客席は見物の社会的階級に応じて、白・赤・黄・黒の柱によって区分され、座席は後方に至るに従って高くなる。

三、舞台装置・衣裳　舞台装置は非常に簡略で、背景書割もなく、大道具・小道具も発達していなかった。岩石・車・家屋・馬・象等は、竹を編んで作り、その上に皮または布をかぶせるに止まった。ただし多くの場合、これらのものさえ用いず、舞台上の規約、科白による示唆、特に身振によって了解させるに過ぎなかった。もちろん特別な仕掛を用いて、効果をあげる必要のある場合はこの限りでない。

俳優の扮装・衣服・装身具は、役割・階級・身分に応じ、または地方の特色に従って、それぞ

れ詳細に規定されている。身体の彩色も同様で、例えばバラモン・王族には褐色を、庶民・奴婢には暗黒色を用い、ドラヴィダ人等南方の住民は黒色に、シャカ族・ヤヴァナ族等西北部の住民は褐色に塗るなどである。

四、演技　広義の演技(abhinaya)の四支分としては、仕種・身振(āṅgika)、情緒(sāttvika)、科白(vācika)および扮装(āhārya)が挙げられるが、背景や道具立が発達せず、扮装も伝統に束縛されていたのに対し、仕種あるいは身振は巨細に研究され、異常な発達を示した。頭部・顔面・四肢・指の一挙一動の表わす意味は、精密に規定されている。舞台に河は見えずとも、裾を掲げることによって渡渉を示し、手綱を執る仕種は、馬車の存在を暗示し、花を摘む婦人、蜜蜂を追い払う乙女、すべて身振だけで十分に了解された。これにより舞台装置の不備は補われたとしても、他面において観客は、劇の規約に通じている必要があった。

科白は、どこの国の演劇にも見られるように、あるいは通常の会話として、あるいは独白・独語として、あるいは一定の人物だけに聞える傍白・私語として、あるいは舞台に現われない人物との会話として用いられる。身振とならんで、情調の表現に、科白廻しの重要であったことはもちろんであるが、台本そのものは詩人の領域に属し、文学一般に共通なものの外、劇作者に特別な技巧がいろいろと要求されている。

歌舞音楽は、当初から演劇と密接に関係し、バラタの「演劇論」は詳細な規定をふくんでいる。しかし現存のサンスクリット劇の舞台指図からは、その応用法を明確にすることが困難である。舞踏の様式としては、シヴァ天の創始した狂躁なターンダヴァ(tāṇḍava)と、その神妃パールヴァティーの寄与した妖艶なラースヤ(lāsya)とが、古くから挙げられ、音楽・唱歌・身振の要素が、重要な役割をもっていた。情調はおのおの特有のメロディーをもち、劇の主調に従って音楽・唱歌の種類も異なり、この点においてサンスクリット劇は、いちじるしくオペラあるいはバレーに接近していたと思われる。また身振の発達と規約とは、真の演劇に先行した身振狂言の名残りを留めているかと考えられる。

五、俳優　王侯・富豪の招きに応ずる職業的団体が、互に競争しつつ各地を巡業していたと思われるが、一座は男優(naṭa, bharata, etc.)と女優(naṭī)とからなり、配役は自然の性に従うのを通則としたが、男優が女に扮し、あるいは逆に女優が男に扮することも許された。座頭はスートラ・ダーラ(sūtradhāra)と呼ばれ、学術技芸に長じ、一座を統率し、これを養成・薫陶し、劇場の建設を司り(名称はこの職能に由来する)、興業の経営に当り、自ら劇の序幕に現われるばかりでなく、戯曲中の重要な役割を演ずるのを常とする。彼の下に助手があり、彼の妻も通常主要な女優として出演する。

俳優の社会的位置は非常に低いものとされ、「マヌの法典」はこれを闘技士等と同列に置いて、最も卑しい職業の中に入れ、その他の典籍も同様に俳優を、奴婢階級またはこれに準ずる混合カーストと目している。かつ彼らの素行はしばしば非難の的となり、非道徳な生活を営んだ者もあったらしい。しかしこのような評価は、一部の興行師及びその一座に対して当っていたとしても、王侯の庇護をうけ、バーナ(七世紀)バヴァブーティ(八世紀)のような詩人の友人であった俳優の識見・人格は、真の芸術家たるに恥じなかったに相違なく、この種の俳優の声望・地位が次第に向上したことも、想像に難くない。

六、観客　王侯貴紳の許で催された演劇に際しては、観衆の大部分も高い教養をもっていたと思われるが、理論上いかなる階級の者にも、観劇の権利は認められ、通俗な祭典における興行では、見物の素質も低下したに相違ない。しかしサンスクリット劇の性質上、観客は舞台の規約に通じ、相当の教養と高尚な趣味とを備えている必要があったと考えなければならない。バラタの「演劇論」によれば、理想的観客は、鋭敏な感覚と犀利な批評眼とをもち、舞台上の人物と喜憂を分たなければならない。上演中観客は、その感激を率直に表わし、滑稽には笑い、恐怖には身の毛をよだたせ、座席から立ちあがり、また声援・拍手を送るべきである。ただし観衆全部に理想的資格を期待することはできないから、真の批評はプラーシュニカ(prāśnika)すなわち劇通

に委ねられた。

七、ラサの理論　ラサ(rasa「味」)すなわち情調(Stimmung, sentiment)は、インドの詩論全般に対して、重要な意義をもつ観念の一つであるが、特に演劇にとっては、その理論の中核をなしている。ラサは、バーヴァ(bhāva「心的状態」)すなわち感情(Gefühl, emotion)、しかも持続性・主導性ある感情「スターイ・バーヴァ」(sthāyibhāva)を基礎とする。感情をスターイ・バーヴァに高めるためには、心的・外境的な諸要素に助長される必要があり、その結果は、汗・戦慄等の外面的徴候として現われる。劇の目的は、舞台の上の演技を通して、観客の心に印象として潜在するスターイ・バーヴァをめざまし、ラサを喚起するにある。ちょうど、甘いもの、塩からいものが、それぞれの味を起すのに似ているから「味」と呼ばれるのである、観客は舞台上の人物に同化することによって、それ相応のラサを体験することができるが、ラサはあくまで普遍的なものでなくてはならず、個々の観客または劇の主人公に限られた特殊のものであってはならない。また俳優は、観客にラサを感じさせれば足り、自身にこれを経験する必要はない。結局ラサは、文学作品から受ける快感を指すのであるが、演劇についても、インドの詩論が一般に認めるものと同様に、八種類が数えられる。そのそれぞれに、これと対応するバーヴァおよび色彩を添えて表示すれば、次の通りである。

情調	感情	色彩
一、恋情 (śṛṅgāra)	恋愛 (rati)	暗色
二、憤激 (raudra)	忿怒 (krodha)	赤
三、勇武 (vīra)	勇気 (utsāha)	褐
四、憎悪 (bībhatsa)	嫌悪 (jugupsā)	青
五、滑稽 (hāsya)	諧謔 (hāsa)	白
六、悲愴 (karuṇa)	悲哀 (śoka)	灰
七、奇異 (adbhuta)	驚歎 (vismaya)	黄
八、驚愕 (bhayānaka)	恐怖 (bhaya)	黒

この理論は、観劇の経験に照らし、たとい悲しい場面、恐ろしい情景が演出されても、劇であるがゆえに一種の快感を味わいうることを思えば、容易に理解される。インドの理論家は感情と情調との関係を心理的に説明しようと努力し、種々な学説を生んで、かえって難解な弊におちいった嫌いがある。またラサが喚起される最後の根拠を、潜在的印象に求めたから、これを欠く人は、文学作品あるいは演劇から快感を味得できないと言い、文法あるいは煩瑣な理論にのみ没頭する者は、この部類に属すると述べている。

一篇の戯曲の主調をなすラサには、統一性が要求され、他のラサは補助としてのみ使用されな

ければならない。例えば、「シャクンタラー」の主調をなすラサは「恋情」であり、バヴァブーティの「マハー・ヴィーラ・チャリタ」においては「勇武」であり、「ウッタラ・ラーマ・チャリタ」においては「悲愴」である。ただしサンスクリット劇の題材の性質上、主要な作品に用いられたラサは、ほとんど「恋情」と「勇武」とに限られている。

なおバラタの「演劇論」の説く、演技の四態(vṛtti)もラサと密接な関係をもち、「優雅」(kaiśiki)は「恋情」に、「荘重」(sāttvatī)は「勇武」に、「激越」(ārabhaṭī)は「憤激」「憎悪」「驚愕」に適合するとされ、最後に「弁舌」(bhāratī)は主として序幕に使用され、あらゆるラサに適する。

八、劇の構造　現存の戯曲について見るに、まず最初にナーンディー(nāndī)「祝禱」と呼ばれる祝福の詩節があり、これに引きつづいて、プラスターヴァナー(prastāvanā 'prologue')「序幕」が演じられる。序幕は、座頭と女優、あるいは他の俳優との会話の形式をとり、これから上演されようとしている戯曲の作者と題名とを告げ、その内容に触れ、観客の好意ある鑑賞を希望する。序幕にも種々の様式があり、巧妙に劇の本筋と接続させるためには、作者の工夫と技巧を必要とした。

しかし、この形式が確立する以前には、プールヴァ・ランガ(pūrvaraṅga 'preliminaries')「予備狂言」と呼ばれた部分が、本来の演劇に先だって長々と行われ、種々複雑な儀式・歌舞・音楽

を含んでいたことは、バラタの「演劇論」の教えるところである。従って芝居の当日は、前後長時間を要したらしく、日の出とともに始まったということも肯ける。少なくも現存の写本の示す限り、後には前置きが次第に簡略となったらしく、僅かに「祝禱」にその名残りを留めている。最初「序幕」は、座頭の名代スターパカ(sthāpaka)によって演じられたのであるが、「予備狂言」の簡素化の結果、座頭が「序幕」をも兼ね行うのを常とするに至ったのである。

戯曲は数個の幕(aṅka 'act')に分れ、その切目は、全俳優の退場によって示される。死・戦闘・殺害等、あるいは宗教儀式、家庭生活の雑事等は、舞台で上演することを許さなかった。また一幕の内容は一日以上にわたってはならなかった。それゆえ、上演できない事柄や長期間にわたる事件は、幕の始めに「序」(prelude)として暗示され、あらかじめ観客に了解させた。「序」にヴィシュカンバ(viṣkambha)とプラヴェーシャカ(praveśaka)との二種があり、最も重要な区別は、ヴィシュカンバのみが第一幕の冒頭すなわち「序幕」の直後に置かれ得る点であり、その他の区別は重要視されていない。例えば、「シャクンタラー」の第三幕および第四幕の「序」は、デーヴァ・ナーガリー本ではヴィシュカンバ、ベンゴール本ではプラヴェーシャカと呼ばれている。

幕の数に関して、理論的には劇の種類に従って、一定の制限が設けられている。しかし実際には必ずしも規則に従わない例がある。

劇の本筋が大団円となった後、主人公は登場人物の一人により、さらに望ましいことがあるか

と問われる。これに対し主人公は、この上さらに望ましいことがあり得ようかと答え、ただしこの事だけは望ましいと続け、吉祥祝福の詩節を吟誦する。これをバラタ・ヴァークヤ(bharata-vākya)「バラタ祝詞」と呼び、劇の創始者バラタの名を記念したもので、その由緒もすこぶる古い。(「シャクンタラー」第七幕第三五詩節はこれに当る。)

九、筋の仕組　サンスクリット劇の内容(vastu, itivṛtta)は、古来の説話に基づくか、詩人の創作によるか、あるいは両者の混淆による。筋の運びは、一般に発端・葛藤・大団円の経路をたどるのであるが、インドの理論家は、主人公が目的を遂げる段階を主眼として、劇の筋を次の五つの「状態」(avasthā)に分けている。

一、発端(ārambha 目的達成の欲求を起す段階)、二、そのための努力(prayatna)、三、成功への希望(prāptyāśā)、四、頓挫(niyatāpti 特別の障礙さえ除かれれば成功する確信をもつ段階)、五、目的成就(phalayoga)。

これとは別に理論家は、劇の「要素」(arthaprakṛti)として、次の五種を挙げている。一、「種子」(bīja 筋の端緒)、二、「点滴」(bindu 油の雫が水面に拡がるように、停頓したかに見える筋を進展させる要素)、三、「挿話」(patākā「旗」主筋に関係のある長い挿話)、四、附随事件(prakarī 主筋に関係のない挿話または短い挿話)、五、最終の目的(kārya)。

前記の五つの状態すなわち「五段階」と並行して、劇の進行は、次の五つの「連結」(saṁdhi)に分けられる。一、発端(mukha)、二、進展(pratimukha)、三、発展(garbha「胎」)、四、停滞(vimarśa「熟慮」)、五、大団円(nirvahaṇa)。「シャクンタラー」に例をとれば、一は第一幕と第二幕将軍退場まで、二は王がシャクンタラーに対する恋愛をヴィドゥーシャカにうちあける場面から第三幕終りまで、三は第四幕と第五幕ガウタミーが姫の覆面を除く場面まで、四は第五幕の残りと第六幕、五は第七幕に相当する。

「五段階」と「五要素」とは、元来別の観点に立つ分類と思われるが、インドの理論家は、両者を互いに照応するものとし、「連結」をこの両者の結合と解して説明するため、かえって明確を欠く理論となった。さらに六十四種の「肢分」(aṅga)を各「連結」に配当したため、複雑で実際に適応しない規定を生んだ。「肢分」をもたない劇は、手足のない人間に喩えられ、筋が貧弱な戯曲でも、適切な「肢分」の使用によって美しくなると言われているが、主として修辞その他の技巧的要素の列挙に過ぎない。なお筋の進行を助け、興味を添えるためには、夢・手紙・伝言・肖像・変装等を利用し、空中または楽屋からの声を借り、時には劇中劇(garbhāṅka)を挟むことがある。

サンスクリット劇は、例外なくハッピー・エンドをもっている。進行の途中では、しばしば悲劇的場面を演出するが、最後は必ず主人公の目的達成に終り、そのためには作者も、古来の説話

に改変を加えなければならなかった。それゆえ真の悲劇は存在しない。バーサに帰せられる「ウール・バンガ」は大叙事詩マハーバーラタの英雄ドゥルヨーダナの最後を描いたもので、一見悲劇のような結末を示すが、ドゥルヨーダナはむしろ満足してこの世を去り、天国に赴くのであるから、インド人の見地からはこれもまた、一種のハッピー・エンドたるを失わない。もちろんこれは、古典期の劇に見られない例外に属する。すでに述べたように、サンスクリット劇の主要な「情調」は「恋情」または「勇武」であるから、代表的戯曲は概して「恋愛コメディー」あるいは「英雄コメディー」の部類に属している。

一〇、登場人物　登場する人物(pātra)の数には制限がなく、比較的多数の者が登場する場合が多く、「シャクンタラー」では三十名以上に達している。役割の重要性や使用する言語等に従って、上級・中級・下級に分類され、性別によっては、男性・女性・中性(napuṁsaka)に分類される。中性人物には、学識あるバラモン、侍従、宦官が含まれる。劇の中心をなすものは、主人公(nāyaka)、敵役(pratināyaka)、女主人公(nāyikā)で、主人公および女主人公は、その特質に従って細かく規定され、複雑に分類される。ともに理想化された美質を具備するように要求されている。また教養の深い、趣味の高尚な高級娼婦(gaṇikā)が、重要な役割を演じることのあるのは、注目に値する。

そのほか一定の型にはまった数種の役が発達し、その呼び方または使用語についても、詳細な規定がある。その中で最も重要なのは、ヴィドゥーシャカ(vidūṣaka)と呼ばれる、風采・言動ともに滑稽な道化役である。バラモンでありながら、サンスクリット語を用いず、学識がないのにこれを衒い、怠惰・臆病でしかも虚勢をはり、食慾・物慾ともに頗る旺盛である。しかし主人公の忠実な伴侶として常に随行し、王に「友よ」と呼びかけられ、あらゆる私事に関して相談にあずかる。二大叙事詩以外から題材をとった戯曲には、ほとんど例外なく現われ、サンスクリット劇に諧謔をただよわせ、通俗の味を添えている。このほか、王の信頼を受ける食客で、音楽に長じ、情事の表裏に精しい通人の役ヴィタ(viṭa)、王の愛妾の兄弟で、素性は卑しく、怒り易くまた宥め易く、外観を飾り、高慢無学で大言壮語し、サをシャと発音するのを特徴とする役シャカーラ(śakāra)があるが、「ムリッチャカティカー」の作者の霊筆に活かされた以後、主要な古典期の劇にはほとんど現われない。

サンスクリット劇には、王宮ことに後宮(antaḥpura 'harem')の生活が、重きをなす場合が少なくない。「シャクンタラー」においても、将軍(senāpati)、侍従(kañcukin)、王室附き祭官(purohita)、門衛女(pratihārī)、数名の腰元(ceṭī)等が用いられているが、弓を手にして王の身辺を守る護衛女ヤヴァニー(yavanī)は注目に値する。ヤヴァニーとは元来ギリシャ婦人の意味で、ギリシャ婦人が多数インドへ輸入されたことは、文献の示すところであり、それが王宮に仕えたこ

とも想像に難くないが、いわゆるヤヴァニーは劇文学以外にほとんど全く用例がなく、どの程度まで王宮生活の実際を反映しているかは明瞭でない。

一一、用　語　サンスクリット劇は韻文と散文とを交え、散文は通則として非常に簡素で、日常の会話を思わせるのに反し、韻文は修辞・韻律の点で完全に美文体(kāvya)の条件を具えている。観客の教養、美文体に対する一般の嗜好、詩人の創作態度等、インドの特殊事情を考慮にいれなくては、その劇中における存在理由を了解するに苦しむほどである。詩節の内容は概して描写的または抒情的で、特定の場合には旋律に合せて歌われた。同一戯曲の中にサンスクリット(古典語)と数種のプラークリット(中期インド)語とを混用することも、サンスクリット劇の一特徴で、両者の中、いずれか一つだけで書かれた戯曲は例外に属する。

サンスクリットは、バラモン・王・学者・大臣・将軍等、高級の男性に属し、女性の中でも第一女王(mahādevī)・大臣の娘・尼僧・高級娼婦等が、これを使用することもある。これに対しプラークリットは、婦人・小児・位置の低い男子(ヴィドゥーシャカを含む)の用語とされる。プラークリットは、使用者の種類・地位によって多数の種類に分れ、歴史的にも変遷があった。インドの理論家の規定は複雑であるが、実例に徴して最も重要なのは、シャウラセーニー(Saurasenī)、マーハーラーシュトリー(Māhārāṣṭrī)およびマーガディー(Māgadhī)の三種である。い

ずれも地名から取った名で、ことに第一のものは、演劇の発祥地との関係を思わせる。一般に会話は、サンスクリットとシャウラセーニーとで進められ、後者を語る人物が韻文に頼る場合にはマーハーラーシュトリーを使用する。このプラークリットは、バーサおよびそれ以前の戯曲断片に実用例がなく、バラタの「演劇論」もその名を挙げていない。マーハーラーシュトリーは母音に富んで流麗であるため、早くから抒情詩に利用された。恐らく歌謡に適するものとして、劇中に採用されるに至ったのであろう。これに対しマーガディーは、極めて位置の低い男子に割り当てられ、「シャクンタラー」の第六幕の「序」において、漁夫と巡査(rakṣin)との会話に用いられている。この場面で警視総監(nāgaraka)は、もちろんシャウラセーニーで話している。以上の規定からも明らかであるように、サンスクリット劇は、ラテン語の劇の中にイタリー語とフランス語の部分をさしはさみ、地方訛の方言まで混入していることとなる。この言語の状態と沿革とを、いかに説明するかは困難な問題である。古典期の劇が発達した時代に、サンスクリットはもはや一般庶民の会話語ではなく、劇用プラークリットもカーリダーサ以前に、一種の文学語として固定し、日常の口語から隔絶したに相違ない。古典期の劇は、サンスクリットがまだ実用性を失わなかった上層社会と、もっぱら中期インド語形を使用した庶民層との言語分布の状態を、ある程度まで模倣したものとしても、決してその情況を忠実に反映するとは考えられない。サンスクリット劇は主としてバラモンの手で完成された上流文学で、その作家にリアリズムを求めるこ

とは許されない。

一二、戯曲の種類　インドの理論家は正劇(rūpaka)十種、副劇(uparūpaka)十八種(この数は必ずしも一定しない)を列挙し、その各々について詳しい定義を与えている。しかし古典期の代表作について言えば、次の三種が重要である。

ナータカ(nāṭaka)は戯曲の基本的形式で、カーリダーサの諸作はこれに属し、その他にも傑作が多い。内容は古来の説話から取られ、「五連結」(第九節参照)を完備し、主要情調(第七節参照)は「勇武」あるいは「恋情」と規定され、大団円においては「奇異」を適当とする。主人公も古来の説話からよく知られた者で、王、王仙(rājarṣi 王族から出た聖賢、例えば「シャクンタラー」のドゥフシャンタ王)または神(人間の形で舞台に出ることができる)とする。幕数は五ないし十とされているが、実際は必ずしも厳守されない。題名は主人公にちなむか、あるいは内容を示すものとし、主な登場人物の数は四、五名を適度とする。

次にプラカラナ(prakaraṇa)も古くから知られた代表的形式で、内容は作者の創作にかかり、「五連結」を具備し、主要情調は、ナータカの場合と同様であると言われるが、ある理論家は「恋情」と規定している。筋はバラモン・商人・大臣等が艱難を克服して、正義・財富・恋愛の目的を達成する経緯を描き、女主人公は良家の婦人または高級娼婦、あるいは両者とする。幕数

は五ないし十、題名は主人公と女主人公との名を含むものとされるが、これらの点は、必ずしも実際と符合しない。最もよく知られた実例としては、「ムリッチャカティカー」、バヴァブーティの「マーラティー・マーダヴァ」等がある。

副劇に属するナーティカー(nāṭikā)は、すでに挙げた両代表型の折衷に過ぎない。内容は古来の伝承に基づくか、あるいは作者の創作であるが、後には創作に限られた。「五連結」の中、「停滞」は著しくなく、主要情調は「恋情」とされている。主人公は伝承によって知られた王で、ある事情のため後宮にはいった王女との恋愛を描き、女王の嫉妬に妨げられつつも、ついにその承諾を得て幸福な決着を見る。幕数は四、あるいは四ないし一と規定されている。ハルシャの「ラトナーヴァリー」はこの型に属する一傑作と認められる。

以上の三種を比較しても、主人公や筋についての制限を除いては、根本的な区別は発見されない。その他の正劇または副劇の大部分に関しては、ここに取りたてて述べる必要を認めない。ただし、正劇の中に数えられ、由緒も古く、通俗劇の香り豊かなものとして、プラハサナ(prahasana)とバーナ(bhāṇa)とは特筆に値する。プラハサナは一種の茶番で、原則として一幕からなり、主要情調は「滑稽」と規定され、社会的あるいは宗教的な諷刺・揶揄に満ちている。現在する多数の作品は、十二世紀以前にさかのぼり得ないが、その先駆と見なされるものには、七世紀に属する喜劇が残っている。独白喜劇バーナも同様に多数の作品によって知られる一幕物で、最古の

ものは六、七世紀にさかのぼる。通常は、放縦な通人ヴィタ(第一〇節参照)が、舞台外の人物を相手に、身振り手振りおかしく物語るもので、その通俗起原を明示している。理論的には、この独演により、「勇武」あるいは「恋情」の情調を喚起するという。

一三、ギリシャ劇との関係　アレクサンダー王のインド遠征(前三二六―五年)は、インド文化に直接の影響を与えなかったとしても、前二〇〇年ごろから西北インドは、ギリシャ系諸王に支配された。その後シャカ族等の侵入、クシャーナ朝の興起(一世紀)によって、その政治的勢力は一掃されたが、文化的影響はその後も長く続いた。従って、インドの学術・美術・文芸に、ギリシャ文化の影響があっても怪しむに足りない。彫刻・医学・天文・数学・哲学等における両文化の交渉は、すでにしばしば議論されているが、演劇についても、ギリシャ文学の影響を認めようとした学者がある。

　この学説はまずドイツのウェーベル(A. Weber)によって提唱され(1879)、ついでヴィンディシュ(E. Windisch)は綿密な比較研究に立脚してこれを主張した(1882)。彼は特にメナンドロス(前三世紀)に代表されるいわゆる新アティック・コメディーに着目し、その影響を受けたプラウトゥス(およそ前二〇〇年)およびテレンティウス(前二世紀)の戯曲と比較し、サンスクリット劇(特に「ムリッチャカティカー」)の中に類似点を指摘し、ギリシャ劇の影響を認めようとした。

他の権威あるインド学者は、時を移さずこれに反対したが、組織的反駁は、有名な「インド演劇」の著者シルヴァン・レヴィによって行われた(1890)。その後身振狂言を徹底的に研究した古典学者ライヒ(H. Reich)は、インド劇の起原をこれに求めたが(1903)、サンスクリット学者を承服させる論拠に乏しい(特にA. Gawroński : Les origines du théâtre indien et la question de l'influence grecque. Krakow 1946 参照)。

　新アティック・コメディーとサンスクリット劇のあるものとの間に、類似点のあることは否定できないとしても、その類似を精密に検討する時は、劇文学の一般的性質によって説明されるか、あるいは類似の半面に、より多くの相違を示す種類のもので、先入見のない者に、ギリシャ劇の影響を認めさせるほどの説得力をもたない。インドにおいても独立に戯曲の発達する要素が、多分に存在したことの明瞭である限り、かつ二世紀にはほぼ古典期の約束に従う仏教劇の存在した確証がある以上、上説の学説はその必然性を失う。現今のインド学界は一般にこれを拒否しているから、ここにはただ次の諸点に触れるにとどめる。

　舞台の背面が幕によって限られることは既に述べた(第二節参照)。この幕は種々の名で呼ばれるが、その一名をヤヴァニカー(yavanikā)という。ヤヴァナ(Yavana)はギリシャ人を意味するから、これに由来する幕の名称は、ギリシャ劇の影響を主張する論者に、一つの支持を提供する。もちろんヤヴァナという語は、元来イオニア人(Iavones)を意味するが、やがてアジアにおける

ギリシャ人の総称となり、本来のギリシャ人ばかりでなく、ギリシャ的あるいはギリシャ化した西方民族をも含み、その範囲はバクトリア、シリア、エジプトにまで及んでいた。従ってヤヴァニカーも、西方(例えばペルシャ)から輸入した布で作った幕を指し、劇場の幕に限定して考える必要はない。

一幕の内容が一日以上にわたってはならぬという規定は(第八節参照)、しばしばアリストテレースの有名な理論と比較される。筋の統一性が演劇に要求されることは、劇文学の性質上当然であるが、場所の統一性は全く無視され、時の統一性もまた、アリストテレースの意味においては認められていない。数幕からなるサンスクリット劇の内容が、数日・数月あるいは数年にわたることは、決して珍しくない。カーリダーサの作品について見ても、「マーラヴィカー・アグニミトラ」は約一週間の事件を含むに過ぎないが、「シャクンタラー」は五年ないし六年の歳月を予想させ、「ヴィクラマ・ウルヴァシーヤ」に至っては、第三幕と第四幕との間に、少なくも十二年の経過を必要としている。

サンスクリット劇は、しばしば「恋愛コメディー」の観を呈し(第九節参照)、時に新アティック・コメディーに類似するが、恋愛劇におけるある程度の類似は、特に他国の文学の影響によって説明される必要がない。そのほか仮装の発覚、指環などによる認知等は、既に古代インドの叙事詩の中に先例が見いだされ、インドの劇作家が独立に利用し得た技巧に過ぎず、ここにも外国

の影響を確認することはできない。

登場人物の中、特にグレコ・ロマン劇に類型があると主張されたのは、ヴィドゥーシャカ、ヴィタおよびシャカーラ(第一〇節参照)である。しかし「ムリッチャカティカー」の場合を除き、長く古典期のサンスクリット劇に活躍するのは、ヴィドゥーシャカだけであり、指摘された類似点も、決定的なものではない。いずれもインドの通俗劇の舞台から、高尚な戯曲形式の中に移されたものと見る方が自然である。

一四、サンスクリット劇の起原　インドの伝承に従えば、演劇の起原は神聖である。「黄金時代」にはこのような娯楽の必要はなかったが、次の「白銀時代」に、神々等の懇請に応じて梵天が、バラモン教の根本聖典四ヴェーダの粋を集め、古い説話(itihasa)をも添えて、第五ヴェーダ、しかもあらゆる階級に開放された「演劇ヴェーダ」(Natyaveda)を作り、聖仙バラタに命じて上演させ、さらに人間の世界に弘めさせたという。四ヴェーダから取った要素は、それぞれ暗誦、唱歌、仕種、情調で、劇場の形態は工巧神ヴィシュヴァ・カルマンの考案により、勇壮なターンダヴァ舞踏、優艶なラースヤ舞踏(第四節参照)は、シヴァ天およびその神妃の寄与したところであり、劇の「四態」(第七節参照)は、ヴィシュヌ天の創出に帰せられる。天上における最初の上演は、インドラ天の「旗の祭」に行われ、後に「インドラの旗」(indradhvaja)は演劇守護の象徴と

なった。最初に悪魔の敗北を上演した時、魔類は憤慨して妨害を企てたが、インドラ天の旗に打たれて屈服し、後には善悪ともに三界の有様を演出することとして、魔類を納得させたという。最古の演出者バラタの名によって伝わる「演劇論」(第一節参照)が提供するこの神話的物語は、一片の史実性をも示さない。ただその中に、暗誦と身振、唱歌と舞踏、宗教祭典との関係、大叙事詩との関係など、劇の起源を考えるのに重要な示唆を含んでいることは注目に値する。他面において、サンスクリット劇の最古の実例(二世紀、第一五節参照)は、大体において古典期の作品の様式を具え、その背後に相当期間の歴史を予想させている。従ってサンスクリット劇の起原を推定するためには、西紀前に属する資料を、インド自体の文献の中に求めなくてはならない。

インド最古の文献リグ・ヴェーダは、対話体の讃歌十数篇を含み、ここに戯曲の発端を認めようとする学者もある。しかしその上演については何の証拠もなく、祭式におけるその本来の用途も明らかでない。会話を加味した讃歌の一形式、すなわち一種のバラッド体が発達したに過ぎないとする説も否定できない。もちろん歌舞音楽は最古の時代から愛好され、新しいヴェーダ文献の中には、歌舞を職業とする者をシャイルーシャ(śailūṣa)と呼んだ例もあるが、後世最も普通に俳優を意味するナタ(naṭa)という語は、まだ用いられていない。

このナタばかりでなくナーティヤ(nāṭya)「演劇」、ナータカ(nāṭaka 代表的劇形式、第一二節参照)など、戯曲に関する中心的概念は、「舞踏」を意味する語根ナット(naṭ＜nṛt, nṛtya「身振」、

nṛtta「舞踏」等参照)から作られ、元来舞踏・身振狂言について用いられたものと考えられる。それゆえ、これらの単語を含む文献の年代から、直ちに演劇の成立年代を推定することは早計である。例えば、およそ前五世紀に属するパーニニの文典は、ナタ・スートラ(naṭasūtra)という語を含んでいるが、恐らく舞踏家あるいは身振狂言師の綱要書を意味し、必ずしも真の演劇の存在を予定しない。前二世紀の中葉に出たと推定される文典家パタンジャリは、しばしばナタについて述べ、ナタは暗誦および唱歌を業とし、その素行が芳しくなく、社会的地位が低く、男で女に扮する者をブルークンシャ(bhrūkuṃśa)と呼んだと言っているが、ナタが演劇に従事したことに関しては確証を残さない。もちろん当時、クリシュナ天によるカンサの誅戮(Kaṃsavadha)、悪魔バリの捕縛(Balibandha)が、何らかの形で、シャウビカ(śaubhika)と呼ばれる職業的演技者によって上演されたことを伝えているが、これもまた、真の戯曲の上演か、身振狂言の一種と見るべきか、容易に決定を許さない。ほぼ同時代に属する遺跡として、ヴィンディヤ丘陵のチョーター・ナーグプルにラームガリー洞窟があり、そこに残る碑文によって、この洞窟がある種の演技に使用されたことが知られる。とにかく前二世紀に、演劇に類する興行がすでにあった点は看過できない。またインドには普通の演劇のほか、影絵芝居および人形芝居もあり、演劇の起原をこれに求めた学者もあるが、インドに関する限り、これを真の演劇の先駆と見なし得る確かな論拠は見出せない。

次に古代の祭式の中には、一種の茶番に似た要素があり、このような茶番あるいは身振狂言が、早くから民衆の娯楽として発達したことも想像に難くない（第一二節中のプラハサナおよびバーナ参照）。しかし祭式中の狂言的動作の目的は、神秘的・呪法的効果にあって、これをそのまま演劇に結びつけて考えることはできない。ただし民衆娯楽の場面を、宗教儀式が模倣したことは可能である。そう考えれば、劇の発達に寄与した一要素を、ここに求めることも不可能ではない。他面において、民間信仰の中心をなしたクリシュナ天の崇拝、国民的英雄ラーマの崇拝が、演劇に重要な題材を提供して、その発達を促したことも明瞭で、ヒンドゥー教の主要神シヴァ天が、「ナテーシュヴァラ」(naṭeśvara「舞踏者の主」)、「マハー・ナタ」(mahānaṭa「大舞踏者」)と呼ばれ、演劇の保護者と仰がれる事実を考えれば、劇と宗教との関係が、いかに密接であるかを知るに足る。後世においても、演劇の主な機会は、春の祭であり、民間信仰の的であった諸神の祭典である。最も重要な劇用プラークリット（第一一節参照）にその名を与えたシューラセーナ地方の首都マトゥラーが、クリシュナ天誕生の地とされることも、決して偶然の一致とは思われない。ただし演劇の起原を、民衆娯楽あるいは宗教儀式にだけ求めることは、一方的見解の譏をまぬかれない。

最後にインドの二大叙事詩「マハーバーラタ」と「ラーマーヤナ」の中にも、西紀以前に演劇の存在したことを明示する証拠は発見されない。しかし叙事詩と演劇との関係は非常に密接で、

戯曲の基本的形式とされるナータカは、その資料を叙事詩に仰ぐこととなっている（第一二節参照）。叙事詩の暗誦の流行は、非常に古い時代に始まり、すでに挙げたパタンジャリは、シャウビカのほかに、グランティカ(granthika)について述べ、後者が会話の分担を行ったことを暗示している。後世俳優を意味する単語の一つに、バラタまたはバーラタ(bharata, bhārata)という言葉があり、これが、現代の吟遊詩人のカースト名バート(bhaṭ)に相当することも、演劇と暗誦との関係を偲ばせる。また有名なサーンチーの浮彫像（前一世紀）の中に、楽器を手にしつつ身振をしている群があり、職業的暗誦者カタカ(kathaka)に比定される。叙事詩の暗誦は単なる吟詠にとどまらず、早くから演劇の領域に一歩を進めていたものと認められる。クシーラヴァ(kuśīlava)という言葉が、「ラーマーヤナ」の暗誦者から転じて、俳優の意味になったことも、この間の消息を窺わせるものといえる。

以上を総括して言えば、西紀前に真の演劇の存在したことを、直接に証明する資料は挙げられないが、その発達に必要な要素は十分に備わっていたと認めなければならない。すなわち、最古の時代から歌舞音楽を愛好し、会話を交えた讃歌の存在したこと、民衆娯楽としての狂言的要素が祭式中に採用された形跡のあること、クリシュナ、ラーマ、シヴァ等に対する民間信仰の勃興、叙事詩暗誦の流行、その暗誦者が音楽・身振あるいは会話の分担等劇的要素を加味したこと、パーニニ文典に挙げられた「ナタ・スートラ」、パタンジャリの伝える演技者シャウビカならびに

暗誦者グランティカ、ラームガリー丘の洞窟上演場、サーンチー彫刻に残るカタカの像、これらはおよそ前四世紀から二世紀に至る間に、演劇の完成に必要な諸要素が、準備されていたことを示すに十分である。しかも二世紀に属するアシュヴァゴーシャの戯曲の断片は、当時すでに演劇が高度の発達をとげていたことを如実に証明する。要するにサンスクリット劇の成立は、パタンジャリとアシュヴァゴーシャとの中間、恐らく西紀前後に置いて大過あるまい。比較的幼稚な身振狂言から芸術的戯曲への推移は、必ずしも徐々の変化による長日月を要しない。劇の要素は十分に存在し、ただ天才の出現を待つのみであった。アシュヴァゴーシャに先だち、真の戯曲への飛躍を完成した詩人の名およびその作品の伝わらないのは、千歳の痛恨事である。

一五、カーリダーサの前後　カーリダーサの三戯曲については「カーリダーサとその作品」の中に述べた。彼の前後にわたって、劇文学の歴史を説くのは、この文章の目的を逸脱することであるが、読者の参考までに、極めて顕著な作家・作品について略述する。

1．カーリダーサ以前

インドの劇文学の冒頭を飾る作品は、意外にも「ブッダ・チャリタ」(Buddhacarita「仏所行讃」)の作者として有名な仏教詩人アシュヴァゴーシャ(Aśvaghoṣa 馬鳴、二世紀、カニシュカ王と同時代)の「シャーリプトラ・プラカラナ」(Śāriputraprakaraṇa)の断片である。中央アジアの

トゥルファンから出た貝葉写本の中に発見され(一九一一年)、本来九幕からなったプラカラナ(第一一節参照)で、仏陀がシャーリプトラ(舎利弗)およびマウドガリヤーヤナ(目犍連)を改宗させる物語を扱っていることが明らかにされた。これと同時に発見された二種の戯曲断片の中、一つは全篇サンスクリットを用いた寓意劇で、他は娼婦、ヴィドゥーシャカ、上記の二大仏弟子等の登場する劇である。恐らくこれらもまた、馬鳴自身の作かと想像される。プラークリット(第一一節参照)は、古典期の作品に見えるものより古めかしい語形を保ち、シャウラセーニーのほか、マーガディーおよびアルダ・マーガディーの古形が使用されている。最後に挙げたプラークリットは、バラタの「演劇論」によって認められながら、カーリダーサ以後の作品に使用された例がない。劇の形式は、ほとんど古典期のそれと区別なく、すでにヴィドゥーシャカの型が発達していたことは、注目に値する。

カーリダーサがその先駆として挙げる作家の一人にバーサ(Bhāsa)があり、「スヴァプナ・ヴァーサヴァダッター」(Svapnavāsavadattā「夢に現われしヴァーサヴァダッター」)の作者として、その名声は後世に伝わった。二十世紀の始め(一九一〇年)、南インドのトラヴァンコールで発見された十三種の戯曲が、果してこのバーサの真作であるとすれば、インド演劇史は、馬鳴とカーリダーサの間に、重要な一段階を現存の作品について窺い得ることとなる。これらの戯曲をバーサに帰することの当否は、以来学界の争点となり、双方に有力な論拠があって、いまだ最後の決

定を見るに至らないが、最近はこれを否定する傾向が強い。またバーサ自身の年代も確実には分らず(三世紀または四世紀?)、バーサの問題を離れてこれらの戯曲の年代を決定する手段もない。プラークリットは、馬鳴の場合と同じく、シャウラセーニー、マーガディーのほかに、アルダ・マーガディーを交え、マーハーラーシュトリーは用いられていない。劇に関する規約に融通性のあった時代を偲ばせる点も少なくない。ただし全体として、馬鳴よりもむしろカーリダーサに近いことは否めない。発見された十三種の戯曲は概して短く、大叙事詩から主題をとったものより、古来の伝説にヒントを得て自由に創意を加えたと思われるプラカラナ類に秀作が多い。たといバーサの真作でないとしても、文体・筆致はその作者が決して凡手でなかったことを示している。ウダヤナ王とヴァーサヴァダッターとの恋愛を主題とし、大臣ヤウガンダラーヤナの苦心を描く「スヴァプナ・ヴァーサヴァダッター」(六幕)は、代表作と認められ、この同じ大臣を主人公としてその苦衷を描く「プラティジュニャー・ヤウガンダラーヤナ」(Pratijñāyaugandharāyaṇa「約束固きヤウガンダラーヤナ」四幕)、後に述べる「ムリッチャカティカー」の粉本として重要な「ダリドラ・チャールダッタ」(Daridracārudatta「貧しきチャールダッタ」四幕のみ残る)、王子アヴィマーラカと王女クランギーとの恋愛を中心に、空想的要素と現実性ある人物とを交錯させた「アヴィマーラカ」(Avimāraka)も、推称に値する。

　次に恐らくカーリダーサ以前の作品と思われるものに、シュードラカ(Śūdraka)の「ムリッチャカティカー」(Mṛcchakaṭikā「土の小車」十幕)がある。商人チャールダッタと高級娼婦ヴァサンタセーナーとの恋愛に取材した典型的プラカラナであると同時に、サンスクリット劇中の一大傑作と認められる。劇自身の述べるところによれば、作者シュードラカは学芸に通じた敬虔な君主であったという。しかしその史実性は甚だ疑わしく、劇の年代は恐らく四世紀に置くべきものと思われる。既に触れた通り、第一幕ないし第四幕は、バーサに帰せられる「ダリドラ・チャールダッタ」に先例があるとしても、筋の興味と場面の変化、登場人物の個性を躍如たらしめている手腕は、単なる模倣あるいは改作の域を脱し、異色ある名作たるを失わない。プラークリットの種類の多いことも、この劇の特色の一つで、既にマーハーラーシュトリーが使用されている。

　このほか、カーリダーサとの年代関係に不明の点のある戯曲が数篇ある中、その内容から見て特筆すべきものは、ヴィシャーカダッタ(Viśākhadatta)の「ムドラー・ラークシャサ」(Mudrārākṣasa「ラークシャサと印璽」七幕)である。ナンダ朝最後の王の忠実な宰相ラークシャサと、これを倒した、マウリヤ朝の創始者チャンドラ・グプタ王の名宰相チャーナキヤ(有名なカウティリヤの別称)とが、術策をたたかわせて各自の王のために競う一種の政治劇で、複雑な筋の興味と雄勁な運筆とは、サンスクリット劇中に特異の位置を確保するに十分である。同一作者に帰せられる他の戯曲二篇が、引用によって断片的に知られているが、その年代は不明である。「ムリッチャカティカー」を去ること遠くないとし、あるいはカーリダーサと同時代とする学者と、

遙かに後世の人とする学者とがあり、極端をとれば、三世紀と九世紀との間に動揺している。

２．カーリダーサ以後

カーリダーサ以後の古典期に出た大小の劇作家とその作品を、列挙する代りに、ただ代表的なものを若干指摘するにとどめる。

唐の玄奘が渡印した際、カーニヤクブジャに都して、広大な領域に勢威を張った戒日王ハルシャ(Harṣa Śīlāditya 七世紀)は、三篇の戯曲の作者として知られる。伝説に輝くウダヤナ王の恋愛を主題とし、代表的ナーティカー(第一二節参照)と目される「ラトナーヴァリー」(Ratnāvalī 女主人公の名、四幕)、同種類の「プリヤダルシカー」(Priyadarśikā 同上)、仏教的献身の精神に彩られた「ナーガーナンダ」(Nāgānanda「竜王の喜び」五幕)である。

しかしカーリダーサ以後、名実ともにこれに対抗し得た劇作家は、バヴァブーティ(Bhavabhūti)である。カーニヤクブジャに都したヤショーヴァルマン王(八世紀前半)の宮廷に仕えた詩人で、ラーマ王子の物語に取材した二篇のナータカ、「マハーヴィーラ・チャリタ」(Mahāvīracarita「大雄＝ラーマの所行」七幕)および「ウッタラ・ラーマ・チャリタ」(Uttararāmacarita「続ラーマの所行」七幕)、宰相の子マーダヴァと宰相の娘マーラティーとが、困難を克服して願望を成就する恋物語を描いたプラカラナ「マーラティー・マーダヴァ」(Mālatīmādhava 十幕)を残した。愛情と義務のディレンマを扱った「ウッタラ・ラーマ・チャリタ」は、特に傑作と認め

られ、迫力と悲愴の詩人、ラーマに理想化された正法の顕揚者、学殖の深いバラモンとしての真面目を発揮している。

彼とほぼ同時代に属するバッタ・ナーラーヤナ(Bhaṭṭanārāyaṇa)は、大叙事詩に取材した「ヴェーニー・サンハーラ」(Veṇīsaṁhāra「結髪」六幕)を書き、インドの理論家により、模範的戯曲と推称されている。恐らく九世紀に属するムラーリ(Murāri)の「アナルガ・ラーガヴァ」(Anargharāghava「至尊のラーガヴァ」七幕)は、「ラーマーヤナ」の物語を劇化したもので、バヴァブーティに範をとっているが、戯曲としては平凡である。詩論「カーヴィヤ・ミーマーンサー」(Kāvyamīmāṁsā)の著者として知られるラージャシェーカラ(Rājaśekhara)は、劇作家としても名高い。マラータのクシャトリヤ族の家に生れ、カーニヤクブジャのマヘーンドラ・パーラ王(およそ八九三―九〇七年)の師匠となった彼は、二大叙事詩の内容を主題とした「バーラ・ラーマーヤナ」(Bālarāmāyaṇa「童蒙ラーマーヤナ」十幕)と「バーラ・バーラタ」(Bālabhārata「童蒙マハーバーラタ」二幕、未完)のほか、ナーティカー形式による恋愛劇「ヴィッダ・シャーラバンジカー」(Viddhaśālabhañjikā「穿たれたる像」四幕)、女主人公の名を題とした「カルプーラ・マンジャリー」(Karpūramañjarī 四幕)を残した。最後に挙げたものは、全篇プラークリットのみで書かれたナーティカーで、形式にも異色を示している。マヘーンドラ・パーラ王の後を嗣いだマヒー・パーラ王(十世紀)の庇護を受けたクシェーミーシュヴァラ(Kṣemīśvara)の作としては、

ナラ王物語に取材した「ナイシャダーナンダ」(Naiṣadhānanda「ナラ王の喜び」七幕、未出版)と、敬虔なハリシュチャンドラ王の伝説を扱い恐怖の場面を含む「チャンダ・カウシカ」(Caṇḍakauśika「恐ろしきカウシカ」五幕)とがある。

「カルプーラ・マンジャリー」がプラークリットのみを用いているのに対し、全篇サンスクリットをもって書かれ、しかもほとんど全く韻文から成立っているものに、「マハー・ナータカ」(Mahānāṭaka「大戯曲」)がある。「ラーマーヤナ」の内容を劇化したもので、その中に活躍する猿将ハヌマットを神話的著者と伝えるため、「ハヌマン・ナータカ」(Hanumannāṭaka)とも呼ばれるが、年代は詳らかでない(九世紀以前?)。二種の異本によって伝わり、西印本は十四幕、五八一詩節からなり、東印本は九幕、七三〇詩節を含み、両伝本に共通する詩節は約三〇〇である。叙事詩と戯曲との中間に位するかのごとき観を呈し、古典期の形式と著しく異なっているので、影絵芝居の台本であると主張した学者もある。もし仮にこの説を認容するとすれば、真正の影絵芝居、スバタ(Subhaṭa)の「ドゥータ・アンガダ」(Dūtāṅgada「使者アンガダ」十三世紀)等の先駆をなすこととなるが、その可能性は甚だ少ない。なおサンスクリットのみで書かれ、牧歌的気分に満ちた聖劇「ゴーパーラ・ケーリ・チャンドリカー」(Gopālakelicandrikā「牧牛者＝クリシュナ天の遊戯の月光」六幕)があり、グジャラートの詩人、ラーマクリシュナ(Rāmakṛṣṇa 年代未詳、十二世紀以後)に帰せられる。

中央アジアで発見された断片の中に、寓意劇が残っていることは既に述べた。この種のものとしては、クリシュナミシュラ(Kṛṣṇamiśra)の「プラボーダ・チャンドラ・ウダヤ」(Prabodhacandrodaya「悟証の月出」六幕、十一世紀)が有名で、ヴィシュヌ派の教義を宣揚している。その後も多くの模倣が現われた。

通俗劇に根元をもつ戯曲形式、プラハサナおよびバーナが、後世多数に作られたことについては既に説いた(第一一節参照)。前者の先駆としては、パッラヴァ朝のマヘーンドラ・ヴィクラマヴァルマン(Mahendravikramavarman)の「マッタ・ヴィラーサ」(Mattavilāsa「酩酊者の戯れ」七世紀)があり、後者に属する最も古いものは、二十世紀に発見された(一九二二年)、「チャトゥル・バーニー」(Caturbhāṇī「四バーナ集」)で、六世紀ないし七世紀にさかのぼるものと考えられている。

要するにサンスクリット劇の古典期は、ラージャシェーカラの時代、すなわち十世紀の頃をもって、実質的に終りを告げ、その後に出た多数の作品については、詳しく述べる必要を認めない。

一六、むすび　インドに発達した文芸の他の領野におけると同じく、戯曲にも早くから理論・規約が強く影響し、詩人の自由を拘束した。基本的劇形式ナータカの題材は周知の説話に限られ、この点に関して比較的多くの自由をもったプラカラナあるいはナーティカーも、筋および主要人

物については伝統を墨守して変化に乏しく、詩人は個性の躍動または現実の描写に手腕を振うより、いかに巧妙に詩句を綴り、修辞の技巧を弄ぶかに腐心した。冷酷な運命と戦いつつ、しかも不当に悲惨な境遇に苦しむ主人公、強烈な意志と運命との闘争から起る悲劇は、ここに求められない。一切は善悪因果の鉄則に束縛され、現世の禍福は自業自得、他人の容喙を許さない。このような人生観に甘んじ、バラモンと王侯の特権を是認し、ヒンドゥー教の命ずる信条に服従し、しかも戯曲においては、善人が必ず栄え、悪人が必ず亡びる理想的一面だけを演出し、主人公は常に目的を達成するに定まっていたから、ついに深刻な悲劇や含蓄ある社会劇は発達しなかった。一篇を貫く「情調」(第七節参照)の理論を強調しつつも、「恋情」と「勇武」の二種を偏重し、同一あるいは類似の主題を繰り返して倦むところを知らない。バヴァブーティはその「ウッタラ・ラーマ・チャリタ」において、やや悲劇の領域に肉迫しながら、ハッピー・エンドの規約に束縛されて、真の悲劇の感銘を減殺してしまった。カーリダーサの「シャクンタラー」に、名工彫琢の苦心を認め得るとしても、深刻な人生問題に触れた実社会の描写は求められない。サンスクリット文学一般と同じく、サンスクリット劇も王侯貴紳の保護によって隆昌し、貴族的趣味に迎合し、一般民衆との緊密な接触を保たなかった。やがてイスラーム政権の下に衰微し、滅亡の道をたどるに至ったのもやむを得ない。

しかし古典ギリシャ劇がギリシャ精神の発現であったように、サンスクリット劇はヒンドゥー

教的人生観・社会観を反映し、古典インド文芸の一大頂点を代表する精華である。時代の背景、演劇論の規約を前提として許すならば、また原文の妙味を直接に鑑賞し得るならば、少なくも傑作に関するかぎり、サンスクリット劇は他国の古典に比べて、いささかの遜色もない完成品と称することができる。現代の感覚を尺度として、サンスクリット劇を是非することは無理であり、サンスクリット文学の制約を離れて、これを理解することはできず、翻訳を通してこれを批判することもまた、困難であるのを忘れてはならない。

追記

古典サンスクリット劇一般、カーリダーサとその作品、特に「シャクンタラー」については、拙著『サンスクリット文学史』(岩波全書二七七、第二刷、一九七四年)の当該個所(四―八頁、四一―六〇頁、特に四六―五〇頁)に、文献を添えて述べたから、特に追加することはない。ただ前掲書二二五頁下から八行に挙げた A. Scharpé の Kālidāsa-Lexicon, vol. II: References, Brugge 1975 が出版されたことを附記するにとどめる。

一九七七年七月

訳者